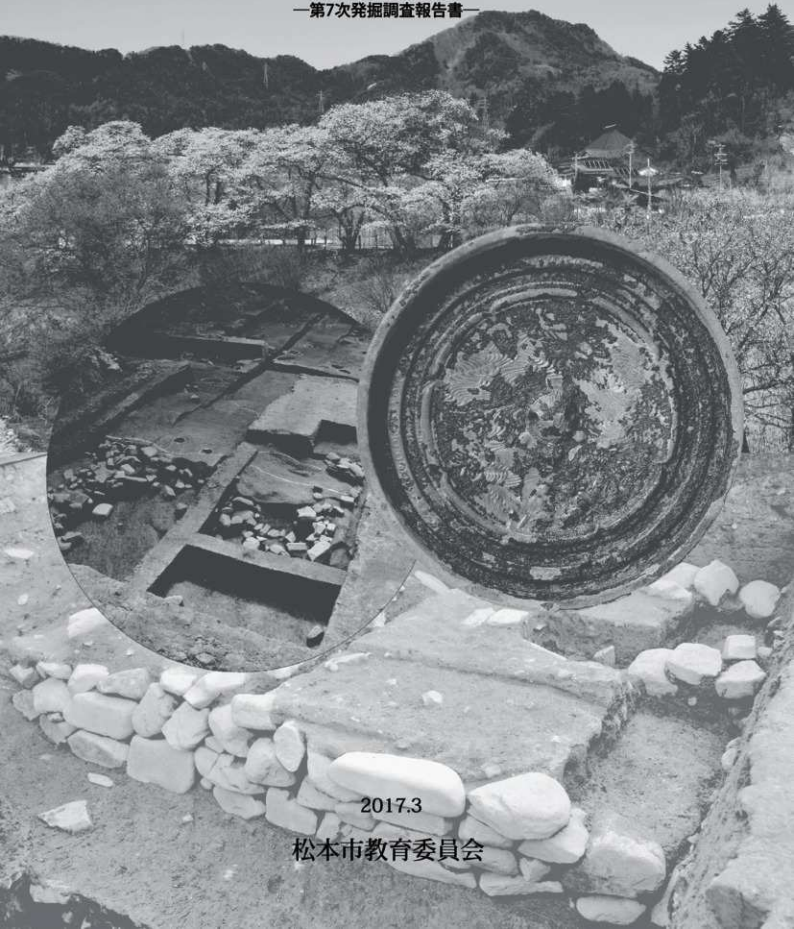


# 殿村遺跡

—第7次発掘調査報告書—



2017.3

松本市教育委員会



# 例 言

- 1 本書は、平成27年度殿村遺跡調査事業に係る殿村遺跡第7次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成まで、一連の作業は平成27・28年度国庫補助事業として実施し、現地における発掘調査は平成27年5月18日から同年11月6日まで実施した。
- 3 本書の執筆は以下の分担で行った。  
第1章：事務局、第2章：宮島義和、第3章第1節・第2節・第3節1・3～5：伊藤 愛、同第3節2：原田健司、第4章第1節：(公財)元興寺文化財研究所、同第2節1・2：(株)加速器分析研究所、同3：バリノサーヴェイ(株)、第5章：竹原 学
- 4 本書作成に係る作業分担は以下のとおりである。  
遺物実測 焼物・土製品：竹内直美、石器：原田健司、木製品：荒井留美子、金属製品：洞沢文江・(公財)元興寺文化財研究所(青銅鏡)、拓本：洞沢文江(銭)  
遺物写真撮影 宮嶋洋一、(公財)元興寺文化財研究所(青銅鏡)  
DTP 挿図トレース・レイアウト：伊藤 愛(遺構・焼物)・原田健司(石器)  
写真図版作成・版組全般：伊藤 愛
- 5 本書の中で使用した遺構の略称等は、以下のとおりである。  
竪穴状遺構→竪、建物跡(礎石・掘立柱)→建、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝
- 6 焼物(土器・陶磁器)実測図における断面の塗り分けは以下のとおりである。  
白：土師器・土師質土器、黒：炆器(須恵器)・陶磁器、灰：瓦質土器
- 7 遺物図中における上記以外の灰色トーンの意味は以下のとおりである。  
土師質土器皿：灯明としての使用痕であるタール・煤状炭化物、樹脂付着範囲
- 8 図中で使用した方位は真北を示す。また遺構図中に示した国家座標値(世界測地系・第8系)は、平成23年の東北太平洋沖地震発生以前の値で、地震変動に対する補正は行っていない。
- 9 本報告書では、第1次調査以降本調査までの間に実施した自然科学分析に係る報告を付録CDに収めた。
- 10 現地調査から本書作成までの間、以下の方々から指導・助言・協力を得た。なお、調査指導委員等関係者については第1章に記した。  
市川恵一、遠藤公洋、河西克造、久保智康、小林有人、白沢勝彦、高橋卓志、谷川光昭、引地節子、藤澤良祐、望月道彦、森 まどか、横内文人、会田新町町会、神宮寺(敬称略)
- 11 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189)に保管している。

# 目 次

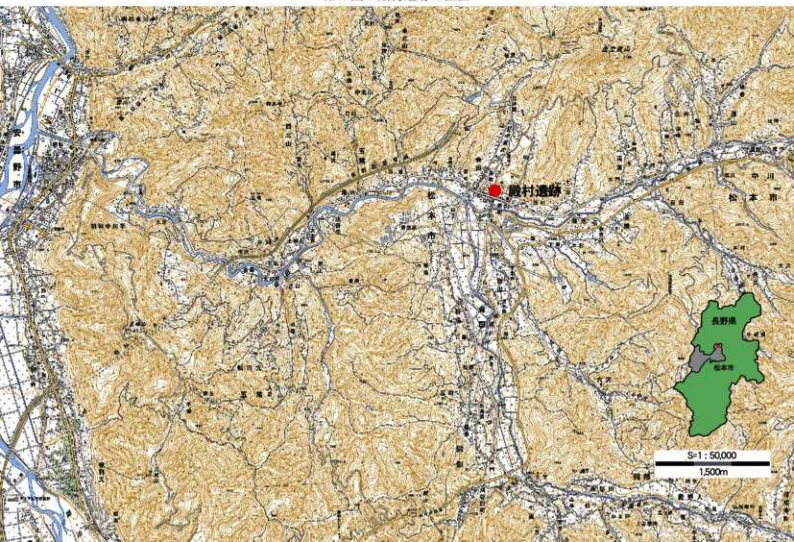
例 言

目 次

第 I 章 調査事業の概要	
第 1 節 事業の経緯	5
第 2 節 第 7 次調査の経過	7
第 3 節 調査体制	8
第 II 章 歴史的環境	9
第 III 章 第 7 次調査の成果	
第 1 節 調査の目的と方法	13
第 2 節 遺構	23
第 3 節 遺物	52
第 IV 章 自然科学分析	
第 1 節 7E1 トレンチ池 1827 出土擬漢式鏡の蛍光 X 線分析及び顕微鏡観察	65
第 2 節 7E1 トレンチ採取試料の自然科学分析	
1 殿村遺跡における放射性炭素年代	68
2 殿村遺跡出土炭化材の樹種	69
3 殿村遺跡の珪藻分析	76
第 V 章 調査のまとめ	83

写真図版  
報告書抄録  
奥 付  
付録 CD-ROM 殿村遺跡 1 次調査 A 区出土試料の科学分析ほか

第 1 図 殿村遺跡の位置





# 第 I 章 調査事業の概要

## 第 1 節 事業の経緯

### 1 第 1 次調査と保存に至る経過

殿村遺跡は、松本市大字会田字殿村 536 外に所在する縄紋時代～中世の複合遺跡である。松本市教育委員会が平成 20 年に実施した四賀地区統合小学校（四賀小学校）建設に係る第 1 次発掘調査では、縄文・古代の集落跡との当初予想に反して、15 世紀代の石積を伴う中世の大規模な造成遺構が検出され、しかも 16 世紀にかけて数回にわたる拡張により遺構面が複雑に重層する状況が確認された。

これにより調査期間が大幅に超過したため、担当課である文化財課と学校教育課は再三にわたって協議を重ね、調査期間の延長を図った。一方、調査成果に対して次第に各方面からの注目が集まることとなり、保存要望も寄せられるようになった。そして、平成 21 年 7 月に至って四賀地区町会連合会から、「殿村遺跡保存及び四賀小学校早期建設に関する要望書」が提出された。これを受けて、松本市は、遺跡の現地保存と学校建設地の移転を決定した。その後の調査は、記録保存から保存目的の確認調査へと方針転換し、最後に保護砂の被覆等遺構保護のための措置を講じて、平成 22 年 1 月に第 1 次調査が終了した。

### 2 調査指導委員会の発足と総合調査の計画

保存決定により、市教育委員会は、文化庁および長野県教育委員会の助言を受け、平成 22 年度から専門家による殿村遺跡調査指導委員会を発足させ、その指導の下で遺跡の範囲や内容を明らかにし、性格を究明するための確認調査を継続的に実施していくことを決定した。

第 1 回調査指導委員会（平成 22 年 4 月開催）では、第 1 次調査の概要と保存に至る経過の報告、今後の発掘調査計画を確認した。一方、各委員からは、殿村遺跡を取り巻く歴史的景観が重要で、とりわけ中世以前の虚空蔵山麓一帯に宗教空間が広がっていた可能性が高く、殿村遺跡はそこに所在する宗教施設のひとつではないかとの指摘を受けた。それを踏まえ、今後の調査は、殿村遺跡の発掘調査だけでなく、宗教空間全体を対象とした総合的な調査を実施し、その中で遺跡の位置付けがなされるべきとの指導を得た。

### 3 殿村遺跡調査事業

そこで、市教育委員会は、あらためて計画を見直し、発掘調査を軸とした総合調査として「殿村遺跡調査事業」を計画した。そこでは、遺跡（点）から地域・背景（面）へと視点を拡大させ、殿村遺跡の発掘調査を事業の柱に、周辺の城跡跡、景観、社寺・信仰資料等の調査を実施していくこととした。

事業の柱となる殿村遺跡の発掘調査については、遺跡の内容確認に加えて将来的に保護すべき範囲を把握することを目的に、特に① 1 次調査で検出された石積を伴う造成遺構について外郭構造を中心とした全体像の把握、② 中世の造成遺構の分布範囲と保存状況の確認、③ 遺構群の時間的・空間的位置付けと性格の解明等を主眼に進めることとなった。

### 4 計画に基づく調査の実施（第 1 表・第 2 図）

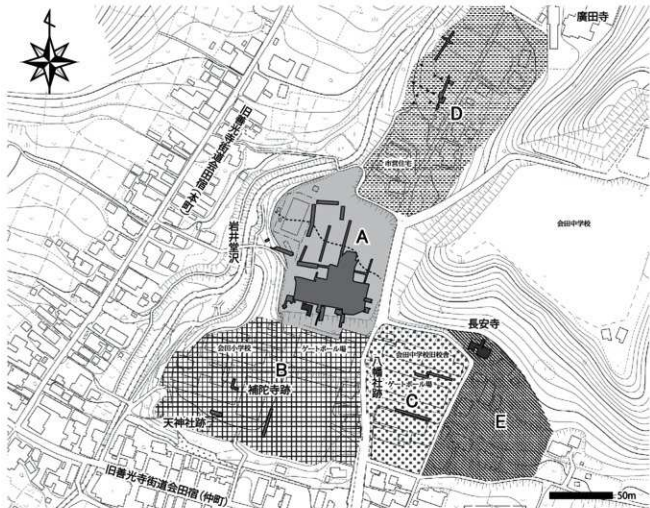
調査計画では、南北約 400 m・東西約 300 m に及ぶ遺跡推定範囲を A～E の 5 ゾーンに分割し、毎年、A ゾーンにおける内容確認のための調査と、他ゾーンにおける範囲把握を主目的とした調査を組み合わせる行うこととした。また、調査報告書は次年度に刊行し、最終年度に総括編を刊行することを目標とした。

この計画に基づき、平成27年度は、2カ所（7A1・7E1）の発掘調査を実施するとともに、第6次調査（平成26年度実施）報告書をまとめた。また、平成28年度は、第7次調査の整理作業と報告書作成を進めるとともに、第8次調査（8B1）を実施した。

なお、調査事業の進展に伴い、殿村遺跡と密接な関係を有すると考えられる虚空蔵山城跡についても、発掘調査による確認が必要との判断に達し、平成24年度から3回の計画で調査を開始、平成28年度に3回目となる第4次調査を実施した（平成26・27年度は未実施）。

第1表 調査計画

ゾーン	予想される検出遺構等	土地利用状況		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
				2次	3次	4次	5次	6次	7次	8次	9次	
A	中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	空地	市有地	1次調査区周辺								
B	旧補陀寺関連遺構（中・近世） 旧天神社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	学校 住宅 GB場	市有地、 一部民有地				校舎 校庭			校舎 校庭		
C	長安寺関連遺構（中・近世） 八幡社関連遺構（近世） 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	旧校舎 GB場	市有地	旧校舎 周辺		旧校舎 周辺				旧校舎 周辺		
D	廣田寺関連遺構 中世造成面 縄紋・古代～中世前半期遺構面	畑地 宅地	民有地 一部市有地					休耕田 荒地				
E	長安寺関連遺構（中・近世） 縄紋・古代～中世遺構面	畑地 宅地	民有地						長安寺 跡地		畑地	
調査報告書刊行				1次 概報	2次 報告	3次 報告	4次 報告	5次 報告	6次 報告	7次 報告	8次 報告	9次報告 （総括編）



第2図 ソーニング

## 第2節 第7次調査の経過

今回報告する第7次調査は、平成27年度国庫補助事業として実施したものである。調査箇所は2カ所(7A1トレンチ、7E1トレンチ)で、平成27年5月18日に着手、同年11月6日に終了した。また、報告書の作成は平成28年度国庫補助事業として行った。

調査から報告書刊行までの一連の事務および作業の経過は以下に示すとおりである。

### <平成27年>

- 2月9日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 3月21日 殿村遺跡とその時代V—平成26年度発掘報告会・講演会開催(ピナスホール)
- 3月25日 第5次発掘調査報告書刊行
- 3月31日 平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書提出
- 4月9日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
- 4月10日 平成26年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の決定通知
- 5月18日 殿村遺跡第7次調査開始
- 7月29日 殿村遺跡現地説明会開催(第1回)
- 9月26日 殿村遺跡現地説明会開催(第2回)
- 10月14日 平成26年度調査指導委員会開催(第1回)
- 10月17・18日 平成26年度調査指導委員会開催(第2回)
- 11月6日 殿村遺跡第7次調査完了
- 12月1日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金変更承認申請書提出

### <平成28年>

- 2月1日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定変更通知
- 2月2日 平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 3月25日 第6次発掘調査報告書刊行
- 3月26日 平成27年度発掘報告会・講演会開催(四賀支所ピナスホール)
- 3月31日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書提出
- 4月1日 平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
- 4月11日 平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の決定通知
- 5月23日 虚空蔵山城跡第4次調査開始
- 10月5日 殿村遺跡第8次調査開始
- 10月21日 虚空蔵山城跡第4次調査終了
- 11月10・11日 平成26年度調査指導委員会開催
- 12月2日 平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金変更承認申請書提出
- 12月6日 殿村遺跡現地説明会開催

### <平成29年>

- 1月1日 殿村遺跡第8次調査完了
- 2月8日 平成29年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
- 3月18日 平成28年度発掘報告会・講演会開催(四賀支所ピナスホール)
- 3月27日 第7次発掘調査報告書刊行

### 第3節 調査体制

#### <平成27年度>

- 調査団長 赤羽郁夫（松本市教育長）  
調査担当 竹原 学（課長補佐・史跡整備担当係長）、宮島義和（研究専門員）、伊藤 愛（嘱託）  
調査員 青木教司、市川恵一、浜野安則  
発掘協力者 茅野信彦、鳥井和幸、長岩千晴、待井正和、古屋美江、矢満田伸子  
整理協力者 荒井留美子、市川二三夫、柏原佳子、竹平悦子、洞沢文江、三澤栄子、村山牧枝  
事務局 松本市教育委員会文化財課  
内城秀典（課長）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（同主査）、  
吉見寿美恵（同嘱託）

#### 殿村遺跡調査指導委員会

- 委員長 笹本正治（信州大学副学長）  
委員 小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
辻 誠一郎（東京大学大学院教授）  
中井 均（滋賀県立大学教授）  
中澤克昭（上智大学准教授）  
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課参事・文化財係長）  
指導・助言 櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

#### <平成28年度>

- 調査団長 赤羽郁夫（松本市教育長）  
調査担当 竹原 学（課長補佐・史跡整備担当係長）、福富彩子（主事）、宮島義和（研究専門員）、  
伊藤 愛（嘱託）、栗田 愛（同）  
調査員 青木教司、浜野安則  
発掘協力者 黒崎 葵、鳥井和幸、長岩千晴、西村一敏、待井正和、古屋美江、矢満田伸子  
整理協力者 天野雅代、荒井留美子、市川二三夫、柏原佳子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、  
竹平悦子、洞沢文江、前沢里江、宮本章江、村山牧枝  
事務局 松本市教育委員会文化財課  
木下 守（課長）、直井雅尚（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、櫻井 了（同主査）、  
吉見寿美恵（同嘱託）

#### 殿村遺跡調査指導委員会

- 委員長 笹本正治（長野県立歴史館長）  
委員 小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）  
辻 誠一郎（東京大学大学院教授）  
中井 均（滋賀県立大学教授）  
中澤克昭（上智大学准教授）  
水澤幸一（新潟県胎内市教育委員会生涯学習課参事・文化財係長）  
指導・助言 近江俊秀（文化庁文化財部記念物課調査官）  
柳澤 亮（長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事）

## 第Ⅱ章 歴史的環境

第8次調査は、平成25年まで現存していた長安寺本堂(図1)跡地を対象の一つとした(7E1トレンチ)。長安寺は『信濃国道者之御祓くばり日記』(天正9年・1581)にも補陀寺、糸ヶ寺、無量寺、知見寺とともに会田にあった寺として名を連ね、開創が中世以前に遡る寺院として知られる(図2)。その位置や時代は殿村遺跡の消長とも重なり、宗教施設と目される平場跡群と現存寺院との関係解明は調査上の大きな課題である。そこで本章では現存資料や寺伝から長安寺の沿革について触れておくこととする。

### 1 中世の長安寺

長安寺所蔵資料には中世に遡るものはないが、明治43年(1910)に恵光院兼務住職中原祖傳により妙心寺に提出された「寺籍調査表」に開創由緒が記されている。

これによると、長安寺は文永3年(1266)7月に鎌倉建長寺開祖大覚禪師(蘭溪道隆)が開山したとある。現在松本市役所西四賀支所に寄託されている室町時代制作と推定される頂相像(図3)は、大覚禪師の姿をあらわした像と伝えられ、開山由緒に関わる宝物として本尊の虚空蔵菩薩とともに堂内に安置されてきた。「天文3年(1534)海野小太郎幸継の次男会田小次郎廣政が陣中の念誦仏虚空蔵菩薩の霊像を安置し祈願の道場」とした。これにより境内・田畑・山林は除地となった(近世以降長安寺は「虚空蔵免」という除地を所有していた)。廣政は鷲ヶ峯の山腹に城を築きこれを高築地城といった。長安寺は古くは山号を太平山といったが、城の地名を用いて鷲峰山と改め、本尊も釈迦如来を改め虚空蔵菩薩とした。永禄4年(1561)に廣政は武田家に伏して甲府へ移る。その後村民の希望によって鷲ヶ峯の絶頂の岩屋に堂宇を建立し虚空蔵菩薩を安置した。よって鷲ヶ峯を虚空蔵山とも呼び長安寺の奥の院と称した。

ここまでがおおよそ中世に該当する歴史になるだろう。ただしこれには矛盾がある。大覚禪師を開祖として長安寺が開山され、その後会田氏によって本尊が虚空蔵菩薩に替えられ、奥の院の堂宇(現岩屋神社)が成立した点である。実際、本尊が虚空蔵菩薩像であることから、長安寺はかつて密教または修験道にかかわりを持っていた寺院であることが窺える。よって鎌倉時代に開山者として大覚禪師が招聘されたということは、この時点で長安寺は臨済宗の寺になったと考えるのが自然である。おそらく鎌倉時代に海野氏が会田御厨に地頭として入部した頃の長安寺は真言密教系の寺院で、虚空蔵菩薩を祀る岩屋神社は修験の場であったものと推定される。それを臨済宗に改宗したものと思われる。

昭和50年代に松本県ヶ丘高校風土研究部が行った住職竹内昇圓への聞き取り調査(『嶺間』1979)によれば、かつては旧会田中学校の敷地が全て長安寺の土地で、そこに間口13間奥行7間の本堂があったという。また、本調査事業に伴って実施した竹内昇圓の娘にあたる引地節子氏からの聞き取りでは、旧会田中学校グラウンド(殿村遺跡第1次調査地点)にかつての本堂があったともいう。その内容はともかくとしても、中世の長安寺がかなり規模の大きいものであったと言い伝えられてきたことがわかる。

さらに、会田氏滅亡とともに本堂が焼け落ち、それまで馬屋だった場所すなわち現在地に本堂が移ったという。長安寺は檀家を持たずに会田小次郎からの縁によって生計をたてていたと言われており、会田氏と長安寺の結びつきが強かったという言い伝えも残っている。殿村遺跡を考察するうえで、両者の関係解明は重要な課題である。

天正10年(1582)の会田氏滅亡後の長安寺と小笠原氏のつながりがわずかにみられる。長安寺所蔵資料の中に「長安寺境内横墓地ノ内ヨリ書出シス」というものがあり、「小笠原但馬守新野三良治郎直政墓 光明院殿一尊叟淨心大居士 天正十三年五月二十二日没」と書かれている。天正13年(1585)はまさに

会田氏滅亡直後のことであり、小笠原氏が会田に入ってくるのには絶好のタイミングであったと言えるだろう。この小笠原系の新野氏の墓は長安寺付近にあったらしく、文久元年（1861）の源氏新野静泉の墓誌の拓本が長安寺に保管されている（図4）。また、本堂跡の東に続く墓地内には和歌が刻まれた墓石（歌碑か）が現在でも残っている。人物銘は「新野小笠原家女貞」とあり、紀年銘は「萬延元庚申年（1860）」である。「新野氏」を名乗る小笠原家の一族が戦国末期から近世にかけてこの地に根付いていたことを物語る。

## 2 近世の長安寺

前掲の「寺籍調査表」には寛文10年（1670）に松本の恵光院2世列山和尚（列山宗秀）を中興として、長安寺を末寺としたことが書かれている。享保9年（1724）に編述された『信府統記』には「泰平山長安寺 恵光院ノ末寺ナリ會田與會田町ニアリ」と記されており、この段階ではまだ山号は「鷲峯山」ではなかったことがわかる。長安寺の伽藍は明治6年の地籍図等に江戸期の会田宿整備により南面する堂宇や参道が整えられた様子を窺うことができ（第8図）、また、明治期の『信濃寶鑑』所載の見取図（図5）や長安寺に残された間取り図（図6）から、仏間や庫裏が一体となった今はなき本堂の姿を窺うことができるが、残念ながらその建立時期については解体時の確認もできず不明のままとなってしまった。

本堂跡の東に続く墓地については、いわゆる「墓檀家」の墓地で長安寺の檀家のものではなく、土地を借用しているものだが、その中に混じって5基の無縫塔群がある。これらは長安寺の住職墓といわれる。5基のうち2基は明治のもので、中央に「七世了峯禪達」塔がある（図7）。これは「寺籍調査表」の歴代住職名と一致する。紀年銘が「十五庚戌天」であることから享保15年（1730）と考えられる。右端には「八世眼堂恵濟首座」塔があるが紀年銘が読み取れない。「寺籍調査表」では7世の後から「此ノ中間未詳」となっているので、それを埋める資料となる。また「當山中興美山龍大和尚」塔がある。紀年銘は「万延元庚申年（1860）」である。ここでいう「當山中興」とは何を示しているのか不明であるが、時代的に考えて解体された堂宇の築造に関わる可能性もある。

長安寺に関わる近世文書が2通残っている。一つは宝永4年（1707）「虚空藏山二付證文之事」（大河内家文書）である。大風による虚空藏山の風倒木の処置についての長安寺と両瀬村の争いの経過で、この時の風倒木は寺との相談の上売払い代金を虚空藏の費用にすることで決着した。この時の長安寺住持は禪達禪師という人物である。もう1通は安政2年（1855）の「虚空藏菩薩開扉回向始末書證帳」（長安寺所蔵文書）である。これは毎年奥の院（岩屋神社）で長安寺より虚空藏菩薩像を借り請け開扉を行っていることについて、両瀬村と長安寺の間に不念が生じ話し合いが延期にもつれた経緯があった（資金をめぐる争いなど）。結局双方示談となり、それ以来開扉はもちろん何事に限らず相談し合うが、祭礼のことに限っては両瀬村限りで取り計らうこととなった。いずれも岩屋神社を奥の院とする長安寺と、産土社として社殿を所有する両瀬村との関係を伝える資料である。

近世の寺請制度下においても、長安寺には檀家が存在しなかったことは、藤池村の宗門人別改帳（岩瀧家文書）等からもわかる。松本市立博物館に重要有形民俗文化財としての所蔵もある長安寺の田の神は、苗代に種もみを播いた後稲の生育を祈り護符をヨシに巻き水口に立てるもので（図8）、また護符となる牛玉宝印の版木も残っている（図9）。聞き取り調査によると、昭和30年代まで住職が農家1軒1軒に田の神を配ってまわり、祈祷をあげて米1升を貰い受けていた。長安寺があくまで祈祷を行う寺であったこと、またそれが寺の重要な収入源であったことを物語るものである。

## 3 近代以降の長安寺

明治期以降の長安寺の歩みは、財政難に起因する寺勢縮小の歩みとも言え、徐々に土地を手放し、寺域を



狭めていくこととなる。これは、もとより僧徒を持たない小寺院としての宿命ともいえるものであった。

明治期の住職は大祐祖榮・長倉祖榮・加藤祖敬・中原祖傳といった名が見える。また、無縫塔には「孝岳祖道」塔があり、紀年銘は明治2年(1869)である。「寺籍調査表」ではその次が12世大祐祖榮となっている。明治2年(1869)大祐祖榮は恵光院直宗和尚の法系を相続し、長安寺の法祖となった。もう1基の無縫塔には「大阿闍梨権僧都教盛法印」と刻されている。紀年銘は明治20年(1887)である。

明治43年には中原祖傳により「寺籍調査表」が作成される。なお、長安寺所蔵の「勸進注目」(版木)には明治13年(1880)3月の日付で、長安寺が岩井堂観音堂の別当であることが書かれており、観音堂は明治以降長安寺の管理になったことがわかる。これにより、信濃三十三観音霊場二十番札所の奉拝札は長安寺が発行することとなった(図10)。

大正期以降の住職には3人の名が見え、最後の住職は先にあげた竹内昇圓である。昭和17年(1942)に妙心寺に提出された「信徒名簿」によれば、その時点での信徒は116名であった(「信徒名簿」長安寺所蔵)。竹内昇圓は昭和21年(1946)に長安寺住職に選定されるが寺の経営は困難を極め、没後はずいぶん無住となった。その後堂宇の老朽化が急速に進行し倒壊の危険が迫ったことにより平成25年に解体の運びとなった。



図1 長安寺本堂と仏間(平成24年撮影)



図2 『信濃国道者之御かくぼり日記』に見える会田の寺院



図3 伝大覚禅師像(上)と底面の墨書銘(左下)



図5 『信濃實鑑』に描かれた長安寺

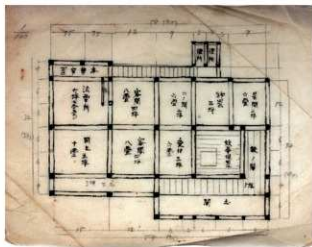


図6 長安寺本堂間取り図



図4 新野静泉墓誌拓影



図7 七世了峯禅達墓碑



図8 田の神



図9 牛王宝印版木

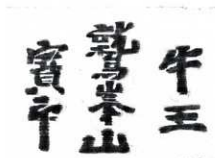


図10 信濃二十番札所奉拝札

## 第三章 第7次調査の成果

### 第1節 調査の目的と方法

調査地の選定とトレンチの配置（第3図） 殿村遺跡調査事業に係る一連の発掘調査は、①1次調査で検出した平場遺構周辺における整地層の広がりや外縁部の状況を確認すること（内容把握）と、②広大な遺跡内における中世造成遺構の広がりの確認（範囲確認）を目的として実施している。

7回目を数える今回の調査は、1次調査A区南西に接して7A1トレンチを設定し、平場南部に存在する石積・土塁からなる石積前空間の西端の状況と、平場南法面の状況把握に努めた。また、平成25年に解体された長安寺本堂跡における中世遺構の存在を確認するため、本堂跡地に7E1トレンチを設定し確認調査を実施した。

調査手順 7A1トレンチの調査は、まず厚さ1.5～2.0mに達するグラウンド造成土を重機で除去し、昭和28年当時の地表面を検出した。ここを調査開始面としてトレンチを設定し、以後人力作業によって層位的な掘り下げを行った。7E1トレンチは当初十字形に確認トレンチを設定し、重機で表土および本堂解体で攪乱された基壇盛土を除去した。そのうえで、中世遺構面の確認後は、可能な範囲で調査区を拡張して面的な調査に切り替えた。

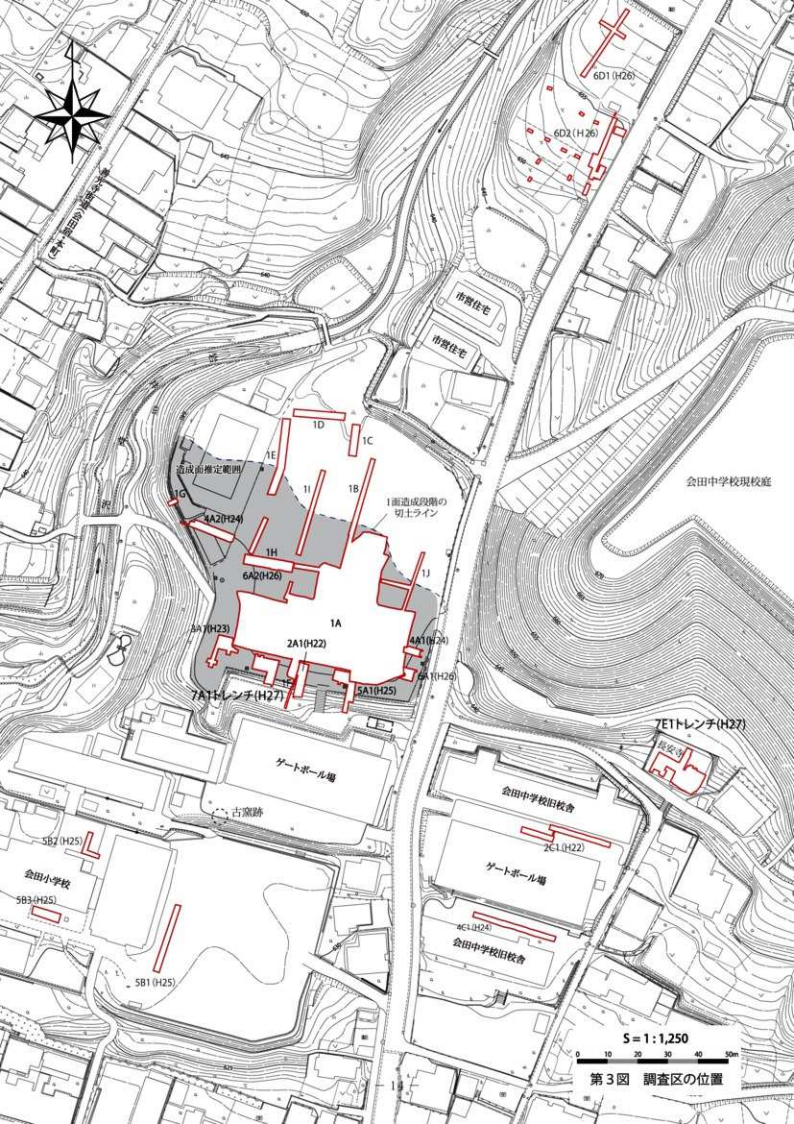
調査面・遺構名・番号管理 7A1トレンチでは、1次調査区で確認された1～5面までの全9段階の遺構面を確認した。下層の遺構面把握のため破壊を余儀なくされる上層、すなわち1～2面については記録保存調査を実施し、部分的に上層の遺構を残しながらも全体的に3・4面まで掘り下げを行った。以下5面まではサブトレンチによる一部調査を実施した。他方、7E1トレンチは中世の遺構面が第2面まで確認されたが、本堂解体工事に伴う破壊が著しい第1面までを記録保存調査とし、第2面を主体に遺構確認と半割までの掘り下げを伴う調査を実施した。

遺構番号はこれまで使用した番号に後続する区切りのいい数（1801～）から開始し、1次調査の方針に従い内容が判明した時点で種別を頭に冠した。石積・石列等特定の遺構も1次調査からの連番とした。

記録 7A1トレンチの測量基準は1次調査で設定したメッシュを踏襲した。国家座標（世界測地系・第8系）に拠っているが、1次調査との整合を図るため、東北太平洋沖地震以前の観測値を補正せず使用している。7E1トレンチについても同様で、平成22年度に設置した基準点から国家座標を導いた。

第2表 調査成果一覧

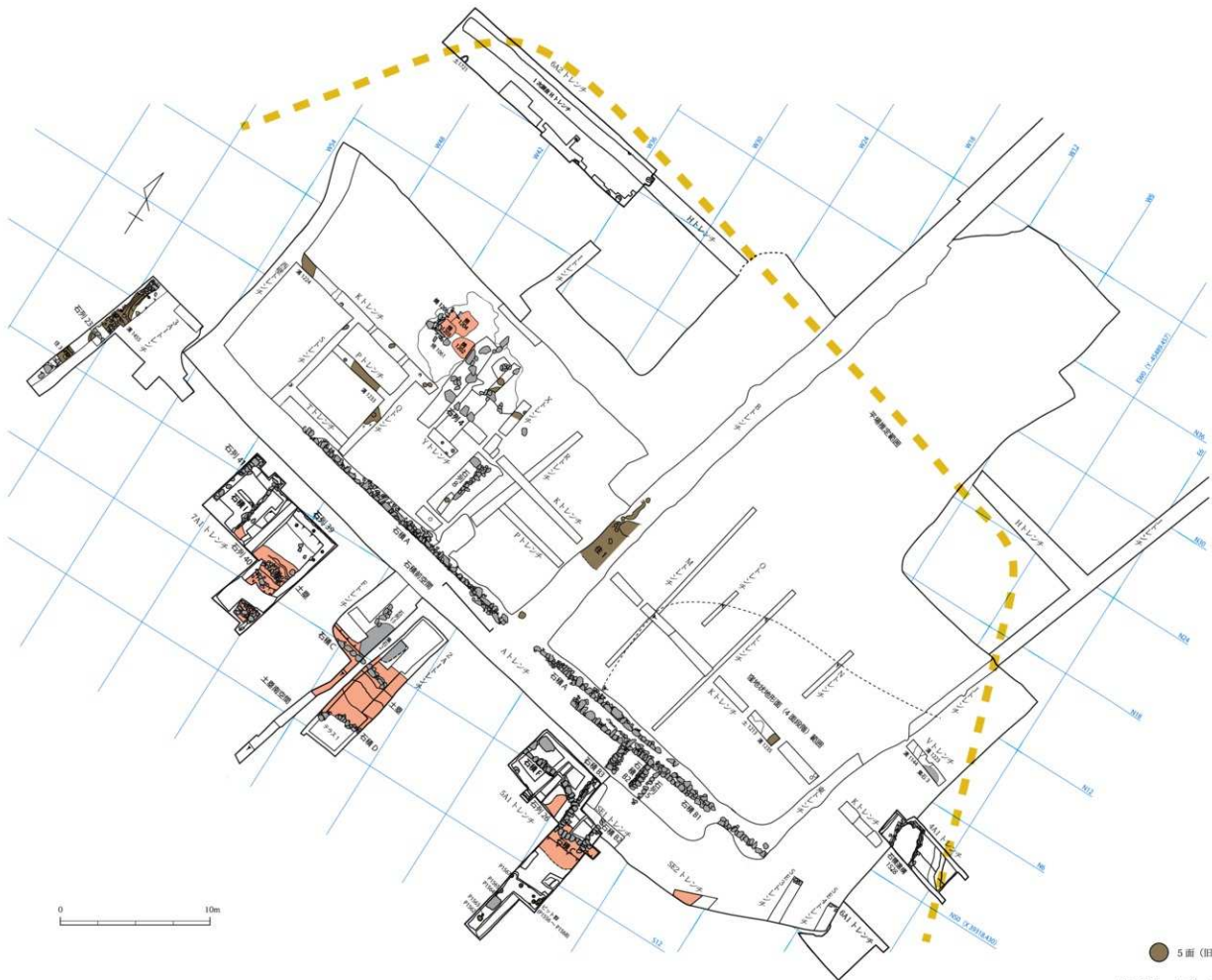
調査期間	平成27年5月18日～11月6日	調査面積	174㎡（7A1：49㎡・7E1：125㎡）
検出遺構		出土遺物	
<b>&lt;7A1トレンチ&gt;</b> 1面：ビット7基、土坑1基、竪穴状遺構1基 1'面：ビット1基 2面：ビット1基、柱列1基、石列1基、溝状遺構1基 2'面：礎石建物1棟、石列2基 2''面：ビット9基、土坑6基、礎石建物1棟、石列1基 2'''面：ビット1基、石列1基、溝状遺構1基 3・4面：土坑1基、石列2基、石積1基、土塁1基 5面：ビット4基 <b>&lt;7E1トレンチ&gt;</b> 1面：ビット5基、柱列1基、掘立柱建物1棟、石敷1基、池1基 2面：ビット27基、掘立柱建物1棟、礎石建物1棟、礎石2基、土坑1基、炉・焼土面3基、炭集中2基、溝状遺構2基 地山面：溝状遺構1基		縄紋：石器・石製品 奈良・平安：土師器・須恵器 中世：土師質土器（皿・内耳鍋） 灰器（常滑甕・中津川甕・須恵貫鉢鉢） 瓦質土器（風炉・火鉢） 無釉陶器：山茶碗 陶器（古瀬戸天目茶碗・折縁深皿・播鉢・小壺・大海茶入） 磁器（青磁碗・盤・香炉、白磁碗、青花皿） 土製品（瓦・利口） 石器・石製品（硯・砥石・石臼） 金属製品（鉄釘・銅銭・青銅鏡） 木製品（下駄・舟車状木製品）	



S = 1:1,250  
 0 10 20 30 40 50m

第3図 調査区的位置





● 5面 (旧地表・地山面) 検出箇所  
 第4図 Aゾーン調査区全体図 (5～3面)

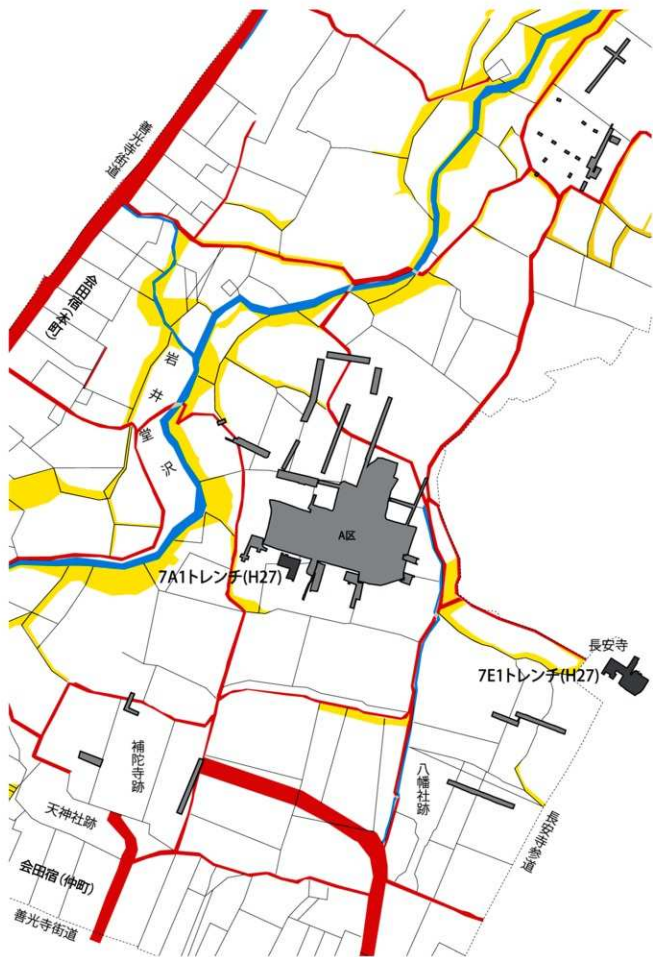


第5図 Aゾーン調査区全体図（2面）





第6図 Aゾーン調査区全体図(1面)



第7図 調査区と周辺の地割 (明治24年)



第 8 図 『明治 24 年会田町村絵図』(松本市役所四賀支所保管)に見る長安寺周辺

## 第2節 遺構

### 1 7A1トレンチ（第3・4表、第3～7、9～15図）

#### (1) トレンチの概要と土層構成、遺構の概要

トレンチの概要 本調査区は1次調査Aトレンチ（以下1Aトレンチ）南西部の標高639m地点に位置し、南北8.8m・東西8.1m（いずれもグラウンド盛土を除いた旧地面での規模）の逆L字形を呈する面積49㎡のトレンチである。これまでの調査では、平場南部に土塁と石積からなる石積前空間が存在することが確認されており、7回目となる今回の調査は、この石積前空間の西端の状況を把握することを目的として実施した。

調査地は平場の南部にあたり、昭和28年に造成されたグラウンドの端部から南へ向かう傾斜面となる。このグラウンド盛土を重機によって除去したところ、地表から約1.5～2.0mの深さで昭和28年以前の旧表土面に到達した。この面には戦前に療養所が建てられていた経緯がある。旧表土を剥がすと中世の整地土第1面が現れたが、後世に桑畑として土地利用されていた影響で畝状の攪乱が激しく、上層がほとんど削平された状態だった。以下調査は、2～2"面を経て石積Ⅰをともなう3・4面まで実施した。石積前空間はこの段階のものであり、石積と対をなして空間を形成する土塁が本調査でも確認できた。最古段階である5面は面的な調査は行わず、サブトレンチ内でピットを検出するにとどまった。5面から1面に至るまでの間に造成された整地土は厚さ1.7mを測り、8回にわたって平場の改変が行われていたことが明らかとなった。

土層構成 遺構面は全5面9段階からなり、1～5面は1次調査における各面に対応している。1面は後世の桑畑で攪乱されており、北区の検出面の大部分を竪穴状遺構1862が占める。黄褐色の風化泥岩塊が混ざる褐色系のシルト質の土で構成されている。1'面と1"面は平面での検出は行わず、壁面での確認となった。にぶい黄褐色のシルト層である。2面は柱列や溝などの明確な遺構が検出されている褐色～黄褐色の整地土で、上面は炭を多く含む。この面は調査区の東壁面は厚みを減じ、下層の2'面に着地している。2'面は上面に黄褐色の貼り土を施す、しまりの強い灰黄褐色の整地土である。きめの細かいシルト質を基調としており、2'面同様炭を多く含んでいる。2"面は各遺構面の基盤整地土では最も厚く、最大で85cmに達する。主要構成土である52層は礫を多量に含んでおり、大きさは10mm程から拳大・人頭大まで及ぶ。全体的に褐色を呈し、47・48層は石積Ⅰの埋土である。2'''面は北区の北東部でのみ確認された整地面であり、南に向かって緩く傾斜して4面と合流する。風化泥岩層を含む暗灰黄色の土で、粘土質で鉄分のみみられることから、地下水の影響を受けた層であると考えられる。なお、この面は1次調査Fトレンチで検出した石列13・集石2および5次調査Aトレンチで検出した石積Fと同じ3面新段階に対応するものと考えられるが、ここでは便宜上調査時の呼称のまま2'''面としておく。3・4面整地土は灰褐色～黒褐色整地土を基調とし、土塁の構成土も整地土層に含めた。下方は鉄分を有した粘土質の土がみられたが、5次調査の時のような木製品の大量出土には至らなかった。本面の主要な土は85層で、拳大の礫を多量に含んでいる。この層は石積Ⅰの支持土であり、今回の報告ではこの土が石積の背面まで延びるとしているが、石積Ⅰの背面の整地土は、1Aトレンチ壁面土層との照合から3面整地土である可能性を残している。しかし、大局的には遺構の理解には影響を与えないため、現状では調査時の所見に従い4面整地土のままとした。5面は4面以前の旧表土面であり、黒褐色の粘土層である（122～123層）。面的な調査はしていないが、南区のサブトレンチからこの面の下駄が出土している。

遺構の概要 5面の遺構はサブトレンチ内でピットを検出したのみである。3～4面では4面段階に土塁が築造されたのち、3面段階に至って石列40、石積Ⅰ、石列41が構築された様子が明らかになった。3・4面段階以降、石積前空間の埋め立てによって空間内の底面は上昇していく。続く2'''面では、北壁面で石列39を確認。土塁の北法面では覆土に礫を多く含む溝1898が検出された。2'面では土塁は整地土によ

て完全に埋められ、礫をともなう大型土坑などが築造されている。このほかピットや石列 38、礎石が検出され、礎石は建 18 を構成する。2' 面の遺構としては石列 36、石列 37、3 基の礎石からなる建 19 を確認した。2 面では柱列 24 と溝 1873、石列 35 が検出された。これらは軸をほぼ同じにしており、遺構としての関連性が窺えるものである。1～1' 面の遺構は竪 1862 や土坑、数基のピットが確認されたが、上層が後世の桑畑の攪乱によって削平されており、明確な時期が判定できないものもあった。

以下、各面の主な遺構の詳細を説明する。

## (2) 5 面の遺構

ピット群 (P1901～1904) 北区のサブトレンチ内で 4 基のピットを確認した。いずれも直径 15～18 cm の円形を呈し、深度は 5～12 cm である。遺物の出土はなく時期の詳細は不明だが、古代以降のものであろう。

## (3) 3・4 面の遺構

4 面では土塁、土坑 1 基、3 面では石積 1 基と石列が 2 基検出された。

土塁 これまで 1F・2A1・5A1 トレンチでも確認してきた平場南部を東西に走る土塁が、本調査においても確認できた。トレンチ南区において検出された本遺構は、幅 5.0 m 以上、長さは 4.8 m 以上で調査区外に続く。幅は調査区東壁面で計測した値による。軸は N-83°-W にとり、4 面の北法尻から数える高さは 90 cm である。2A1 や 5A1 で確認された土塁に比べて低いが、これは西に向かうにつれて石積前空間の底面が上昇するためである。法面の斜度は北面で 21°、南法面は調査区外にかかるため法尻の状況は確認できなかった。盛土は主に黒色土を基調としており、部分的に灰黄褐色の砂質の土を黒色土と交互に盛って構築されていた。本遺構は 4 面に帰属するものであるが、その構築過程は 3 段階に細分することができる。第 1 段階は 5 面直上に盛土を行ったもので、この段階の高さは 5 面から 63 cm である。次に 4 面の基盤造成とともに第 2 段階の盛土が行われた。この時の天端には造成過程で何らかの目的で土 1900 が掘り込まれている。第 3 段階にはさらに盛土を重ねて高さを増し、最終的な土塁の形が完成した。これら各段階の間には時間差はほとんどなく、構築過程を示すものと考えられる。本調査で土塁の西部が確認されたことにより、これまでの調査範囲における土塁の総延長は東西 39.3 m に及ぶこととなった。

石列 40 土塁の天端北側に配された全長 1.1 m の石列で、3 面段階に位置づけられる遺構である。軸は N-60°-W で、北に面をとる。東壁面でもこれに属すると思われる石が確認されているため、本来はこの石列の東端から東壁に向かって石が連なっていたものと想定される。1F・2A1・5A1 トレンチでは土塁の北天端で石積 C が確認されており、この石列も石積 C と同一遺構である可能性があるが、東壁面から繋がる石が残存していないことと、石積が一段しかなく大きさも小ぶりであることから、別遺構である可能性も考え新番号を付与した。

石積 1 北区西で確認された 3～4 段積み石積である。東面の長さは 4.1 m で、高さは最大 60 cm を測る。1 次調査で検出した石積 A・B と土塁で囲まれた石積前空間の西を画する遺構であり、石積 B2・B3 (以下石積 B) に対応する 3 面段階のものと考えられる。東面の軸は N-9°-E にとり、地面に対して 85° と直に近い角度で積まれている。石材は輝石安山岩の未加工の礫を使用し、控えの浅い長手積みを主体に一部天端石のみ小口積みを併用している。1 段目の築石は高さが揃わないため、2 段目以降横目地は不連続となる。南端は土塁の北法面に下端を合わせるように段を減らし終結させている。本遺構は石積 B のように北端が石積 A に接するものではなく、拡張区①で 86° 西へ屈折し、石積 A との間に約 3.6 m の開口部を設けている。この開口部は、1 次調査で西に向かって緩く上昇していることが確認されており、石積前空間の西端は石積 1 とともにスロープ状の切岸が区画していたと想定される。石積北面は確認できる範囲では 2 段積みである。

拡張区②ではこの続きは検出されなかったことから、長さ 1.0 m 前後で終息するものと考えられる。

石列 41 北区北西隅に位置する南北 4.0 m の石列で、北は調査区外に続く。軸は  $N-14^{\circ}-E$  にとる。中部から南部にかけては、2' 面段階の土 1885 の影響で崩されている。石積 I の築造後に形成されており 2'' 面に下る遺構の可能性もあるが、ここでは 3 面の遺構とした。

#### (4) 2'' 面の遺構

ピット 1 基、溝 1 基、石列 1 基を確認した。

溝 1898 土塁北法面に掘り込まれた遺構である。長さは調査区内では範囲で 2.0 m を測り、東は調査区外に続く。西は上層の遺構の土柱に阻まれて未確認であるが、北区西では続きが検出できなかったことから、中央ベルトに至る手前で終息しているものと考えられる。覆土に 20～30 cm の礫を多量に含んでおり、堀などの上部構造の基礎である可能性もある。礫を除去すると深さ 6 cm ほどで底面に到達した。軸は  $N-77^{\circ}-W$  にとる。

石列 39 北区東の北壁面で確認した。2'' 面の整地土内に埋め込むように配されており、一部は 4 面の整地土に乗る。規模は東西 3.3 m で、北区西の北壁では続きは確認されていない。軸は  $N-79^{\circ}-W$  にとる。5A1 トレンチにおいて、1A トレンチの石積 A から南へ下降するスロープの縁石列と考えられる石積 F が検出されているが、壁面観察結果から判断すると、本遺構もこれと同じ性質のものであると推定される。また、両遺構に対応する遺構が 2A1 トレンチでも確認されており（石列 13）、本遺構はこれと接続する可能性がある。石積 F と石列 13 はともに 3 面新段階に位置づけられているが、前述のように本遺構は今回の報告では便宜上 2'' 面の遺構とした。

#### (5) 2' 面の遺構

ピット 9 基、土坑 6 基、礎石建物 1 棟、石列 1 基を検出した。

土 1885 北区西に位置し、やや角ばった円形を呈する掘鉢状の掘り込みを有した土坑で、西半部は調査区外に続いている。長径 150 cm、短径 65 cm 以上、深度 45 cm である。本遺構は埋め立て後の 2 面や 1 面段階まで影響を与えており、埋土が軟弱なためか 1 面の堅 1862 の床面に陥没が生じている。

土 1888・1892 覆土に拳大～人頭大の礫をとまなう円形掘鉢状の土坑である。土 1888 は中央ベルトによって全貌を知ることができないが、長径 1.24 m 以上、短径 92 cm 以上を測る。深度は 28 cm で遺物の出土はない。土 1892 も同じく円形掘鉢状の土坑であり、覆土に礫が入る。長径 1.35 m、短径 85 cm 以上、深さは 42 cm である。

礎石建物 18 礎石 1886・1887 によって構成される建物跡である。方位は  $N-78^{\circ}-W$  で、礎石中心間の距離は 1.45 m を測る。建物として対になる礎石列は確認されていないが、調査区外に広がると推定される。

石列 38 北区北西部に位置する南北 1.95 m の石列である。 $N-10^{\circ}-E$  に軸をとり、東から延びる 2' 面整地土が本遺構の天端で締結することから、平場の段差に設けた西面する石列と捉えられる。遺構の延長はさらに北調査区外へ続く。

#### (6) 2' 面の遺構

礎石建物 1 棟、石列 2 基を確認した。

礎石建物 19 北区中央部に位置し、礎石 1877、1878、1879 から構成される 1 間四方の建物跡である。礎石中心間の距離は 1877・1878 間が 1.6 m、1878・1879 間が 1.8 m を測る。北西の礎石は中央ベルトにあたるため確認できなかった。軸を  $N-57^{\circ}-W$  にとり、他の遺構とは斜交しているという疑問点は残るが、上端のレベルや石材の在り方から建物跡と判断した。



石列 36 南区法面天端に配置された石列である。調査で確認できた規模は東西 1.15 m で、西は調査区外へ続く。軸は N - 74° - W にとる。

石列 37 北区南西隅に位置し、長径 60 ~ 80 cm の石が平坦面を上に向け東西に配置されている敷石状の遺構である。規模は東西長 1.3 m で、西は調査区外へ続くものの、東はトレンチ内で途切れている。主軸は N - 77° - W にとる。

#### (7) 2 面の遺構

ピット 1 基、溝 1 基、柱列 1 基、石列 1 基を検出した。

溝 1873 調査区中央を東西に横断する深さ 25 cm の遺構である。規模は調査区内で確認できただけで 7.2 m を測り、東西端は調査区外へ続く。西部での幅は南北 1.3 m 以上に及ぶが、東へ向かうにつれて幅を減じ、調査区東端では 33 cm になる。覆土からは天目茶碗 (23) と古瀬戸の播鉢 (24) が各 1 点出土している。主軸は N - 80° - W にとり、平場の縁に沿って設けられた施設であると考えられる。

柱列 24 溝 1873 の約 1.0 m 北に位置し、溝とほぼ同じ主軸をとる柱穴列である。P1870、1872、1875、1876 の 4 基のピットからなり、調査区外にも続いている可能性がある。規模は 5.55 m で、各柱穴間の寸法は 1.8 ~ 1.9 m を測る。ピットの直径は 45 ~ 50 cm で、深度は浅いもので 30 cm、深いものでは 52 cm に達している。溝 1873 と同じく、平場縁辺部に関わる施設であろう。

石列 35 南区で東西に走り、拳大~人頭大の礫が南北幅 1.0 m 前後の中に密集して列をなす。主軸は N - 87° - E とほぼ直角だが、東から 3.0 m 地点で 130° 南へ屈折する。南側で面を描いていることから、平場南法尻に関連する遺構と考えることができる。5A1 トレンチでは 2 面の遺構として石列 27 が検出され、平場南端を区切る遺構として報告しており、同種のものであろう。ただし、1F トレンチや 2A1 トレンチでは確認されていないため、両者を一連の遺構と捉えることはできない。

#### (8) 1 ~ 1° 面の遺構

1° 面は南区西壁にてピットを 1 基検出したのみで、1° 面の遺構は本調査では確認できなかった。1 面ではピット 7 基と土坑 1 基、竪穴状遺構 1 基を検出した。以下に記すのはいずれも 1 面の遺構である。

ピット群 (P1863 ~ 1867、1871、1874) 規模は長径 18 ~ 39 cm で、円形ないし楕円形を呈する。深度は浅いもので 4 cm、深いもので 14 cm を測り、P1871 は竪 1862 に切られて上層が削平されているため計測できなかった。P1863 ~ 1867 は竪 1862 の覆土を掘り込んでいるため、比較的新しい遺構で近世以降に下る可能性がある。一方 P1871 は竪 1862 によって上層が削平されているため竪 1862 よりも古い遺構と考えられ、P1863 ~ 1867 との時期差が窺える。P1874 は 1 面整地土から掘り込まれているが、他のピットとの前後関係は不明である。

竪 1862 東西 7.0 m、南北 4.2 m を測り、さらに調査区外にも広がりをみせる大型の竪穴状遺構である。1 面北区の大部分を本遺構が占め、南北軸は N - 13° - E にとり、深さは 40 ~ 50 cm に達する。覆土は大きめの黄褐色塊が多量に入り、堆積の方向から、北から南に向かって埋没していった経緯が窺える。ブロックの大きさや混ざりの多さからみて、人為的に埋められたものであろう。壁はやや開き気味に立ち上がるが、部分的に直に立ち上がる箇所もみられる。柱穴などの付属施設は確認されなかった。遺物は土師質皿 (41) と染付皿 (42) が出土している。遺構の性格は不明であり、これまでの調査では類を見ない大型遺構である。なお、1A トレンチの南壁で、同一遺構と思われる土層が確認されていたが、覆土の様子から後世のグラウンド盛土と判断し、遺構としては捉えていなかった。

## 2 7E1 トレンチ (第3・4表、第3・7・16～21図)

### (1) トレンチの概要と土層構成、遺構の概要

**トレンチの概要** 本調査区はAゾーンから100m東の長安寺本堂跡地に位置する。背後の虚空蔵山から延びる知見寺沢とうつつ沢に挟まれた尾根が、長居原から広田寺裏尾根、現会田中学校を経て南下した末端、標高639m地点には小規模な谷地が開口しており、そこに平地が形成されている。平地の規模は幅40m、南北16mほどで、平成22年度調査の2C1トレンチ(旧会田中学校第1校舎付近)との比高差は約6mである。この平地は会田新町から長安寺に至る175mの直線参道の終点にあたり、ここに長安寺本堂が存していた。平成25年の本堂解体を受け、中世遺構と平地の造成時期確認を目的として調査を行うこととなった。

調査地は、本堂解体後更地となっている。ここに十文字の調査区を設定し、本堂の基壇にあたる近世以降の造成土を重機によって除去した後、手作業による掘り下げを開始した。近世造成土を取り除くと中世整地土が現れたが、本堂解体の際に激しく攪乱されてしまったため、第1面の面的な調査は不可能と判断し、下層の第2面から調査を始めることとした。調査の過程で調査区は順次拡張を行い、最終的な調査区の規模は南北12.5m、東西17.2m、総面積は125㎡となった。

**土層構成** 近世以降の造成土と南法面を埋める近世の堆積土、中世面にあたる1・2'・2面で構成される。近世以降の造成土は本堂の基壇土であり、最大60cmの厚みを持つ。しかし本堂の解体時、重機によって攪乱されたため、旧状はとどめていない。近世の堆積土は調査区南法面を埋める自然堆積層で、砂質の黄褐色系の土で構成されている。南法面の浸食とともに形成されたものと考えられ、下層は地下水の影響を受けて変色していた。これを踏まえると、中世段階の平地範囲は、検出された法面よりもやや南に広がっていた可能性がある。1面は本堂解体時の攪乱により、上部がほとんど消失してしまっていた。壁面によって確認できた限りでは、残存している整地土の厚みは最大30～40cm、褐色系の土を基調としている。2'面は調査区東部北のみ確認されたものである(52・53層)。黄褐色の土が厚さ16～20cm、東西1.6mの範囲で広がっており、西に向かって傾斜して2面に合流する。整地土内からは古瀬戸中Ⅳ期の折縁深皿(51)が出土している。2面は調査区のほぼ全域に広がるが、西限は1面遺構である池1827の東までであり、1面段階よりも範囲は狭まっていたと考えられる。整地土の厚さは50～60cmで、調査区南で法面を形成する。褐色～暗褐色の土を基調とし、地山由来の黄褐色ブロックが中量から多量含まれる。遺物は古瀬戸中ⅠもしくはⅡ期にあたる小壺(55)や中Ⅳ期にあたる天目茶碗(57)などが出土しており、この面の時期は14世紀中葉から末と考えられる。また、炉1801の炭の<sup>14</sup>C年代でも、14世紀代という分析結果が出ている(第Ⅳ章第2節参照)。これらの遺物は下層からの出土で、2面に由来するものと考えられる。

**遺構の概要** 2面の遺構は、内容が多岐にわたる。調査区北東部では礎石を検出しており、その手前では壁面や底面が赤化した炉が見つかった。礎石列の北では掘立柱建物が確認された。この他サブトレンチ壁面では幅3.8mの溝の断面が検出され、自然堆積と人為的堆積を繰り返して埋没した様子が見られた。1面の遺構は上部が削平を受けていることで消失してしまったものもあると予想されるが、ピットや池や掘立柱建物、柱列が残存していた。池は調査区西部で検出され、護岸などの残存状態も良好であった。その東には3基のピットからなる柱列が確認されており、その配列から池に関連する施設の可能性がある。近世堆積土や近世以降の造成土では、遺構は確認できなかった。以下、主な遺構の詳細について記していく。なお、南区東壁では地山面上の溝1818を確認したが、断面観察のみにとどまったため、詳細は明記しない。

### (2) 2・2'面の遺構

2・2'面の遺構は、ピット27基、土坑1基、炉1基、焼土2基、炭集中2基、溝2基、礎石2基、掘立柱建物1棟、礎石建物1棟を確認した。

炉 1801 調査区中央で検出された長径 66 cm、短径 39 cm の炉である。主軸は  $N-11^{\circ}-W$  にとり、底面は被熱赤化している。10 cm の掘り込みがあり、覆土中から土師質皿 (46) が出土している。本遺構覆土中の炭を  $^{14}C$  年代測定したところ、14 世紀後半という分析結果が出ている (第 IV 章第 2 節 1 参照)。

焼土 1802・1804、炭集中 掘り込みのない地床炉のような施設と考えられる。付近の炭だまり (P1815・1806) も、これに関連するものであろう。

溝 1828 調査区中央のサブレンチ内で、壁面で検出された大型の溝である。平面形は確認できておらず、当初は溜め井戸などの大型土坑の可能性も考えたが、覆土に水成堆積が見られたため溝と判断した。上端の幅は 3.8 m で、底に向かって挿鉢状に狭まり、下端の幅は 1.2 m となる。底面はほぼ平らに掘り込まれており、三角堆積がみられる。東立ち上がりには 1 段のテラスが設けられている。自然堆積と人為堆積を交互に繰り返しながら埋没しており、自然堆積土は粘土質の暗褐～黒褐色の土が主体である。人為堆積層は黄褐色系の土を基調としており、地山由来の黄褐色ブロックが多く混ざる。性格は定かではないが、平場背面が斜面になっていることで尾根からの水が流れ込みやすいことを考えると、排水や集水の目的で掘削されたものとも考えられる。前後の延長については本調査では確認できなかった。

溝 1858 調査区北部の北隅に位置する東西に走る溝である。確認長 2.0m、幅は最大で 60 cm 以上となる。深さは 42 cm だが、上部を攪乱によって削平されており、本来はさらに深かったと考えられる。両端とも調査区外に延びている。水成堆積で埋没しており、谷地に集まる水の排水溝であった可能性がある。主軸は  $N-68^{\circ}-W$  にとる。

掘立柱建物 15 調査区北部で検出された、P1811・1816・1847 からなる建物である。P1853 も加えると南北 1 間×東西 2 間の建物になり、規模は南北 2.5 m、東西 5.2 m を測る。また、P1848 も軸は外にずれるが本遺構に属する可能性がある。柱間寸法は P1811・1816 間が 2.1m、P1816・1847 間が 3.1m だが、P1848 を一連の遺構と捉えた場合、P1816・1848 間が 1.55m、P1848・1847 間が 1.5m を測る。主軸は  $N-50^{\circ}-W$  にとる。ピットは長径 21～28 cm のいずれも円形で、P1811 は西半が調査区外に続く。深さは 12～37 cm、P1853 は極端に浅い。P1847・1848 では柱痕が確認された。

礎石建物 16 礎石 1824・1851・土 1823 で構成される礎石建物で、東西 3.7 m を測る。土 1823 では礎石は検出されていないが、石の抜き取り穴と判断した。礎石中心間の距離は土 1823・礎石 1824 間は 1.9m、礎石 1824・1851 間は 1.8m を測り、 $N-54^{\circ}-W$  と掘立柱建物 15 に近い軸をとる。

### (3) 1 面の遺構

遺構而上部の激しい攪乱により、ほとんどの遺構は消失しているが、ピット 5 基と掘立柱建物 1 棟、柱列 1 基と池 1 基、石敷 1 基が検出された。

掘立柱建物 17 調査区北東部で検出された 1 間四方以上の建物である。P1839・1842・1836 からなり、主軸は  $N-56^{\circ}-W$  にとる。規模は南北 1.3m、東西 1.85m を測る。ピットは長径 16～24 cm の円形ないし楕円形を呈し、深さは 6～12 cm とやや浅い。本遺構の東は調査区外へ続く可能性もある。

柱列 23 調査区西部で黄褐色地山に掘り込まれた遺構である。池 1827 の東脇に位置し、P1808・1809・1856 の 3 基のピットからなる。主軸は P1808・1809 間で  $N-50^{\circ}-E$  にとるが、P1809・1856 間は P1809 を起点に南の P1856 に向かって  $28^{\circ}$  東へ屈曲する。柱間寸法は P1808・1809 間が 80 cm、P1809・1856 間は 1.9 m を測る。P1856 が急激に東へ屈折する点や、ピットの規模が P1808・1809 の直径がともに 24 cm であるのに対し P1856 は 19 cm、深度も P1808・1809 は 20 cm 以上あるが、P1856 は 12 cm と浅い点を踏まえると、3 基がかならずしも一連の遺構であるとは限らない。しかし、いずれも池の岸に沿って存するピットであり、池の東西ベルト直下に一連のピットがある可能性も想定し、ここでは 3

基を柱列を構成する遺構として扱うこととした。なお、P1808・1809には柱痕がみられ、このうちP1808の底面には上面が平らな礎盤石があった。本遺構は、池にともなう何らかの施設であると考えられる。

池 1827 調査区西部で検出された。遺構の西部は調査区外に続くため全貌は明らかではないが、本調査で確認できた範囲だけでも内寸で南北 6.0 m、東西 3.0 m を測る。形状は方形に近いが、部分的に岸が張り出す不整形を呈する。地山を直接掘り込んで形成しており、底面は第三紀中新世の青木層下部を構成する縞目状の層理を呈する泥岩岩盤を掘り抜いている。底面は平らであるが、池の中央部分で段差が生じ、南半部が一段深まっている。岸は地山の立ち上がり部分に裏詰め土や貼り土をともなって、石列ないし石積（石積 H）を配して護岸壁としている。石材はほとんどが輝石安山岩を使用しているが、後述する玉石などの一部の護岸石には黒色のチャートが使用されている。覆土には自然堆積と人為堆積の両方がみられ、時間的に 2 段階の変遷があることがわかった。古段階は護岸に石積や石列をともなう時期で、岩盤地山を底面とする。この段階の覆土は、鉄分を含む砂質に近いシルトの水成堆積で、周縁部ではやや厚く堆積している。こうした覆土の状況から、本遺構は水を湛える池であったことが明白である。おそらく、山側から水を引き入れ、南側から排水していたものと考えられる。導水や排水に関わる施設は未確認であるが、北岸背面には礫を混ぜ込む掘り込みが北調査区外へと続いており、これが導水施設に関わる下部構造の可能性もある。

古段階の遺物として、古瀬戸後 III 期の天目茶碗（52）が覆土中から得られたが、同じく覆土中から擬漢式鏡が出土している。この鏡は本遺構南縁部の古段階水成堆積層中（46 層）より、覆土掘り下げ中に発見された。新段階の護岸石の真下に位置し、池底面から約 4～5 cm の高さで鏡面を下にした状態で出土している。鏡面には木葉や柿状の削り屑が付着しており、当時の池底面に落ち葉が堆積していた様子が窺える。鏡の東端と西端のレベル差は 0.7 cm で、東側がやや低いがほぼ水平である。鏡の周縁が見えた段階で写真記録とレベル確認、土層観察を行った後、新段階の護岸石と鏡の間の土を除去して鏡の全形を出した。鏡は 46 層の中層で出土しており、鏡を境とした層位の違いもみられなかったため、埋納を示す掘り方はないものと判断し、46 層が堆積していく過程で池中に沈められたものという結論に至った。また、鏡を覆う布や箱などの痕跡もみられなかった。鏡の全形が確認できたところで、写真・図面記録を行い取り上げた。鏡の直径は 11 cm、鏡背の紋様構成から、15 世紀前半の「花筏双鳥鏡」とした。本鏡については次の章で詳細を記す。

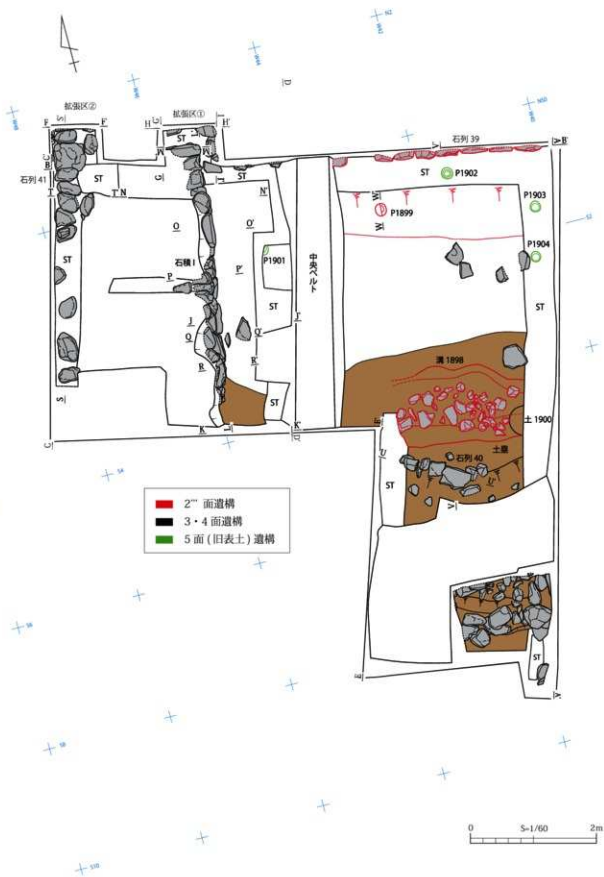
続いて新段階に入ると、古段階の堆積層の上面が底面となる。その上には自然堆積層（37 層）が覆い、さらに 35 層によって埋め立てられた過程が明らかになった。新段階は池の護岸にも変化がみられ、古段階の護岸の内側にもまばらに礫を配している。形状に大きな変化はない。北部西半の護岸石の間からは、直径 3～5 cm ほどの黒色のチャートを使用した玉石敷が南北 15 cm、東西 1.1 m の範囲でみられた。この段階の遺物としては、古瀬戸後 1 期の天目茶碗（53）が出土している。天目茶碗は底部の完形であり、底面には墨書で「三」の字がみられる。鏡を含めたこれらの出土物の年代を踏まえると、本遺構の時期は古段階は 15 世紀前半、新段階はそれに後続する 15 世紀代とみなされよう。

石敷 1859 南北 1.0 m、東西 70 cm の方形範囲に人頭大の礫を配置した遺構で、池 1827 の南東平場が低い段差をなす部分で検出された。石材はいずれも輝石安山岩の垂円礫である。中央部は南北方向に 2 列に平石を敷いており、その両脇には長手石を配置する。遺構の性格は不明であるが、石敷の通路とするには狭く、あるいは排水施設など池に付属する施設の可能性もある。

#### (4) 近世以降の遺構

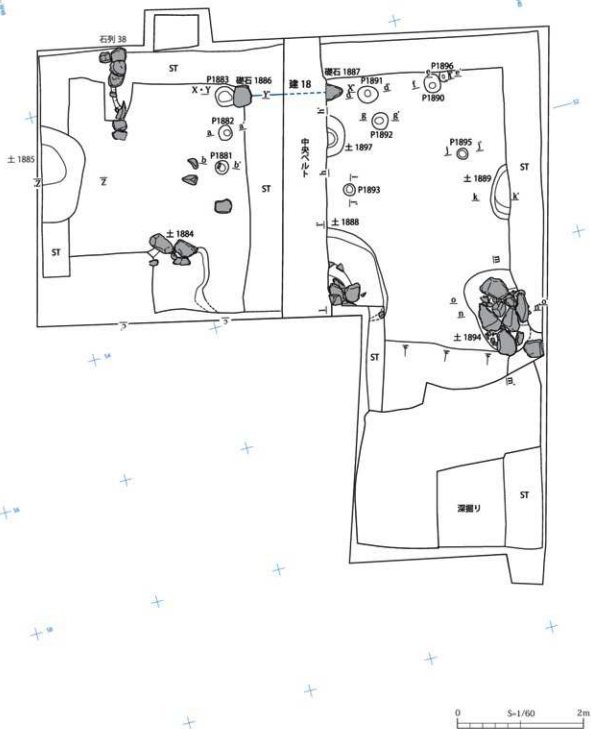
本堂の礎石や基壇は、解体時の攪乱で壊滅している。2 面で検出した南法面は、この段階にも継続しており、平成 25 年に解体された本堂の建立時に基壇の拡張によって埋められた可能性が高い。

2''・3・4面の遺構



第9図 7A1トレンチ (1)

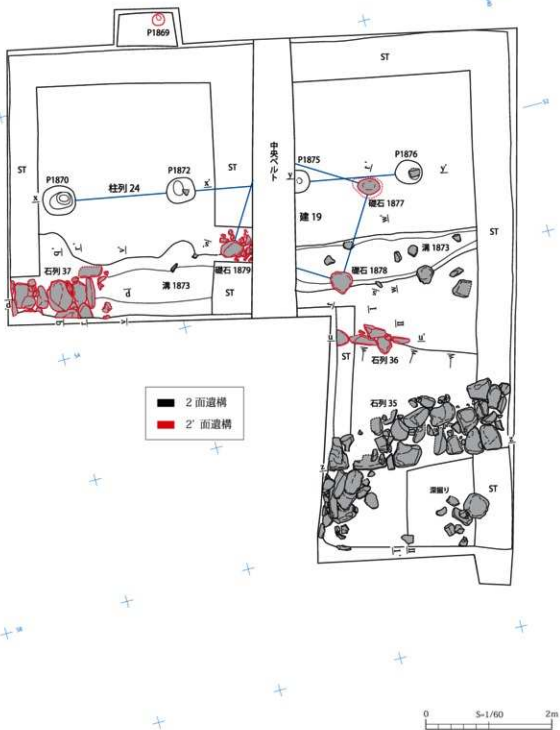
2<sup>nd</sup> 面の遺構



第10図 7A1 トレンチ (2)

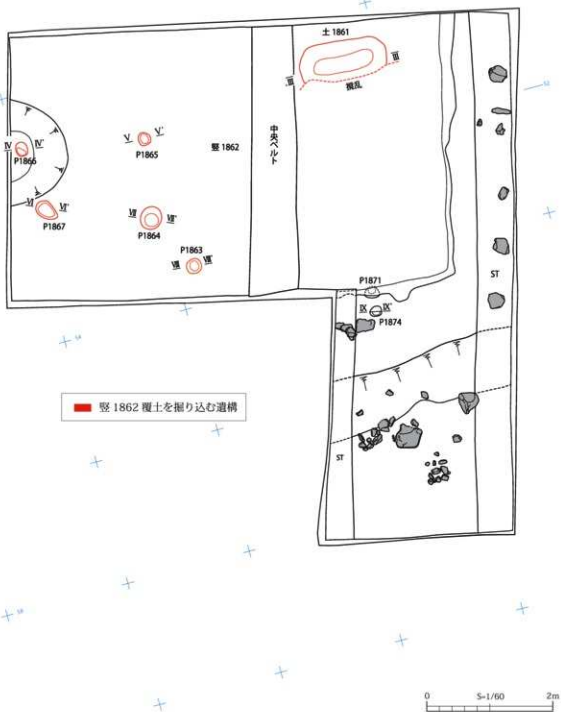


2・2' 面の遺構

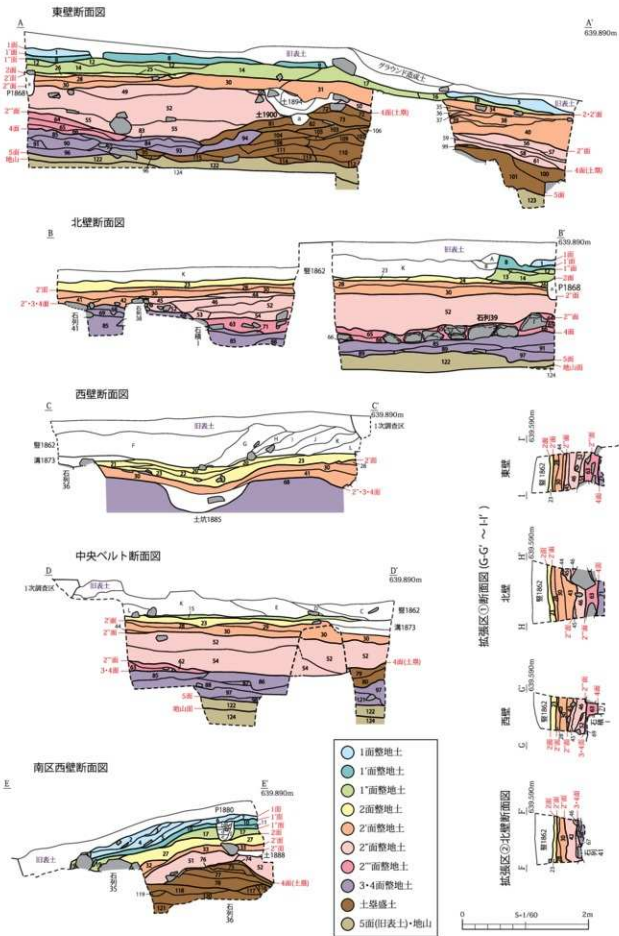


第11図 7A1 トレンチ (3)

1~1" 面の遺構



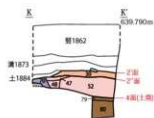
第 12 図 7A1 トレンチ (4)



第13図 7A1トレンチ (5)



石積I東面立面図



石積I北面立面図



石積Iエレベーション (N-N' ~ R-R')



石列40エレベーション



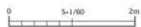
石列41エレベーション



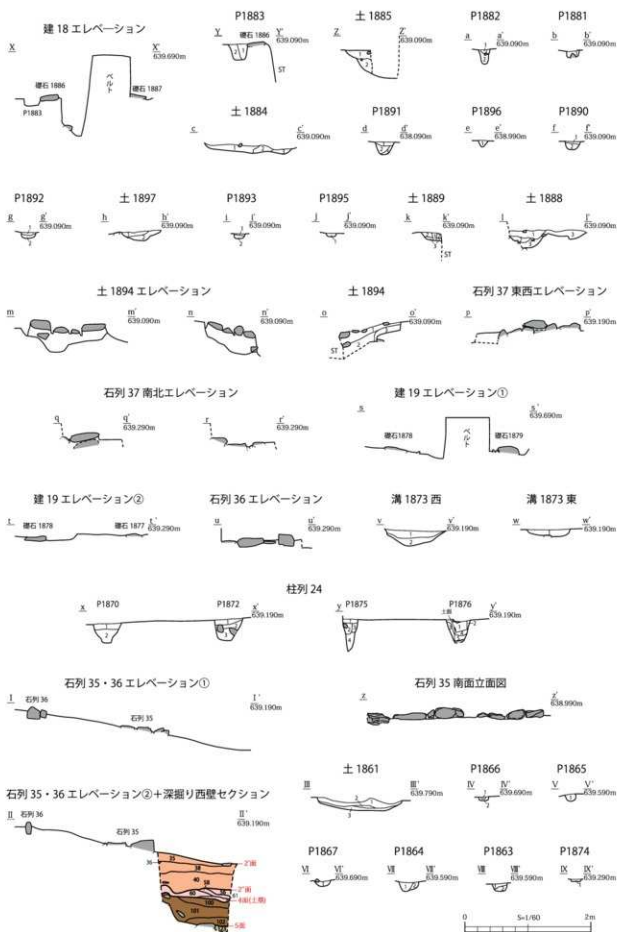
石列40・土壁エレベーション



P1899

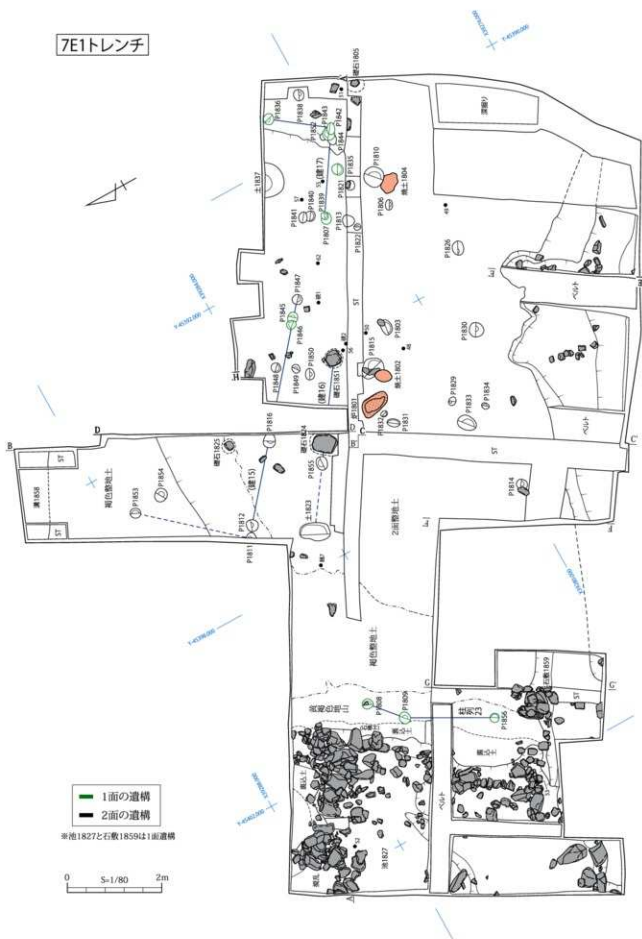


第14図 7A1 トレンチ (6)

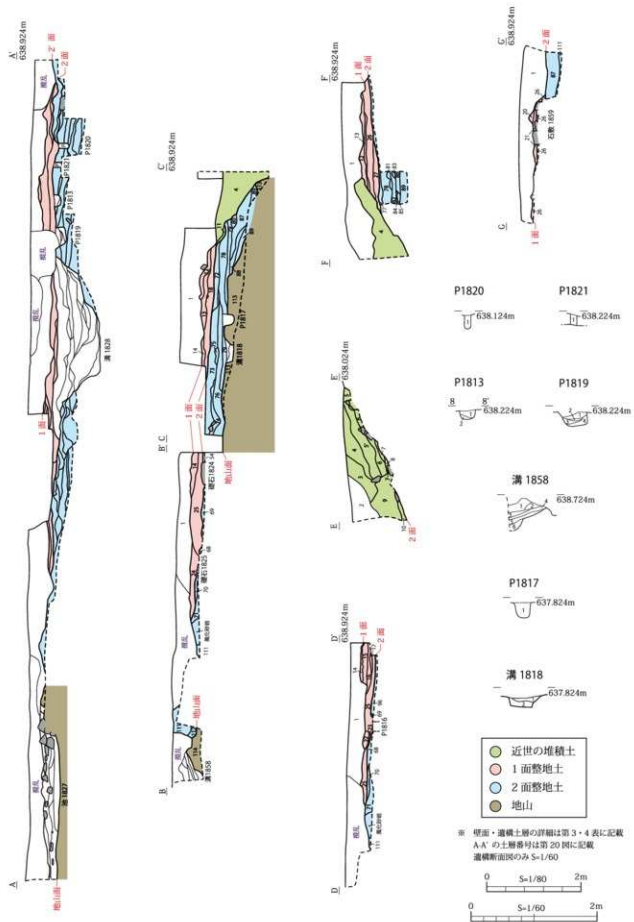


第 15 図 7A1 トレンチ (7)

7E1トレンチ

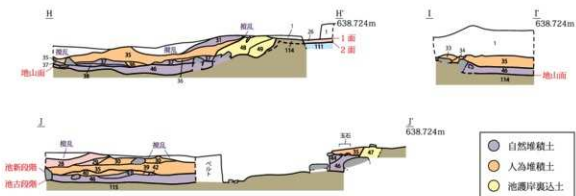


第16図 7E1トレンチ (1)



第17図 7E1トレンチ(2)





石敷 1859 エレベーション①



石敷 1859 エレベーション②



P1808



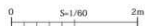
P1809



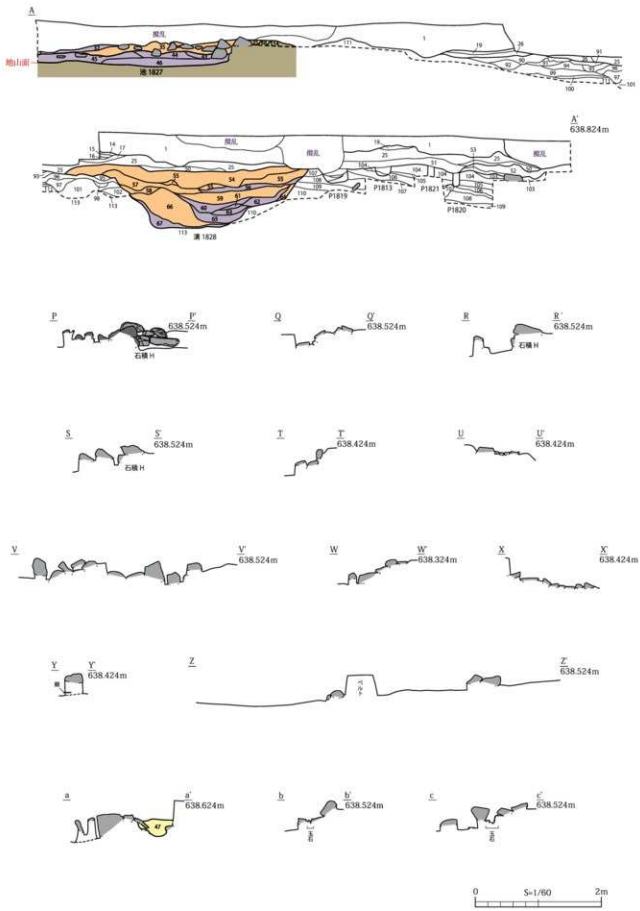
P1856



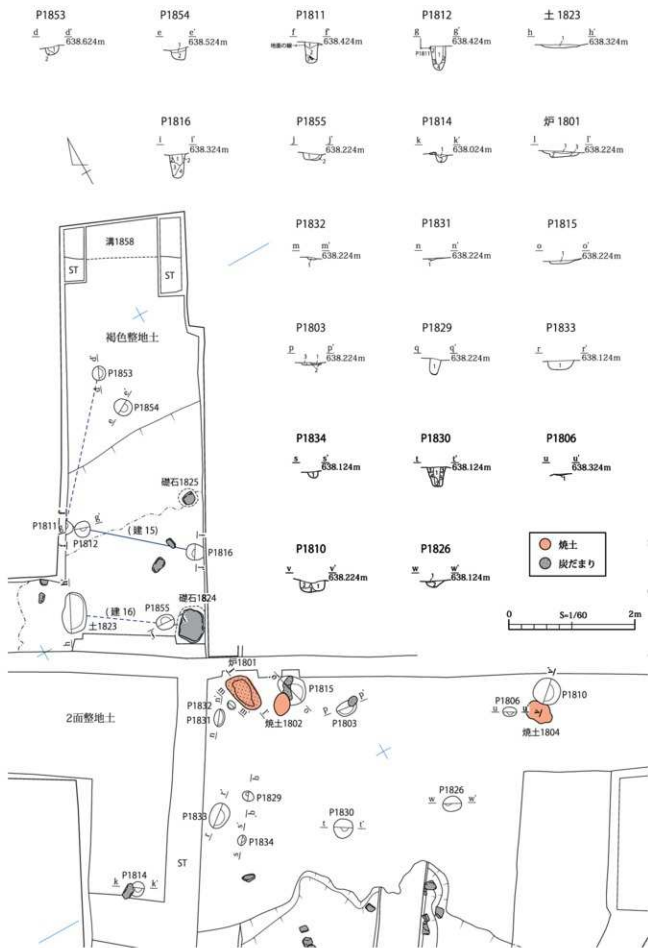
※ 遺構土層の詳細は第●裏に記載



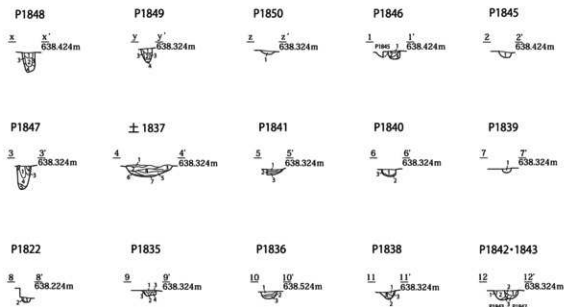
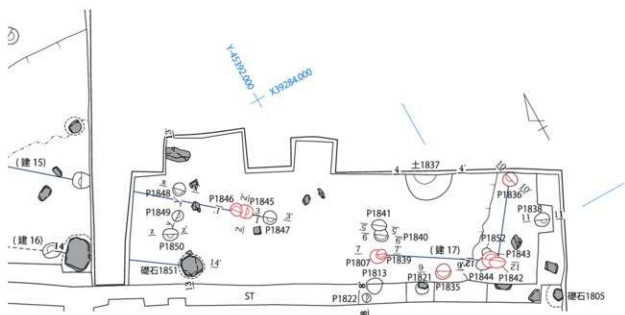
第 18 図 7E1 トレンチ (3)



第19図 7E1トレンチ (4)



第20図 7E1トレンチ (5)



第 21 図 7E1 トレンチ (6)

第3表 壁面土層一覧

№	土色	土質	しまり	粘着	含有物	性状	種類	備考
7A1 トレンチ								
1	10YR4/4	褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊3%・明褐色塊7%・灰白色粘3%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む	1面整地土	入込
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	細粒砂	あり	やや弱め	黄褐色塊7%・砂岩塊5%・φ30～50μm塵20%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊3%・灰白色塊2%・炭粒2%・焼土粒1%含む	〃	〃
4	10YR4/4	褐色	シルト	あり	あり	黄褐色粘～塊15%・灰白色粘～塊5%・灰5%・φ30μm塵2%・炭粒～塊7%含む	〃	〃
5	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	強い	あり	黄褐色塊30%・砂岩塊7%・灰白色塊10%・炭粒3%・焼土粒1%含む	〃	〃
6	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊15%・灰白色塊2%・砂岩塊10%・φ10～50μm塵3%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
7	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊2%・灰白色粘3%・褐色塊5%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む	〃	〃
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊7%・明褐色粘～塊15%・φ20μm塵3%・炭粒～塊2%・焼土粒2%含む	1'面整地土	〃
9	10YR4/4	褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粘7%・白色粘3%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む	〃	〃
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黒色粘2%・灰白色粘5%・炭粒2%・焼土粒1%含む	〃	〃
11	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊5%・灰白色粘2%・褐色塊7%・炭粒3%・焼土粒1%含む	〃	〃
12	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊7%・φ10μm塵2%・炭粒1%・焼土粒2%含む	1'面整地土	〃
13	10YR4/4	褐色	シルト	強い	やや弱め	黄褐色粘～塊10%・褐色塊2%・炭粒～塊2%含む	〃	〃
14	10YR4/4	褐色	極細粒砂 ＋シルト	強い	あり	黄褐色粘～塊10%・褐色塊5%・灰白色粘2%・炭粒～塊5%・焼土粒～塊3%含む	〃	〃
15	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊3%・白色粘2%・φ10～30μm塵3%・炭粒2%含む	〃	〃
16	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊5%・白色粘2%・炭粒3%・焼土粒2%含む	〃	〃
17	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊3%・明褐色粘～塊15%・灰白色粘2%・φ50μm塵1%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む	〃	〃
18	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊5%・白色粘2%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む	〃	〃
19	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊2%・褐色塊5%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む	〃	〃
20	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊5%・白色粘2%・炭粒2%・焼土粒1%含む	2面整地土	〃
21	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊10%・白色粘2%・炭粒～塊15%・焼土粒～塊10%含む	〃	〃
22	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	やや弱め	21層と類似。黄褐色粘～塊5%含む	〃	〃
23	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊7%・灰白色粘～塊3%・炭粒2%・焼土粒1%含む	〃	〃
24	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊7%・砂岩塊2%・φ30μm塵3%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む	〃	〃
25	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色粘～塊15%・明褐色粘～塊3%・砂岩塊2%・灰白色粘～塊7%・炭粒～塊10%・焼土粒～塊7%含む	〃	〃
26	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粘～塊5%・φ5mm塵3%・炭粒3%含む	〃	〃
27	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊15%・白色粘～塊5%・φ30～50μm塵3%・明褐色粘7%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む	〃	〃
28	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粘～塊40%・砂岩塊5%・灰白色粘～塊5%・φ10～50μm塵3%・炭粒～塊15%・焼土粒～塊3%含む	〃	〃
29	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊3%・灰白色粘2%・炭粒5%含む	2'面整地土	〃
30	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粘～塊15%・砂岩塊3%・灰白色粘2%・φ30～50μm塵5%・炭粒～塊20%・焼土粒～塊10%含む	〃	〃
31	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊5%・砂岩塊7%・白色粘3%・φ10～50μm塵3%・人頭大仏岩質2%・炭粒～塊7%含む	〃	〃
32	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊10%・明褐色粘～塊15%・炭粒2%・焼土粒1%含む	〃	〃
33	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊15%・明褐色粘～塊5%・灰白色粘3%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む	〃	〃
34	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊10%・白色粘3%・φ50μm塵2%・炭粒～塊2%・焼土粒～塊5%含む	〃	〃
35	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	あり	あり	黄褐色粘～塊7%・砂岩塊2%・白色粘2%・φ10～30μm塵2%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
36	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊3%・白色粘～塊3%・φ50μm塵2%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
37	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	弱い	黄褐色塊30%・砂岩塊5%・灰白色粘～塊2%・炭粒～塊3%含む	〃	〃
38	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	強い	あり	黄褐色粘～塊15%・砂岩塊5%・白色粘3%・φ30～50μm塵3%・炭粒～塊15%・焼土粒～塊3%含む	〃	〃
39	10YR4/4	褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊30%・砂岩塊10%・黒色粘2%・白色粘3%・φ10～30μm塵2%含む	〃	〃
40	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊15%・白色粘2%・φ30～50μm塵3%・炭粒～塊10%・焼土粒～塊10%含む	〃	〃
41	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂 ＋シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粘～塊5%・砂岩塊2%・白色粘～塊2%・灰白色塊7%・φ10～30μm塵2%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む	2'面整地土	〃
42	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊7%・灰白色粘～塊10%・φ5～10μm塵2%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
43	10YR4/4	褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊7%・灰白色粘～塊10%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む	〃	〃
44	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粘～塊10%・砂岩塊2%・灰白色粘～塊5%・炭粒3%・焼土粒1%含む	〃	〃
45	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色塊30%・砂岩塊5%・灰白色塊3%含む	〃	〃
46	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粘～塊20%・砂岩塊2%・灰白色粘～塊5%・黒色塊20%・φ5μm塵2%含む	〃	〃

№	土色	土質	しまり	粘性	含有物	性状	埋積	備考
47	10YR4/4	黒	シルト	強い	中々強め	黄褐色粒～塊5%・砂岩粒～塊2%・白色粒～塊2%・ $\phi$ 10～30 $\mu$ m 2%・炭粒～塊3%・粘土粒1%含む	2'面 豊地土	石積1の埋土の上に 貼った土
48	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊3%・砂岩粒～塊3%・白色粒～塊2%・ $\phi$ 10～30 $\mu$ m 2%・炭粒3%含む	〃	〃
49	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂 +シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊10%・砂岩塊3%・ $\phi$ 10～50 $\mu$ m 3%・炭粒～塊10%・粘土粒2%含む	〃	〃
50	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊7%・砂岩塊2%・灰白色粒～塊2%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
51	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	かなり強い	強い	黄褐色粒10%・黄褐色15%・白色粒～塊3%・褐色色塊7%・炭粒～塊7%・粘土粒～塊2%含む	〃	〃
52	10YR4/4	黒	極細砂 +細砂	かなり強い	弱い	赤大・人頭大山岩10%・ $\phi$ 5～10 $\mu$ m 50%・ $\phi$ 10～50 $\mu$ m 20%・砂岩塊7%含む	〃	〃
53	10YR4/4	黒	極細砂	かなり強い	中々強め	黄褐色粒～塊20%・白色粒～塊7%・砂岩塊3%・炭粒2%含む	〃	〃
54	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	強い	黒褐色塊15%・白色粒～塊5%・砂岩塊10%・ $\phi$ 50 $\mu$ m～ $\phi$ 大 山岩10%・炭粒1%・粘土粒1%含む	〃	〃
55	10YR3/2	暗黒	極細砂 +細砂	弱い	あり	黄褐色粒～塊3%・砂岩塊7%・黒褐色塊5%・ $\phi$ 10～50 $\mu$ m 5%・ $\phi$ 大 人頭大山岩10%含む	〃	〃
56	10YR3/2	黒	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊7%・砂岩塊2%・白色粒～塊2%・炭粒～塊7%・粘土粒 ～塊2%含む	〃	〃
57	10YR4/2	灰黄	極細砂 +粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊20%・砂岩粒～塊7%・白色粒2%・炭粒～塊15%・粘土粒 3%含む	〃	〃
58	10YR3/2	黒	シルト+ 粘土	強い	あり	黄褐色粒～塊10%・白色粒3%・炭粒～塊3%含む	〃	〃
59	2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂 +粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊7%・砂岩粒～塊3%・ $\phi$ 10 $\mu$ m 2%・炭粒～塊20%・粘土粒 ～塊5%含む	〃	〃
60	10YR3/1	黒	シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊7%・砂岩粒～塊2%・白色粒5%・炭粒～塊7%・粘土粒1% 含む	〃	〃
61	10YR4/1	暗灰	シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊3%・砂岩塊1%・白色粒3%・炭粒3%含む	〃	〃
62	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト+ 粘土	強い	あり	黄褐色粒～塊15%・砂岩塊3%・褐色塊3%・灰白色塊10%・炭粒～塊2% 含む	2'面 豊地土	〃
63	10YR5/6	黄	細砂+ 中粒砂	弱い	弱い	黄褐色粒～塊7%・砂岩塊3%・ $\phi$ 30～50 $\mu$ m 7%・赤大・人頭大山岩 3%・炭粒～塊3%・粘土粒1%含む	〃	〃
64	2.5Y5/2	暗灰黄	極細砂 +シルト	あり	あり	黄褐色粒～塊10%・砂岩粒～塊5%・灰白色粒～塊5%・炭粒～塊3% 含む	〃	〃
65	2.5Y4/3	オリーブ黄	粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊7%・砂岩塊3%・灰白色粒～塊7%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
66	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト+ 粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊30%・灰白色塊3%・炭粒～塊2%含む	〃	〃
67	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊10%・灰白色塊3%・褐色塊2%含む	3・4面 豊地土	〃
68	10YR4/4	黒	極細砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊15%・砂岩塊5%・灰白色粒～塊3%・暗褐色塊10%・炭 粒3%・粘土粒1%含む	〃	〃
69	10YR5/6	黄	シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊20%・灰白色塊15%・砂岩塊5%・ $\phi$ 30～50 $\mu$ m 3%・炭 粒3%・粘土粒2%含む	〃	〃
70	10YR4/6	黒	極細砂	かなり強い	中々強め	黄褐色粒2%・白色粒2%・砂岩1%・砂岩塊2%・ $\phi$ 30 $\mu$ m 2%・炭粒 ～塊3%含む	〃	〃
71	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色塊7%・砂岩粒～塊3%・ $\phi$ 5～10 $\mu$ m 2%・炭粒～塊7%・粘 土粒5%含む	〃	〃
72	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂 +シルト	強い	中々強め	黄褐色粒～塊5%・砂岩粒～塊3%・白色粒3%・炭粒～塊5%・粘土粒2% 含む	〃	〃
73	10YR3/2	黒	極細砂 +シルト	強い	中々強め	黄褐色粒～塊5%・灰白色粒～塊2%・砂岩塊3%・炭粒～塊3%・粘土粒1% 含む	〃	〃
74	10YR4/4	黒	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊5%・砂岩粒～塊2%・灰白色塊3%・炭粒～塊2%・粘土粒2% 含む	〃	〃
75	10YR5/2	灰黄	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊3%・砂岩粒～塊2%・灰白色粒～塊2%・炭粒～塊2%・粘 土粒1%含む	〃	〃
76	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂+ 粘土	中々強め	強い	砂岩塊2%・灰白色塊3%・炭粒1%含む	〃	〃
77	2.5Y4/2	暗灰黄	粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊3%・砂岩粒～塊5%・灰白色粒～塊5%・炭粒～塊2%含む	〃	〃
78	2.5Y3/1	黒	シルト+ 粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊2%・砂岩粒～塊3%・灰白色粒～塊5%・炭粒～塊3%含む	〃	〃
79	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト+ 粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊5%・砂岩塊3%・灰白色塊3%・ $\phi$ 10～30 $\mu$ m 2%・赤大 山岩2%・炭粒～塊7%・粘土粒2%含む	〃	〃
80	10YR3/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	中々強め	黄褐色塊5%・褐色塊3%・灰白色塊5%・砂岩塊1%・赤大山岩2%・炭 粒～塊3%・粘土粒～塊2%含む	〃	〃
81	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	中々強め	黄褐色粒～塊5%・褐色塊15%・灰白色塊5%・炭粒～塊5%・粘 土粒1%含む	〃	〃
82	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	強い	あり	黄褐色塊40%・砂岩粒～塊2%・灰白色塊3%・炭粒2%含む	〃	〃
83	10YR4/2	灰黄	極細砂 +シルト	あり	強い	黄褐色粒～塊10%・砂岩粒～塊3%・炭粒～塊5%・粘土粒1%含む	〃	〃
84	10YR4/2	灰黄	シルト+ 粘土	あり	強い	黄褐色塊60%・砂岩塊～塊10%・灰白色塊～塊5%含む	〃	〃
85	10YR4/2	灰黄	極細砂	あり	あり	黄褐色粒～塊3%・砂岩粒～塊5%・赤大山岩50%・炭粒2%・粘土粒1% 含む	〃	〃
86	2.5Y3/2	黒	極細砂 +粘土	あり	強い	黄褐色粒2%・砂岩粒2%・青灰塊3%含む	〃	〃
87	10YR5/1	暗灰	シルト	強い	中々強め	黄褐色粒～塊40%・黒褐色塊～塊5%・灰白色塊2%・砂岩塊3%・炭 粒～塊2%含む	〃	〃
88	10YR4/2	灰黄	極細砂 +粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊7%・砂岩塊2%・灰オリーブ塊3%・炭粒～塊1%含む	〃	〃
89	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂 +粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊2%・白色粒1%・砂岩粒～塊1%・ $\phi$ 50 $\mu$ m～赤大山岩 20%含む	〃	〃
90	10YR5/6	黄	シルト	かなり強い	中々強め	黄褐色塊3%・砂岩塊2%・白色粒2%・褐色塊～塊5%・炭粒1%・粘 土粒2%含む	〃	〃

№	土名	土質	しまり	粘り	含有物	性状	母材	備考
91	10YR3/3	暗褐	シルト	かなり強い	中～強弱	黄褐色粒～塊7%・明褐色粒～塊7%・灰白色粒5%・白色粒1%・ $\phi$ 10 $\mu$ m 塵1%含む	3・4面 豊地土	人為 土壌盛土
92	10YR5/6	黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊15%・褐色粒10%・白色粒～塊3%・砂岩1%・炭粒～塊3%・粘土1%含む	〃	〃
93	10YR3/3	暗褐	極細砂 +シルト	かなり強い	中～強弱	黄褐色粒～塊10%・明褐色粒～塊3%・白色粒～塊3%・砂岩2%・ $\phi$ 10 $\mu$ m 塵3%含む	〃	〃
94	10YR3/2	黒褐	極細砂	あり	あり	黄褐色粒～塊15%・砂岩塊5%・白色粒2%・ $\phi$ 30 $\mu$ m 塵3%・ $\phi$ 50 $\sim$ 80 $\mu$ m 安山岩1%含む	〃	〃
95	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	あり	あり	黄褐色粒～塊3%・灰白色塊3%・黒色粒～塊5%・炭粒1%含む	〃	〃
96	10YR3/3	暗褐	極細砂	あり	あり	黄褐色粒～塊10%・灰白色粒～塊3%・砂岩2%含む	〃	〃
97	10YR3/2	黒褐	極細砂	中～強弱	あり	黄褐色粒～塊15%・砂岩塊3%・白色粒～塊3%・ $\phi$ 5 $\sim$ 10 $\mu$ m 塵2%・炭粒2%含む	〃	〃
98	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト+ 粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊5%・明褐色粒～塊10%・灰白色粒5%含む	〃	〃
99	10YR3/3	暗褐	極細砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒3%・灰白色粒～塊3%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
100	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂+ 粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊5%・炭粒5%含む	〃	〃
101	10YR3/2	黒褐	極細砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊5%・砂岩塊2%・ $\phi$ 30 $\mu$ m 塵1%・炭粒～塊2%含む	〃	〃
102	10YR4/2	灰黄褐	極細砂 +シルト	かなり強い	中～強弱	黄褐色粒～塊5%・砂岩塊2%・黒色粒10%・炭粒～塊2%・粘土1%含む	〃	〃 下層に鉄分多 層に含む
103	10YR4/2	灰黄褐	粘土	あり	強い	砂岩粒～塊3%・炭粒～塊1%・粘土粒1%含む	〃	人為
104	10YR3/2	黒褐	極細砂	かなり強い	中～強弱	砂岩粒～塊7%・白色粒2%・炭粒～塊2%含む	〃	自然
105	10YR3/1	黒褐	極細砂+ 粘土	あり	強い	黄褐色粒2%・砂岩粒～塊15%・灰白色塊5%・炭粒2%含む	〃	〃
106	2.5Y4/2	暗灰黄	粘土	あり	強い	黄褐色粒3%・砂岩粒～塊10%・白色粒3%・炭粒1%・粘土粒1%含む	〃	〃
107	10YR4/2	灰黄褐	極細砂+ 粘土	かなり強い	強い	砂岩粒～塊7%・炭粒2%含む	〃	〃
108	10YR3/2	黒褐	極細砂+ 粘土	あり	強い	砂岩粒～塊3%・黄褐色粒2%・炭粒～塊5%含む	〃	〃
109	2.5Y5/2	暗灰黄	粘土	あり	強い	100 層に類似	〃	〃
110	10YR3/2	黒褐	極細砂 +粘土	あり	強い	108 層に類似。砂岩粒～塊7%・粘土粒1%含む	〃	〃
111	2.5Y5/2	暗灰黄	粘土	あり	強い	109 層に類似。黒褐色塊15%含む	〃	〃
112	5Y3/2	オリーブ黒	極細砂 +シルト	あり	あり	黄褐色粒2%・砂岩粒～塊3%・白色粒3%・炭粒1%含む	〃	〃
113	10YR4/1	暗灰	極細砂 +シルト	かなり強い	中～強弱	黄褐色粒～塊5%・白色粒7%・ $\phi$ 5 $\sim$ 10 $\mu$ m 塵2%・炭粒3%・粘土粒1%含む	〃	〃 鉄分少量含む
114	2.5Y3/2	黒褐	極細砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊7%・砂岩粒～塊5%・オリーブ灰色粒～塊5%・ $\phi$ 3 $\mu$ m 塵2%・炭粒～塊3%・粘土粒1%含む	〃	〃
115	10YR3/1	黒褐	シルト+ 粘土	あり	あり	黄褐色粒3%・砂岩粒～塊2%・オリーブ灰色塊～塊5%・白色粒2%・炭粒～塊3%含む	〃	〃 本片あり
116	10YR3/1	黒褐	極細砂 +粘土	あり	あり	黄褐色塊5%・砂岩粒～塊3%・オリーブ灰色塊3%・炭粒～塊3%・粘土粒1%含む	〃	〃
117	5Y4/1	灰	粘土	あり	強い	黄褐色粒2%・白色粒2%・炭粒1%含む	〃	自然
118	5G2/1	オリーブ黒	粘土	あり	強い	砂岩粒～塊3%・オリーブ灰色塊7%・炭粒～塊2%含む	〃	人為
119	7.5GY4/1	暗緑灰	粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊10%・黒褐色粒～塊7%含む	〃	〃 水の影響を受ける 酸化すると黄色 に変化
120	10YR3/2	黒褐	シルト	かなり強い	中～強弱	黄褐色粒～塊10%・砂岩塊20%・灰白色塊7%・白色粒5%・ $\phi$ 大安山 岩5%・炭粒～塊3%含む	〃	〃
121	10YR3/1	黒褐	シルト+ 粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊3%・砂岩塊7%・灰白色塊～塊3%・炭粒～塊2%含む	〃	〃
122	10YR3/1	黒褐	極細砂 +粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊3%・灰白色塊5%・ $\phi$ 5 $\sim$ 10 $\mu$ m 塵2%・炭粒～塊2%・ 粘土1%含む	旧表土	自然
123	2.5Y3/1	黒褐	粘土	あり	強い	黄色粒3%・灰白色粒3%・炭粒2%含む	〃	〃 下駄出土
124	5Y3/1	オリーブ黒	極細砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色塊2%・砂岩塊2%・灰白色塊2%含む	地山	〃
7E1 レンチ								
1	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊20%・砂岩塊7%・褐色色粒～塊10%・黒褐色塊5%・炭 粒2%含む	近辺以降の 造成土	人為 中野の礫地土を露 丸する
2	10YR5/6	黄褐	シルト	あり	弱い	黄褐色塊20%・褐色塊50%・灰白色塊5%含む	〃	〃 法面埋土
3	10YR5/6	黄褐	シルト	あり	弱い	黄褐色粒7%・褐色塊5%・褐色色塊7%・炭粒2%含む	近郊埋積土	自然 パイ モーダル
4	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂 +シルト	あり	強い	黄褐色粒～塊7%・ $\phi$ 5 $\sim$ 10 $\mu$ m 塵1%・炭粒～塊5%・粘土粒2%含む	〃	〃
5	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂	強い	強い	黄色粒10%・褐色色塊10%・炭粒3%含む	〃	〃
6	10YR4/4	暗	極細砂	あり	あり	黄褐色粒7%・褐色色塊15%含む	〃	〃
7	10YR5/4	にぶい黄褐	極細砂	あり	あり	黄褐色粒～塊15%・褐色色塊10%含む	〃	〃
8	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂	あり	あり	黄褐色粒3%・褐色色塊7%含む	〃	〃
9	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト	あり	あり	黄褐色粒5%・褐色色塊30%含む	〃	〃 鉄分中量含む
10	2.5Y4/6	オリーブ黒	シルト+ 粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊10%・褐色色塊5%含む	〃	〃 3 $\sim$ 9層が赤 土の影響を受けて 変色した土
11	10YR4/3	にぶい黄褐	極細砂 +シルト	あり	強い	黄褐色粒3%・褐色色塊2%・炭粒1%・粘土粒1%含む	〃	〃
12	10YR3/3	暗褐	極細砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊5%・灰白色塊2%・炭粒2%・粘土粒1%含む	1面豊地土	人為
13	10YR4/4	にぶい黄褐	極細砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊30%・褐色塊10%・ $\phi$ 30 $\mu$ m 塵1%・炭粒2%含む	〃	〃
14	10YR4/4	にぶい黄褐	極細砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊15%・砂岩塊2%・暗褐色塊3%・炭粒～塊3%・粘土粒1% 含む	〃	〃
15	10YR4/4	暗	極細砂 +シルト	かなり強い	強い	黄褐色塊5%・灰白色塊10%・褐色色塊15%・炭粒2%・粘土粒1%含む	〃	〃
16	10YR4/2	灰黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊30%・褐色色塊～塊7%・炭粒3%・粘土粒1%含む	〃	〃



№	土色	土質	しまり	粘り	含有物	性状	特徴	備考
17	10YR4/2	灰黄緑	シルト	強い	強い	黄褐色粒 7%・褐色粒～塊 10%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1%含む	1面整地土	人為
18	10YR3/3	にぶい・黄緑	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒 15%・褐色色塊 20%・炭粒～塊 10%・焼土粒～塊 3%含む	〃	〃
19	10YR3/2	黒褐	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒 5%・褐色色塊 7%・黒色粒 2%・焼土粒 1%含む	〃	〃
20	10YR4/4	黒	極細粒砂	強い	弱い	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 10%・炭粒 3%・焼土粒 5%含む	〃	〃
21	10YR4/4	黒	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒 10%・褐色色塊～塊 3%・炭粒 2%・焼土粒 2%含む	〃	配石遺構を覆う土
22	10YR4/4	黒	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊 7%・砂岩粒 2%・褐色色塊～塊 5%・黒色粒 2%含む	〃	〃
23	10YR3/4	暗褐	極細粒砂	あり	あり	黄褐色粒 2%・褐色色塊 3%・炭粒～塊 40%含む	〃	炭を多量に含む層
24	10YR4/4	黒	シルト	あり	あり	黄褐色粒～塊 7%・褐色色塊 5%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2%含む	〃	〃
25	10YR4/4	黒	極細粒砂 +シルト	あり	あり	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 10%・炭粒 2%・焼土粒 1%含む	〃	〃
26	10YR3/4	暗褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 7%・炭粒 3%含む	〃	〃
27	10YR4/4	黒	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 7%・褐色色塊 20%・褐色色塊 3%・砂岩粒 2%・炭粒～塊 2%・焼土粒 1%含む	〃	〃
28	10YR5/6	黄緑	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 15%・炭粒 1%・焼土粒 1%含む	〃	〃
29	10YR5/4	にぶい・黄緑	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色粒 2%・褐色色塊 20%・黒色粒 2%・炭粒 1%含む	〃	〃
30	10YR5/4	にぶい・黄緑	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 20%・褐色色塊 10%・褐色色塊 15%・黒色粒 2%・砂岩粒 2%・焼土粒 1%含む	〃	〃
31	10YR4/4	黒	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 7%・褐色色塊 15%・白色粒 3%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2%含む	溝 1827 覆土(1面)	自然
32	10YR4/6	黒	シルト+ 粘土	あり	強い	黄褐色粒 15%・褐色色塊～塊 20%・黒色粒 2%・炭粒～塊 3%含む	〃	〃
33	10YR6/8	明黄緑	シルト	あり	強い	黄褐色色塊 20%・灰白色粒～塊 10%含む	〃	人為 マンガシ含む
34	10YR4/6	黒	シルト	あり	強い	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 2%含む	〃	〃
35	10YR3/4	暗褐	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・砂岩粒 2%・褐色色塊～塊 10%・炭粒 3%・焼土粒 3%含む	〃	〃
36	10YR3/4	暗褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・砂岩粒 10%・褐色色塊 2%含む	〃	〃
37	10YR3/4	暗褐	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粒 5%・褐色色塊 15%・炭粒～塊 2%含む	〃	自然
38	10YR5/4	にぶい・黄緑	シルト+ 粘土	強い	強い	黄褐色色塊 3%・褐色色塊 20%含む	〃	〃
39	10YR4/4	黒	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色色塊 30%・褐色色塊 10%・黒色粒 3%含む	〃	人為
40	10YR4/4	黒	極細粒砂	強い	やや弱め	39層上同一	〃	〃
41	10YR4/3	にぶい・黄緑	極細粒砂 +シルト	強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 3%・褐色色塊～塊 20%・黒色粒 3%・焼土粒 1%含む	〃	自然 炭分?入る
42	10YR4/3	にぶい・黄緑	極細粒砂 +シルト	強い	やや弱め	41層と同一	〃	〃
43	10YR5/6	黄緑	極細粒砂 +シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊 15%・褐色色塊 10%・黒色粒 1%含む	〃	〃
44	10YR4/4	黒	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 7%・φ 30～50 鋼 2%・炭粒 2%含む	〃	〃
45	10YR4/6	黒	極細粒砂 +細粒砂	あり	強い	黄褐色色塊 10%・褐色色塊 7%・炭粒 1%含む	〃	〃
46	10YR4/4	黒	極細粒砂 +粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 15%・赤褐色色塊 2%含む	〃	〃 和製土層
47	10YR3/3	暗褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色色塊 15%・褐色色塊 10%・褐色色塊 10%・灰白色粒 3%・炭粒 1%・焼土粒 2%含む	溝 1827 裏込め	人為 溝 1827 古段 溝(新)の土
48	10YR5/6	黄緑	シルト+ 粘土	強い	あり	黄褐色粒～塊 7%・砂岩粒 3%・灰白色色塊 5%含む	〃	〃 溝 1827 古段 溝(古)土層
49	10YR5/6	黄緑	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色色塊 20%・砂岩粒 15%・褐色色塊 5%・黒色粒 2%含む	〃	〃 下層
50	10YR4/3	にぶい・黄緑	極細粒砂 +粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 20%・灰白色粒 2%・炭粒～塊 10%含む	1面整地土	〃
51	10YR3/4	暗褐	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒 15%・砂岩粒 1%・褐色色塊 10%・炭粒～塊 7%・焼土粒～塊 5%含む	〃	〃
52	10YR5/6	黄緑	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 15%・褐色色塊 7%・黒色粒～塊 5%・焼土粒 1%含む	2面整地土	〃
53	10YR3/4	暗褐	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色色塊 3%・砂岩粒 2%・褐色色塊 15%・炭粒 2%含む	〃	〃
54	10YR3/3	暗褐	極細粒砂	あり	あり	黄褐色色塊～塊 20%・砂岩粒 5%・褐色色塊 15%・炭粒 5%・焼土粒 2%含む	溝 1828 覆土(2面)	〃 礎石 1851 支持土
55	10YR5/6	黄緑	極細粒砂 +粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊 20%・砂岩粒 2%・褐色色塊 10%・黒色粒 5%・灰白色色塊 3%・褐色色塊 7%含む	〃	〃
56	10YR4/2	灰黄緑	粘土	あり	強い	黄褐色色塊 7%・褐色色塊 3%・炭粒～塊 3%含む	〃	〃 水成
57	10YR4/1	暗灰	極細粒砂 +粘土	あり	あり	黄褐色色塊～塊 20%・砂岩粒 2%・灰白色塊 10%・褐色色塊 7%含む	〃	〃 人為
58	10YR5/3	にぶい・黄緑	極細粒砂 +粘土	あり	あり	黄褐色色塊～塊 3%・砂岩粒 40%・褐色色塊 5%含む	〃	〃
59	10YR4/3	にぶい・黄緑	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色塊～塊 30%・灰白色粒 7%・炭粒～塊 2%含む	〃	〃
60	10YR3/2	黒褐	粘土	あり	強い	黄褐色色塊 3%・褐色色塊～塊 5%・炭粒～塊 2%含む	〃	〃 水成
61	10YR3/3	暗褐	粘土	強い	強い	黄褐色色塊～塊 10%・砂岩粒 40%含む	〃	〃
62	10YR4/2	灰黄緑	粘土	強い	強い	黄褐色色塊～塊 5%・砂岩粒 3%・焼土粒 2%含む	〃	〃
63	10YR3/4	暗褐	粘土	あり	強い	黄褐色色塊～塊 10%・砂岩粒 30%・白色粒 3%・炭粒～塊 2%含む	〃	〃
64	10YR4/2	灰黄緑	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色色塊～塊 15%・砂岩粒 10%・白色粒 2%含む	〃	〃 人為
65	2.5Y3/2	黒褐	粘土	やや弱め	強い	黄褐色色塊 2%・炭粒～塊 3%含む	〃	〃 水成
66	10YR3/2	黒褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色色塊～塊 20%・砂岩粒 10%・灰白色塊 7%・炭粒～塊 3%含む	〃	〃 人為
67	2.5Y3/3	暗オリーブ	粘土	強い	強い	黄褐色色塊～塊 10%・砂岩粒 7%・灰白色色塊 2%・炭粒～塊 2%含む	〃	〃 水成
68	10YR4/4	黒	極細粒砂 +シルト	あり	強い	黄褐色色塊 10%・砂岩粒 5%・φ 5～10 鋼 2%・炭粒 2%・焼土粒 3%含む	2面整地土	人為
69	10YR5/4	にぶい・黄緑	極細粒砂 +シルト	あり	強い	黄褐色色塊～塊 15%・砂岩粒 5%・褐色色塊 10%・炭粒～塊 5%・焼土粒 1%含む	〃	〃
70	10YR3/4	暗褐	極細粒砂 +シルト	強い	強い	黄褐色色塊 5%・褐色色塊～塊 5%・褐色色塊 10%・炭粒～塊 3%含む	〃	〃
71	10YR4/6	黒	極細粒砂	あり	あり	黄褐色色塊～塊 7%含む	〃	〃 地階内部分に褐色土色入る

№	土色	土質	しまり	粘着	含有物	性状	用途	備考
72	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～20%・褐灰色塊 10%・砂岩2%・炭粒～塊 10%・焼土粒～塊 7% 含む	2面砂粘土	人為
73	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 5%・褐灰色塊 7%・炭粒～塊 5%・焼土粒 3% 含む	〃	〃
74	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	あり	やや弱め	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 5%・炭塊 1% 含む	〃	〃
75	10YR3/2	黒褐色	シルト	強い	やや弱め	黄褐色～塊 15%・砂岩塊 20%・灰白色塊 5%・炭粒 2% 含む	〃	〃
76	10YR4/3	暗褐色	極細粒砂	あり	あり	黄褐色～塊 30%・砂岩塊 5%・褐灰色塊 15%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
77	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色～塊 15%・砂岩塊 3%・褐灰色塊 10%・灰白色塊 2%・炭粒～塊 5% 含む	〃	〃
78	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色～塊 10%・砂岩塊 2%・褐灰色塊 20%・炭粒～塊 7%・焼土粒 3% 含む	〃	〃
79	10YR3/4	暗褐色	極細粒砂 +シルト	あり	強い	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 7%・炭粒 2%・焼土粒 3% 含む	〃	〃
80	10YR3/2	黒褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～塊 5%・砂岩塊 1%・褐灰色塊 2% 含む	〃	〃
81	10YR4/3	灰黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 40%・褐灰色塊 5%・砂岩 3% 含む	〃	〃
82	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色～塊 25%・褐灰色塊 10%・褐色塊 5%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
83	10YR3/4	暗褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 3%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
84	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	あり	あり	褐色塊 7%・炭粒 1% 含む	〃	〃
85	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 20%・炭粒 2%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
86	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 15%・灰白色塊 1%・炭粒 2% 含む	〃	〃
87	10YR3/4	暗褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	弱い	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 10%・炭粒～塊 5%・焼土粒～塊 2% 含む	〃	〃
88	10YR3/3	暗褐色	シルト	かなり強い	強い	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 3%・褐灰色塊 5%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
89	10YR4/4	暗褐色	シルト	かなり強い	強い	黄褐色～塊 3%・褐灰色塊 7% 含む	〃	〃
90	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂 +シルト	強い	強い	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 3%・黒褐色塊 7%・褐灰色塊 5%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
91	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・砂岩塊 1%・褐灰色塊～塊 7% 含む	〃	〃
92	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂 +シルト	強い	強い	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 10%・黒褐色塊 5%・炭粒～塊 5%・焼土粒～塊 3% 含む	〃	〃
93	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	あり	あり	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊～塊 10%・炭粒 2%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
94	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色～塊 7%・褐灰色塊 5%・炭粒 2% 含む	〃	〃
95	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 5%・褐灰色塊 3%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
96	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	強い	弱い	黄褐色～塊 7%・砂岩塊 3%・灰白色塊 5%・炭粒～塊 3% 含む	〃	〃
97	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂 +粘土	かなり強い	強い	黄褐色～塊 10%・砂岩塊 5%・灰白色塊 7%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
98	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	あり	やや弱め	黄褐色～塊 7%・褐灰色塊 5%・褐色塊 3%・炭粒 1% 含む	〃	〃
99	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色～塊 7%・褐灰色塊 3%・炭粒 2%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
100	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂 +シルト	あり	あり	黄褐色～塊 2%・褐灰色塊 5% 含む	〃	〃
101	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色～塊 10%・砂岩塊 20%・黒褐色塊 5%・褐灰色塊 3%・黒色塊 2%・繊維 1%・焼土粒 2% 含む	〃	〃
102	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・砂岩塊 2%・褐灰色塊 5%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
103	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	やや弱め	強い	黄褐色塊 2%・灰白色塊 2%・炭粒～塊 5% 含む	〃	〃
104	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 15%・炭粒 2%・焼土粒 3% 含む	〃	〃
105	10YR3/4	暗褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～塊 20%・褐灰色塊 7%・褐色塊 3%・焼土粒～塊 3% 含む	〃	〃
106	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂 +粘土	強い	あり	黄褐色～塊 50%以上・砂岩塊 5%・褐灰色塊 15%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
107	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 5%・黒色塊 3%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1% 含む	〃	〃
108	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 15%・褐灰色塊 7%・黒色塊 2% 含む	〃	〃
109	10YR4/4	黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～塊 10%・褐灰色塊 7%・炭粒 2% 含む	〃	〃
110	10YR4/6	黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 3%・褐灰色塊 5% 含む	〃	〃
111	10YR4/6	黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色塊 3%・褐灰色塊 5% 含む	〃	〃
112	7.5Y4/1	緑灰色	シルト	弱い	やや弱め	黄緑色塊 10%・緑色塊 20%・炭塊 1% 含む	〃	〃
113	7.5Y3/2	黒褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色塊 7%・褐灰色塊 10%・黒色塊 3% 含む	〃	〃
114	10YR4/6	黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～塊 20%・砂岩塊 2% 含む	〃	〃
115	10YR6/6	明黄褐色	—	—	—	灰黄褐色粘土 10% 含む	〃	〃

第4表 遺構土層一覽

遺構№	№	土色	土質	しまり	粘着	含有物	備考
7A1 トレンチ							
土 1861	J	10YR3/3	暗褐色	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色塊 7%・砂岩塊 3%・φ 10mm 礫 5%・炭粒～塊 5% 含む
	2	10YR2/2	黒褐色	極細粒砂 +シルト	強い	やや弱め	黄褐色～塊 2%・焼土粒 1% 含む
	3	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色～塊 15%・砂岩塊 3%・灰白色塊 5%・φ 30～50mm 礫 2%・炭粒～塊 5% 含む
壁 1862	A	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・灰白色塊～塊 5%・φ 30mm 礫 3%・炭粒 2% 含む
	B	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色～塊 20%・灰白色塊 30%・黒褐色塊 5%・炭粒～塊 2%・焼土粒 1% 含む
	C	10YR3/4	暗褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～塊 10%・暗褐色塊 10%・砂岩塊 7%・炭粒～塊 7%・焼土粒～塊 3% 含む
	D	10YR4/4	黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色塊 20%・砂岩塊 7%・灰白色塊 7%・暗褐色塊 7%・φ 10～50mm 礫 3%・炭粒～塊 3% 含む
	E	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色～塊 7%・砂岩塊 2%・暗褐色塊 3%・φ 10～30mm 礫 10%・炭粒～塊 5%・焼土粒～塊 2% 含む

遺跡No.	%	土色	土質	しまり	粘性	含有物	備考		
聖1862	F	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	あり	あり	黄褐色30%・砂岩粒7%・灰白色塊15%・黒褐色塊15%・φ30～50μm 5%・炭粒～塊7%含む		
	G	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊10%・黒褐色塊15%・白色塊5%・φ30～準大山岩7%・炭粒～塊3%含む		
	H	10YR6/8	明黄褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色塊15%・砂岩塊5%・黒褐色塊20%・灰白色粒～塊7%・φ50μm 5%・炭粒～塊5%含む		
	J	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色粒～塊10%・砂岩塊15%・褐色炭粒7%・灰白色粒～塊5%・褐色塊10%・炭粒～塊5%・焼土粒1%含む		
	K	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂+シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊30%・砂岩塊20%・灰白色塊15%・φ30μm 5%・炭粒～塊3%含む		
	L	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	かなり強い	あり	黄褐色塊20%・砂岩塊10%・黒褐色塊7%・灰白色塊10%・炭粒3%含む		
	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊10%・灰白色粒～塊5%・砂岩塊2%・炭粒1%含む		
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂+粘土	あり	強い	黄褐色色粒～塊15%・灰白色粒～塊5%・砂岩塊1%・炭粒～塊3%含む		
	P1864	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色色粒～塊10%・砂岩塊5%・灰白色粒～塊3%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む	
	2	10YR4/4	褐色	細粒砂	あり	やや弱め	黄褐色色粒～塊10%・灰白色粒～塊5%・砂岩2%・炭粒～塊5%含む		
P1865	1	10YR5/6	黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色色粒～塊10%・灰白色粒～塊7%・炭粒2%・焼土粒1%含む		
P1866	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色色粒3%・炭粒2%含む	柱礎?	
2	10YR4/4	褐色	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色色粒～塊10%・灰白色粒～塊5%・砂岩2%・炭粒～塊5%含む			
P1867	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色色粒～塊15%・灰白色粒～塊3%・砂岩塊3%・φ30～50μm 2%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む		
P1868	a	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色色粒～塊3%・砂岩塊～塊10%・白色粒3%・φ50μm 2%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む	調査区北東隅草場で確認	
P1869	1	—	—	—	—	—	土層に記なし	平面のみ確認	
P1870	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	あり	強い	黄褐色色粒～塊10%・φ30μm 2%・炭粒～塊7%・焼土粒1%含む		
2	10YR4/4	褐色	極細粒砂	あり	強い	黄褐色色粒3%・灰白色塊2%・φ30μm 1%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む			
P1871	1	—	—	—	—	—	土層に記なし	平面のみ確認	
P1872	1	10YR4/4	褐色	シルト	強い	あり	黄褐色色粒～塊7%・砂岩塊2%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む		
2	10YR4/4	褐色	極細粒砂	やや弱め	あり	黄褐色色粒～塊5%・砂岩塊2%・炭粒～塊3%含む			
P1873	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂+粘土	あり	強い	黄褐色色粒～塊5%・炭粒～塊3%含む		
溝1873	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒～塊7%・灰白色粒2%・φ50μm 3%・炭粒～塊7%・焼土粒1%含む		
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒～塊10%・砂岩2%・φ50μm 1%・炭粒～塊5%含む		
P1874	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色色粒～塊3%・灰白色粒1%・炭粒2%・焼土粒1%含む		
P1875	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	強い	あり	黄褐色色粒5%・砂岩塊1%・炭粒～塊2%・焼土粒2%含む		
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂+粘土	やや弱め	強い	黄褐色色粒～塊7%・灰白色粒～塊1%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む		
	3	10YR4/4	褐色	極細粒砂	あり	強い	黄褐色色粒～塊5%・灰白色粒3%・炭粒～塊2%含む		
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂+粘土	強い	強い	黄褐色色粒～塊5%・白色粒2%・炭粒～塊3%・焼土粒～塊2%含む		
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒～塊10%・灰白色粒3%・砂岩塊2%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む		
P1876	1	10YR3/2	黒褐色	極細粒砂	あり	あり	黄褐色塊5%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む		
	2	10YR3/3	黒褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒7%・砂岩2%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む		
	4	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	あり	あり	黄褐色色粒～塊10%・砂岩塊2%・灰白色粒2%・青灰色粘土5%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む		
	5	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒～塊5%・褐色色粒～塊5%・白色粒2%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む		
礎石1877	—	—	—	—	—	—	土層に記なし		
礎石1878	—	—	—	—	—	—	土層に記なし		
礎石1879	—	—	—	—	—	—	土層に記なし		
P1880	a	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色色粒2%・白色粒3%・炭粒2%含む		
	b	10YR4/4	褐色	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色色粒～塊5%・白色粒1%・灰黄褐色塊2%・炭粒～塊10%含む		
	c	10YR4/4	褐色	極細粒砂	あり	あり	黄褐色色粒～塊5%・φ10～30μm 2%・炭粒～塊2%含む		
	d	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	かなり強い	あり	黄褐色色粒～塊5%・白色粒2%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む	南区西側面で確認	
	e	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	かなり強い	強い	黄褐色色粒～塊7%・砂岩塊3%・白色粒～塊3%・炭粒2%・焼土粒1%含む		
	f	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂+シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色色粒3%・白色粒2%・灰白色粒2%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む		
P1881	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	あり	強い	黄褐色色粒3%・砂岩塊2%・炭粒～塊5%含む		
P1882	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒5%・褐色色塊2%・白色粒2%・炭粒～塊3%含む		
P1883	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色色粒～塊7%・白色粒2%含む		
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色色粒3%・砂岩塊1%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む		
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色色粒～塊5%・白色粒～塊2%・砂岩塊2%・炭粒3%・焼土粒1%含む		
土1884	1	10YR4/4	褐色	極細粒砂+シルト	強い	あり	黄褐色色粒10%・砂岩塊2%・灰白色粒2%・φ10μm 3%・炭粒～塊3%・焼土粒～塊2%含む		
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂+シルト	強い	あり	黄褐色色粒～塊7%・砂岩塊3%・灰白色粒3%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む		
土1885	1	10YR4/4	褐色	シルト	強い	あり	黄褐色色粒3%・砂岩塊～塊2%・灰白色塊2%・褐色色塊3%・φ20μm 1%・炭粒～塊3%・焼土粒～塊1%含む		
	2	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂+粘土	あり	強い	黄褐色色粒～塊5%・砂岩塊5%・白色粒3%・φ50μm 3%・炭粒～塊2%・焼土粒1%含む		
礎石1886	—	—	—	—	—	—	土層に記なし		
礎石1887	—	—	—	—	—	—	土層に記なし		

遺構№	%	土色	土質	しまり	粘性	含有物	備考	
土 1888	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 10%・灰白色塊 5%・ $\phi$ 10～30mm礫 2%・炭粒～塊 5%・焼土粒 2%含む	鉄分少量含む
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 10%・灰白色塊 7%・ $\phi$ 10mm礫 1%・炭粒 2%含む	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト +粘土	強い	強い	黄褐色～黄 15%・灰白色塊 3%・砂岩塊 2%・ $\phi$ 50mm礫 1%・炭粒～塊 5%・焼土粒 2%含む	
土 1889	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 7%・白色粒 2%・炭粒～塊 1%含む	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 10%・砂岩塊 3%・白色粒 3%・ $\phi$ 10～30mm礫 2%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1%含む	
P1890	1	10YR4/4	黄	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 2%・白色粒 2%・炭粒 1%・焼土粒 1%含む	
	2	10YR3/3	暗黄	極細粒砂	あり	あり	黄褐色～黄 7%・砂岩塊 2%・白色粒 2%・ $\phi$ 30mm礫 3%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2%含む	
P1891	1	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 +シルト	あり	強い	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 1%・褐色粒～塊 20%・白色粒 3%・炭粒～塊 5%含む	
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘土	強い	強い	黄褐色～黄 7%・灰白色塊 1%・褐色粒～塊 20%・炭粒～塊 5%含む	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 +粘土	あり	あり	黄褐色～黄 3%・砂岩塊 1%・白色粒 2%・炭粒 2%含む	
P1892	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 5%・白色粒 5%・炭粒 1%含む	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	強い	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 2%・白色粒～塊 5%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1%含む	
P1893	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	強い	やや弱め	黄褐色～黄 5%・炭粒～塊 3%含む	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +細粒砂	あり	あり	黄褐色～黄 7%・砂岩塊 3%・白色粒～塊 2%・ $\phi$ 10mm礫 1%含む	
P1894	1	10YR4/4	黄	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 7%・砂岩塊 1%・白色粒 2%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1%含む	$\phi$ 40～50mm安山岩片を上層に埋め込
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	強い	黄褐色～黄 10%・砂岩塊～塊 5%・白色粒 2%・炭粒～塊 5%含む	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 7%・灰白色塊～塊 2%・ $\phi$ 30～50mm礫 3%・炭粒～塊 3%・焼土粒～塊 3%含む	
P1895	1	10YR4/4	黄	極細粒砂	あり	あり	黄褐色～黄 5%・炭粒～塊 2%含む	
P1896	1	10YR3/2	黒褐色	粘土	あり	強い	黄褐色～黄 2%・砂岩塊 1%・灰白色塊 2%・炭粒～塊 2%含む	
P1897	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 7%・砂岩塊 2%・白色粒 3%・炭粒～塊 5%含む	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	強い	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 2%・白色粒 2%・炭粒～塊 3%含む	
遺 1898	1	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 +細粒砂	やや弱め	あり	黄褐色～黄 10%・砂岩塊 5%・ $\phi$ 10～30mm礫 10%含む	
P1899	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 5%・砂岩塊～塊 5%・炭粒 2%含む	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	あり	黄褐色～黄 2%・砂岩塊 1%・灰白色塊～塊 3%・炭粒 2%含む	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色～黄 7%・砂岩塊～塊 2%・灰白色塊～塊 5%・炭粒～塊 2%含む	
土 1900	a	10YR4/2	灰黄褐色	極細粒砂 +シルト	強い	弱い	砂岩塊～塊 7%・白色粒 5%・ $\phi$ 30～50mm礫 5%・安山岩片 10%・炭粒～塊 3%含む	
P1901	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	中央 ST 内で城出土層 ST 内で城出土
P1902	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	東岸 ST 内で城出土
P1903	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	東岸 ST 内で城出土
P1904	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	東岸 ST 内で城出土
7E1トレンチ								
砂 1801	1	10YR4/4	黄	シルト	かなり強い	強い	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 2%・褐色色塊 7%・炭粒～塊 5%・焼土粒～塊 2%含む	円錐、底面一壁面焼熟し赤化
	2	10YR4/4	黄	シルト	かなり強い	強い	黄褐色～黄 3%・砂岩塊 2%・褐色色塊 7%・炭粒～塊 3%・焼土粒～塊 5%含む	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	—	—	—	
焼土 1802	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	
P1803	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	あり	あり	黄褐色～黄 2%・炭粒～塊 7%・焼土粒～塊 3%含む	炭塊は土層に多い
	2	10YR4/4	黄	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 5%・褐色色塊 3%・炭粒～塊 2%・焼土粒 1%含む	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色～黄 3%・褐色色塊 3%・炭粒 3%・焼土粒 1%含む	
焼土 1804	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	
焼土 1805	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	
遺 1806	1	10YR4/4	黄	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色～黄 5%・褐色色塊 3%・灰白色塊～塊 2%・炭粒～塊 5%含む	炭塊は土層に多い
P1807	1	—	—	—	—	—	土層に記載なし	P1839に引られる
P1808	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	あり	強い	黄褐色～黄 3%・炭粒～塊 5%含む	遺構を現す
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	あり	強い	黄褐色～黄 20%・炭粒 3%含む	
P1809	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂 +シルト	強い	弱い	黄褐色～黄 5%・砂岩塊 5%・灰白色塊～塊 5%・炭粒 2%含む	柱窟
	2	10YR4/6	黄褐色	極細粒砂	強い	あり	黄褐色～黄 2%・砂岩塊 2%・砂岩塊 3%・灰白色塊 3%含む	
	3	10YR4/4	黄	シルト +粘土	あり	あり	黄褐色～黄 10%・炭粒 2%含む	
	4	10YR5/8	黄褐色	シルト	強い	強い	黄褐色～黄 2%・砂岩塊 2%・灰白色塊 3%・炭粒 1%含む	
	5	10YR5/8	黄褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 7%・灰白色塊 7%含む	
P1810	1	10YR4/4	黄	シルト	かなり強い	あり	黄褐色～黄 3%・褐色色塊 10%・砂岩塊 2%・焼土粒 1%含む	風化礫岩・粘土少量含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	細粒砂 +粘土	あり	あり	黄褐色～黄 2%含む	
	3	10YR4/6	黄	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色～黄 2%・褐色色塊 3%・炭粒 1%含む	
P1811	1	10YR3/4	暗黄	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～黄 2%・褐色色塊 3%・炭粒 1%含む	柱窟
	2	10YR4/4	黄	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色～黄 3%・褐色色塊 3%・炭粒 2%含む	
P1812	1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	あり	強い	黄褐色～黄 7%・褐色色塊～塊 7%・細礫 1%含む	柱窟
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	かなり強い	強い	黄褐色～黄 7%・砂岩塊 20%・灰白色塊 3%・炭粒 2%含む	
	3	10YR4/1	褐色	粘土	強い	強い	黄褐色～黄 3%・砂岩塊 10%・灰白色塊 3%・炭粒～塊 2%含む	
P1812	1	10YR4/4	黄	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色～黄 2%・褐色色塊 7%含む	
	2	10YR4/4	黄	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色～黄 2%・褐色色塊 7%含む	

濃縮№	%	土色	土質	しまり	粘性	含有物	備考			
P1813	4	10YR4/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色～褐5%・灰白色粒3%・炭粒1%・焼土粒2%含む	東北北壁面で確認		
	1	10YR4/4	泥	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色粒3%・褐灰色塊5%・炭粒2%含む			
	2	10YR3/4	暗泥	極細粒砂	強い	強い	黄褐色粒1%・褐灰色塊2%・炭粒2%含む			
P1814	1	10YR4/4	泥	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色塊7%・明褐色粒3%・褐灰色塊5%・炭粒2%含む			
	2	10YR3/4	暗泥	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色～褐3%・褐灰色塊10%・灰白色粒2%含む			
P1815	1	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊15%・灰白色粒1%・炭粒～塊10%・焼土粒3%含む			
P1816	1	10YR4/4	泥	極細粒砂 +粘土	強い	強い	黄褐色粒～塊7%・褐灰色塊10%・灰白色塊～塊2%・炭粒2%含む			
	2	10YR4/2	灰黄泥	粘土	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊7%・灰白色塊5%・炭粒2%・焼土粒～塊2%含む			
	3	10YR4/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊5%・砂岩粒3%・灰白色粒3%・炭粒2%含む			
	4	10YR4/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色粒2%・砂岩粒5%・灰白色粒2%含む			
P1817	1	10YR4/4	泥	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粒～塊20%・砂岩粒2%・褐灰色塊10%・褐色粒7%・炭粒～塊5%・焼土粒～塊3%含む	南区東壁面でのみ確認		
溝1818	1	10YR5/6	黄泥	極細粒砂	かなり強い	弱い	灰白色塊10%・褐色塊5%・炭粒2%含む	南区東壁面でのみ確認 水成増積がみられる		
	2	10YR4/1	褐灰	粘土	あり	強い	黄褐色粒3%・明褐色粒10%・炭粒～塊5%含む			
P1819	1	10YR5/6	黄泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊10%・灰白色粒1%・炭粒～塊3%含む	東北北壁面で確認		
	2	10YR5/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色塊60%・黒色粒2%含む			
	3	10YR4/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊5%・灰白色塊3%・炭粒1%含む			
4	10YR3/4	暗泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊10%・褐灰色塊7%・灰白色塊2%・炭粒～塊2%含む				
P1820	1	10YR3/3	明泥	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒5%・褐灰色塊15%・灰白色粒3%・炭粒～塊3%・焼土粒1%含む	東北北壁面で確認		
P1821	1	10YR3/3	明泥	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒7%・褐灰色塊3%・黒餅1%・炭粒5%・焼土粒1%含む	東北北壁面で確認		
	2	10YR4/2	灰黄泥	粘土	あり	強い	黄褐色粒1%・褐色塊2%・炭粒2%含む			
P1822	1	10YR4/2	灰黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒5%・白色粒2%・黒粒土塊7%含む			
	2	10YR4/2	灰黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色塊7%・明褐色粒～塊3%・黒色粒～塊3%含む			
土1823	1	10YR4/4	泥	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊7%・褐灰色塊5%・炭粒2%含む			
礎石 1824	—	—	—	—	—	—	土層記載なし			
礎石 1825	—	—	—	—	—	—	土層記載なし			
P1826	1	10YR5/4	にがい黄泥	シルト	あり	あり	黄褐色粒2%・砂岩粒5%・褐灰色塊～塊3%・炭粒1%含む	履層式出土		
	2	10YR4/4	泥	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊2%・砂岩粒～塊2%・炭粒～塊5%・焼土粒2%含む			
溝1827	—	—	—	—	—	—	土層は第3表に掲載	履層式出土		
溝1828	—	—	—	—	—	—	土層は第3表に掲載	ST内北壁面でのみ確認		
P1829	1	10YR4/3	にがい黄泥	極細粒砂	あり	強い	黄褐色粒～塊3%・炭塊5%・炭粒7%・焼土粒2%含む	柱を多量に含む ピット		
	2	10YR4/3	にがい黄泥	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊3%・褐灰色塊3%・灰白色塊2%・炭粒～塊5%含む			
P1830	1	10YR4/2	灰黄泥	極細粒砂	あり	あり	黄褐色粒～塊5%・砂岩粒～塊3%・褐灰色塊3%・灰白色塊2%・炭粒2%含む	柱直上層 柱直下層		
	2	10YR4/2	灰黄泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊7%・灰白色粒3%・炭粒～塊3%・焼土粒3%含む			
	3	10YR4/3	にがい黄泥	極細粒砂	強い	やや弱め	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊10%・炭粒～塊3%・焼土粒2%含む			
	5	10YR4/2	灰黄泥	極細粒砂	あり	あり	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊7%・灰白色塊3%・焼土粒2%含む			
段1831	1	10YR4/3	にがい黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊3%・炭粒～塊5%含む	段丹まり		
段1832	1	10YR4/3	にがい黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒3%・褐灰色塊3%・炭粒～塊30%含む	段丹まり		
P1833	1	10YR4/4	泥	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊10%・褐灰色塊15%・炭粒2%・焼土粒2%含む			
P1834	1	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊10%・褐灰色塊10%・炭粒1%・焼土粒2%含む			
P1835	1	10YR4/4	泥	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊10%・灰白色塊～塊10%・炭粒2%・焼土粒1%含む	柱直？		
	2	10YR4/3	にがい黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒7%・灰白色塊5%・炭粒～塊15%含む			
	3	10YR4/3	にがい黄泥	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒7%・灰白色塊～塊10%・炭粒2%・焼土粒1%含む			
P1836	4	10YR4/4	泥	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒7%・灰白色塊10%・炭粒1%・焼土粒1%含む			
	1	10YR4/4	泥	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊10%・褐灰色塊7%・炭粒5%含む			
土1837	1	10YR4/3	にがい黄泥	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊15%・褐灰色塊7%・炭粒～塊2%含む	上面に貼り土層す		
	2	10YR3/3	暗泥	シルト	強い	やや弱め	黄褐色粒～塊7%・灰白色塊5%・炭粒3%含む			
	2	10YR3/2	黒泥	極細粒砂 +粘土	あり	強い	黄褐色塊10%・明褐色塊5%・灰白色塊3%・炭粒2%・焼土粒2%含む			
	3	10YR3/2	暗泥	極細粒砂	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊3%・褐灰色塊～塊3%・褐色塊5%・灰白色塊2%・炭粒～塊7%・焼土粒～塊5%含む			
	4	10YR3/3	暗泥	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊7%・褐灰色塊10%・炭粒～塊7%・焼土粒～塊5%含む			
5	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊20%・褐灰色塊10%・灰白色塊5%・焼土粒2%含む				
P1838	6	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	強い	黄褐色塊10%・褐灰色塊7%・灰白色塊3%・炭粒2%・焼土粒～塊3%含む	少量の鉄分含む		
	7	10YR4/2	灰黄泥	シルト	強い	あり	黄褐色塊7%・褐灰色塊10%・灰白色塊2%・炭粒2%・焼土粒1%含む			
	1	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊10%・褐灰色塊5%・炭粒1%含む			
	2	10YR5/4	泥	極細粒砂 +シルト	強い	強い	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊3%・焼土粒1%含む			
	3	10YR4/4	泥	極細粒砂 +シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊5%・褐灰色塊7%・炭粒～塊1%含む			
	P1839	1	10YR5/3	にがい黄泥	シルト	かなり強い	強い		黄褐色粒5%・炭粒～塊3%・焼土塊1%含む	少量の鉄分含む、 P1807を参照
	P1840	1	10YR4/2	灰黄泥	シルト	かなり強い	強い		黄褐色粒～塊15%・灰白色塊～塊5%・炭粒2%含む	
2		10YR4/2	灰黄泥	シルト +粘土	あり	あり	黄褐色粒～塊7%・灰白色塊2%・炭粒1%・焼土粒1%含む			
3		10YR3/2	黒泥	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊5%・灰白色塊～塊5%・炭粒2%・焼土粒1%含む			

濃縮%	%	土色	土質	しまり	粘性	含有物	備考	
P1841	1	10YR4/2	灰黄褐	シルト	強い	弱い	黄褐色粒～塊 5%・明褐色粒～塊 3%・灰白色粒 2%・炭粒～塊 3%含む	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 7%・灰白色粒 1%・炭粒 2%含む	少量の炭分含む。
	3	10YR4/2	灰黄褐	シルト + 粘土	強い	あり	黄褐色粒 3%・灰白色粒 1%含む	P1840を切る
P1842	1	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 15%・褐色粒～塊 5%・灰白色粒 7%・炭塊 5%・焼土塊 1%含む	P1843を切る
	2	10YR4/2	灰黄褐	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色塊 5%・褐灰色塊 5%・炭粒 1%・焼土粒 2%含む	
	3	10YR4/2	灰黄褐	極細粒砂 + 粘土	かなり強い	あり	黄褐色塊 15%・褐色塊 3%・炭粒 3%・焼土粒 1%含む	
P1843	1	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 7%・炭塊 5%・焼土粒 1%含む	
	2	10YR4/2	灰黄褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 15%・褐色粒～塊 3%・灰白色粒 3%・炭塊 2%含む	P1842に切られる
	3	10YR4/2	灰黄褐	シルト + 粘土	強い	あり	黄褐色粒～塊 5%・灰白色粒 2%・炭粒 1%含む	
P1844	1	10YR4/2	灰黄褐	極細粒砂	かなり強い	弱い	黄褐色塊 10%・褐色色塊 5%・明褐色塊 5%・炭塊 3%含む	セクション因なし。平面のみ確認
	1	10YR4/6	褐	極細粒砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 15%・炭粒～塊 3%・焼土粒 1%含む	P1846に切られる
P1846	1	10YR4/2	灰黄褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 3%・褐色色塊 3%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2%含む	
	2	10YR4/4	褐	極細粒砂	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 7%・炭粒～塊 3%・焼土粒 2%含む	P1845を切る
	3	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	あり	あり	黄褐色粒～塊 15%・褐色色塊 3%・黒色粒 1%含む	
P1847	1	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト + 粘土	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊 3%・灰白色粒～塊 5%・明褐色粒 5%含む	柱面
	2	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 7%・明褐色粒 15%・褐色色塊 3%・炭粒 1%含む	
	3	10YR4/6	褐	シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊 5%・明褐色粒 7%・灰白色粒 3%・炭粒 2%・焼土粒 2%含む	
	4	10YR5/2	灰黄褐	粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊 3%・灰白色粒～塊 10%・炭粒 1%含む	
P1848	1	2.5Y6/2	灰黄	粘土	あり	強い	黄褐色粒～塊 2%・灰白色粒～塊 10%・炭粒 1%含む	
	1	10YR5/3	にぶい黄褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 5%・明褐色粒 3%・砂岩塊 2%・灰白色粒 2%・炭粒 1%含む	柱面上層
	2	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	強い	黄褐色粒～塊 7%・明褐色粒 5%・灰白色粒～塊 3%・炭粒 1%含む	柱面下層
P1849	3	10YR5/1	褐灰	極細粒砂 + 粘土	強い	あり	黄褐色塊 10%・砂岩塊 10%・黒色粒 2%含む	
	4	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	強い	強い	黄褐色粒～塊 7%・砂岩塊 3%・灰白色粒 2%・黒色粒 1%含む	
	1	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 3%・砂岩塊 1%・褐色色塊 10%・炭粒 2%含む	炭分少量含む
	2	10YR5/2	灰黄褐	粘土	強い	強い	砂岩塊 2%・灰白色粒 2%・炭粒 2%含む	
P1850	3	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	あり	砂岩塊 7%・褐色色塊 3%含む	
	4	10YR5/2	灰黄褐	極細粒砂	あり	あり	黄褐色粒～塊 5%・灰白色粒 2%含む	
	1	10YR4/4	褐	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊 5%・褐色色塊 15%・砂岩塊 2%・炭粒 3%含む	
	1	—	—	—	—	—	土層記載なし	
P1851	—	—	—	—	—	—	土層記載なし	
P1852	1	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 15%・褐色色塊 20%・黒色粒 3%含む	平面のみ確認
	2	10YR3/2	黒褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 10%・褐色色塊 5%・灰白色粒 3%含む	
P1854	1	10YR4/4	褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	弱い	黄褐色粒～塊 30%・褐色色塊 10%・焼土粒 1%含む	
	2	10YR4/6	褐	極細粒砂 + シルト	かなり強い	やや弱め	黄褐色粒～塊 20%・褐色色塊 5%・黒色粒～塊 5%含む	
P1855	1	10YR4/3	にぶい黄褐	極細粒砂	強い	強い	黄褐色粒 7%・褐色色塊 20%・砂岩塊 1%・炭粒～塊 2%含む	
	2	10YR4/4	褐	極細粒砂 + 粘土	あり	強い	黄褐色塊 15%・褐色色塊 10%・砂岩塊 2%含む	
P1856	1	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	かなり強い	あり	黄褐色粒～塊 30%・砂岩塊 2%・灰白色粒 2%・白色粘土塊 3%・炭粒～塊 2%・焼土粒 1%含む	
土 1857	1	10YR4/4	褐	極細粒砂	強い	あり	黄褐色粒～塊 7%・褐色色塊 15%・φ 50 黒粒 1%含む	南東部遺跡区中央部ト黄塚で確認。南正面に切られる
	2	10YR6/6	明黄褐	極細粒砂 + シルト	強い	あり	黄褐色粒～塊 15%・褐色色塊 20%・炭粒 1%・焼土粒 1%含む	
溝 1858	1	10YR6/8	明黄褐	シルト	あり	やや弱め	黄褐色粒 1%・褐色色塊 20%・褐色色塊 5%含む	炭分少量含む
	2	10YR6/1	褐灰	シルト	あり	やや弱め	灰白色塊 5%・炭塊 1%含む	
	3	10YR4/1	褐灰	極細粒砂 + 粘土	弱い	あり	灰白色塊 5%・炭塊 1%含む	
	4	10YR5/2	灰黄褐	細粒砂	弱い	弱い	黄褐色粒～塊 2%含む	
	5	10YR4/1	褐	細粒砂	弱い	弱い	炭粒～塊 10%含む	炭分少量含む
	6	10Y6/1	灰	極細粒砂 + 粘土	弱い	強い	褐色色塊 5%含む	

## 第3節 遺物

### 1 焼物 (第4・5・6表、第22・23図)

#### (1) 概要

本調査では、7A1 トレンチ、7E1 トレンチで奈良・平安時代から近世・近代までの土器・陶磁器 283 (7A1: 237, 7E1: 46) 点が出土した。本報告では、そのうち 63 点を図示したが、中世の焼物については破片すべてをトレンチ・層位毎ならびに器種毎に分類し、集計表に掲載した。なお、陶磁器や瀬戸・美濃製品については、水澤幸一氏と藤澤良祐氏の指導・鑑定を受けた。また、文中や集計表で用いた器種分類は、文末に記した文献に依った。

#### (2) 7A1 トレンチ

本トレンチでは、奈良・平安時代から近世までの焼物 237 点が出土し、うち主体となる中世は 179 点にのぼる。中世の内訳は、在地産土師質土器 138 (皿 67・大型皿 1・内耳鍋 70)、瓦質土器 6 (風炉)、妬器 [在地産須恵器] 1 (播鉢)、妬器 [常滑・中津川] 14 (甕)、東海系無軸陶器 2 (山茶碗・片口鉢)、古瀬戸 7 (天目茶碗 4・皿類 1・播鉢 1・その他 1)、青磁 7 (碗 6・盤 1)、白磁碗 2、唐物陶器 1 (天目茶碗) で、そのうち 45 点を図示した。

#### ア 5面 (1・2)

いずれも整地土下の旧表土からの出土である。1 は内耳鍋の口縁部で、胎土のきめが細かく焼が固い。口縁部が外反することから、A 類に分類される。2 は山茶碗である。東濃 5 型式古段階に属するものである。

#### イ 4面 (3～5)

すべて整地土内からの出土である。3 は須恵器の杯 A であり、底部に回転糸切りを残す。4 は土師質皿の口縁部である。胎土は精良で 3 群に属し、内外縁に樹脂状の付着物がみられた。立ち上がりが内湾する B 類の器形をとる。口縁はやや外反気味に収めている。5 は土師質皿の底部で、細密な胎土で立ち上がりが直線的な 2A 類である。

#### ウ 2'面 (6～11)

6 は土 1894、他は整地土からの出土である。6 は小型の内耳鍋で、口縁がゆるやかに内湾する C2 類にあたる。7 は須恵器長頸壺の底部で、胎土は赤みを帯びた暗灰色を呈し、回転糸切り痕を残す貼付高台である。8 は土師質皿で、胎土精良な 3 群に属し器厚は薄い。口縁部が屈曲して外反する Cb 類にあたる。端部内外面にタールが付着する。同じく 3C に属する 9 は、底部に糸切り痕が残り、内面に部分的にタールがみられる。土師質皿 10 は器厚が非常に薄くなっており、手づくねの可能性がある。3A に分類される。11 は C II 群に属する青磁碗で、口縁部外面には片切形で雷文があしらわれている。

#### エ 2'面 (12～22)

すべて整地土中からの出土である。12 は在地産須恵器の播鉢の胴部である。櫛目は 7 条で幅は 1.6 cm、外面に縦ナデが入る。内面は摩滅がみられ、使用の様子が窺える。13 は屈曲して口縁が開く土師質皿 3C である。14 は B 類の内耳鍋で、内面に凹線状のヨコナデを施し、口縁が直立する。15 は土師質の大型皿で、1 群の粗い胎土を呈する。口縁部は内湾気味である。内面にススが付着する。16・17 は内耳鍋である。16



は内面に凹線状のヨコナデがみられる B 類で、口縁はやや内湾する。17 は胴部で、やや膨らみながら立ち上がっている。18 は常滑製の底部で、外面に工具ナデがみられる。19 は古瀬戸後Ⅱ期の天目茶碗である。胴部は外傾して直線的に開き、口縁部は直立して端部を外反気味に丸く収めている。茶褐色の鉄釉を施す。20 は青磁碗 BⅢ群で、丸形の蓮弁紋が描かれるが間隔は狭い。胎土が赤く、釉は緑白色を呈するが色が薄いため、素地が透けて全体的に赤味を帯びる。21 の青磁碗は無紋の E 群に属するもので、口縁部直下に細線が一周巡っている。暗緑灰色の釉で施釉されている。22 は同じく無紋の青磁碗で、21 よりも法量は大きい。口縁部は僅かに外反する。口縁と胴部が分離しているが、同一個体として扱った。

#### オ 2 面 (23～25)

いずれも整地土から出土した。23 は古瀬戸後期の天目茶碗で、胴下部にあたる。削り出し高台で、高台脇は広めに削り込んでいる。24 は古瀬戸の播鉢である。底部は回転糸切りで、胴部はやや外反しながら大きく開く。外面にロクロ目を残し、内外面に錆釉を施釉する。内面の櫛目は 11 条、櫛目の幅は 2.5 cm である。帰属時期は後Ⅳ期新段階～大窯Ⅰ段階である。25・27・28・29 は土師質皿であり、うち 25・27・29 は胎土が精良な 3 群に属するもので、28 は胎土の粗い 1 群に分類できる。26 は土師質大型皿の口縁部で、胎土は 1 群である。30・31 は B 類に分類される、内面に凹線状のヨコナデを有する内耳鍋である。32 は中津川の甕の口縁部である。幅 2.2 cm の緑帯は、下端に工具で強く溝を掘り込むことにより、緑帯下方を尖らせて成形している。内面には 0.5 cm 幅の断面三角形の溝が、同じく工具によって深く刻まれている。33 は青磁盤の底部で、残存度は僅かであるが、高台内面まで施釉されている。34 の白磁碗は口縁部がヨコナデによってくびれ、端部が外反することから C 群、14 世紀代に位置づけられるものと考えられる。35 は瓦質の風炉の口縁～胴上部で、胎土は淡褐色をなす。口縁部はやや開いて立ち上がり、胴部との境界には突帯が巡る。頸部外面には連子紋と印花紋（花菱紋・菊花紋）を押捺しており、印花紋は 2 単位分確認できた。6 次調査 6D1 トレンチで出土したものと構成が似る。帰属時期は 15 世紀と考えられる。

#### カ 1 面 (36～40)

いずれも整地土で出土した。36 は内耳鍋の口縁部で、口縁がほぼ直立するため、B ないし D 類に分類されよう。37 は白く精良な胎土を呈する土師質皿 3B で、端部の内外に部分的にタールが付着していることから、灯明皿として使用されたと考えられる。38 は土師質皿 1 群の底部である。39 の白磁碗は端部が外反し先端を尖らせている。大宰府Ⅴ類に位置づけられるものと考えられる。瓦質の風炉 40 は、胴上部の窓の一部である。外面はミガキが入り、黒色処理されている。15 世紀の所産であろう。

#### キ 1 面 (41～44)

41・42 は豎 1862 出土、43・44 は整地土から出土した。41 は土師質皿 1A の口縁部である。42 は青花碗の腰部片で、外面に呉須による胴下端の界線と施紋がみられる。BⅠ群のものと考えられる。43 は土師質皿 2 群の底部である。残存度が低く、器形は判断しがたいが、B 類もしくは C 類に属するものと推定される。44 は古瀬戸天目茶碗の胴下部で、直線的な立ち上がりから、後期に位置づけられるものである。外面に回転ヘラ削り痕がみられ、外面上半部と内面には漆黒の灰釉が施される。

#### ク 近現代 (45)

旧会田中学校グラウンド造成以前の耕作土から出土した、須恵器杯 A の底部である。時期は 9 世紀前半に位置づけられよう。

### (3) 7E1 トレンチ

本トレンチでは奈良・平安時代から近代まで46点の焼物を出土した。うち主体となる中世の遺物は26点である。その内訳は、在地産土師質土器(皿8・内耳4)、瓦質土器2(風炉・火鉢)、石器〔中津川〕1(鏃)、東海系無釉陶器1(山茶碗)、古瀬戸8(天目4・盤類2・茶入1・壺類1)、青磁2(盤1・香炉1)であり、そのうち18点を図示した。

#### ア 2・2' 面 (46～51)

46は炉1801、51は整地土内、その他は検出面からの出土である。2'面は調査区のごく一部にみられるのみであるので、2面と一括で扱う。46は土師質皿2C、47は検出面直上で出土した須恵器の杯蓋Bである。48も検出面直上で出土した土師質皿3Aで、回転糸切り痕がみられる。49は小型の香炉の口縁部で、ほぼ直立して立ち上がる。端部では僅かに外厚して面をつくる。南西部の検出面直上で出土した。50は青磁の盤である。胴部は丸みを持って立ち上がり、口縁部で外方へ屈折して水平に広がる器形をとる。開いた口縁部の上面は僅かに窪み、端部はやや尖る。器厚は薄手で、発色のよい淡緑灰色の青磁釉が厚く掛かる。帰属時期は13世紀代である。51は古瀬戸の折縁深皿で、調査区北東部の2'面整地土内より出土した。胴部は厚手で直直し、口縁部で外方に屈折する。その後屈折部分を折り返し、口縁内面に段をつくっている。外面下方に回転ヘラ削りを施す。胴下半以外に灰釉を施軸し内面は刷毛塗りするが、焼成が甘く発色が悪い。中Ⅳ期に位置づけられる。

#### イ 1面 (52～57)

52は池1827古段階、53は新段階にともなう。54～57は整地土最下層で出土したが、元々2面に伴っていたものと思われる。52は古瀬戸後Ⅲ期にあたる天目茶碗である。胴部は外傾して直に立ち上がり、やや丸く屈折して口縁部に至る。端部は尖らせており、胴の下半部には回転ヘラ削り痕がある。53は、天目茶碗の削り出し輪高台である。外面は露胎である。底裏の削り込みは浅く、高台脇の削り込みも僅かである。底径4.2cm・高台幅0.8cmで内面施軸。底裏に墨書で「三」の文字がみられる。後Ⅰ期に位置づけられる。54は土師質皿2B、55は小壺の胴部と思われるものである。合子や水滴の可能性もあるが、径の大きさから小壺とみた。丸みを帯びた肩部から、僅かにつまみ上げて口縁部をつくるが、端部が欠損している。沈線紋を縦位に配し、暗緑色の灰釉を施軸している。古瀬戸中Ⅰ期または中Ⅱ期に属するものとする。56は古瀬戸後期の大海茶入である。非常に薄手で、肩部の張り出しが顕著である。口縁部は外反して明確につくりだす。外面および口縁部内面に茶褐色の鉄釉を施軸する。57は天目茶碗で、口縁部から底部まで残存しており、器形を知ることができる資料である。胴部は丸みを帯びた半球型で、口縁はヨコナデによって段差をつけてやや外反しながら立ち上がる。口縁の器厚は薄く、端部は尖る。胴下半部は回転ヘラ削り、底面は削り出し輪高台である。高台径は4.6cm、高台幅は0.7cmを測る。底裏の削りは浅く、高台脇の削り込みはみられない。畳付には回転糸切り痕が残る。胴部下端から底裏まで露胎であるが、薄く錆釉が施軸されているため、やや茶色味を帯びている。内面および外面口縁部から胴上半部に茶褐色の鉄釉を施す。古瀬戸中Ⅳ期のものであろう。

#### ウ 近世以降 (58～61)

いずれも南東部の法面被覆土4層より出土したものである。58は内耳鍋の口縁部である。立ち上がりが直立し、内面に凹線状のヨコナデがみられることからB類とする。59・60は土師質皿である。前者は1A、後者は2Bに分類されるが、60は器厚が薄く、手づくね成形とみられる。61の天目茶碗は、胴部の器形は

丸みを帯びているが、57 に比べてやや直線的であるため、時期が下って後 I 期に帰属するものと考えられる。器厚は非常に厚い。胴下半部は回転ヘラ削り調整され、削り出し輪高台である。底径 4.2 cm、高台幅 0.7 cm で、底裏の削り込みはやや深いが、高台脇の段はない。胴下半部から底部にかけては露胎で、内面および外面胴上半部には暗茶褐色の鉄釉が施釉されている。

## エ 現代・攪乱 (62・63)

本堂解体時の攪乱から出土したもので、本来は中世層に帰属していたものと考えられる。62 は瓦質の火鉢である。口縁が内湾し、内外面ともに黒色処理がなされる。口縁端部は摩滅している。胴部には印花紋(円紋・菊花紋)と浮紋を施している。上から連珠紋帯と菊花紋帯を 4 段押捺し、最上段の連珠紋帯は、円紋と浮紋が交互に配されている。水澤幸一氏から、連珠紋を多用する印花紋の在り方は鎌倉の出土品に多いとの教示を受けた。63 は瓦質風戸の胴下部である。内外面ともに摩滅し、底部が僅かに残存しているのみである。

## (4) 小結

### ア 7A1 トレンチ

本トレンチにおける焼物の割合は、在産土師質土器と須恵器が 77% (内訳は内耳鍋 39%・皿 38%) を占め、続いて妬器が 8.9%、貿易陶磁 6.1%・瀬戸産施釉陶器 3.9%、瓦質土器が 3.4% となっている。これまでの A ゾーンにおける出土傾向とは大差なく、本遺跡においては一般的な様相といえる。しかし、他地点に比べて内耳鍋の出土率が高いこと、胎土精良な 2 群や 3 群の土師質皿が 1 群よりも多いことは特徴として挙げられよう。一方、瓦質風戸が一定量得られる点や、中国産の天目茶碗が伴う点は本調査地点でも確認でき、焼物全体に占める数量は少ないにしろ、A ゾーンの平場において両者は普遍的な存在であるということが確かめられた。帰属時期としては 12 世紀～16 世紀初頭まで幅があるが、15 世紀中頃～後半にピークを迎えるようである。こうした傾向もこれまでの所見と整合し、本遺跡の性格を物語るものである。

### イ 7E1 トレンチ

E ゾーンの発掘は今回が初めてであり、とりわけ本調査区が長安寺の本堂跡であることから、寺院にかかわる中世遺物の出土が期待された。調査の結果、焼物の割合について、A ゾーンとはやや異なった傾向がみられた。在産土師器をみると、その割合が 46% にとどまるのに対し、瀬戸産施釉陶器は 31% と非常に高くなっている。なかでも天目茶碗の割合が大きく、15.7% を占める。さらに瓦質土器や茶人が得られたことにより、A ゾーンに比べて茶道具の出土が目立つという結果となった。これについては出土遺物の総量が少ないことも要因のひとつとして考えられるが、石製品の硯についても同様のことがいえ、本地点における特質と捉えられる。これらの多くは 2 面に由来し、時期的には古瀬戸中Ⅳ期～後Ⅰ期すなわち 14 世紀中葉～後半に遡り、A ゾーンと比較して古い傾向にある。こうした遺物の内容や時期的な見解は、今後この平場の性格を解析していくうえで重要な手掛かりとなろう。

## 参考文献

- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』九州歴史資料館
- 上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた一五、一六世紀における両期の表相」『MUSEUM』416 東京国立博物館
- 小平和夫 1990 「古代の上器」『中央自動車道長野緑文化財発掘調査報告書 4 総論編』長野県埋蔵文化財センター
- 市川隆之ほか 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 9 長野県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大塚編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 冊 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
- 松本市教育委員会 2015 「長野県松本市殿村跡第 5 次発掘調査報告書」

第6表 焼物の器種・器形別破片数集計（上段:7A1・7E1、下段:Aゾーン全体）

調査区		7A1トレンチ										7E1トレンチ					
		5 面	3 ・ 4 面	2 面	2 面	1 / 1 面	計	%	2 ・ 2 面	1 面	道 管 以 降	現 代	計	%			
土師質土器	皿	1層	1	1	7	5	4	18	10.1		1	1	2	7.7			
		2層		1	3	11	4	6	25	14.0	1	3	1	5	19.2		
		3層			5	8	9	2	24	13.4			1	8	30.8		
	大型皿	1層					1	0.6									
	内耳皿		2	3	6	35	19	5	70	70	39.1						
在地系須恵器	裾鉢・片貝鉢									1							
瓦質土器（在地系・その他）	内耳皿・裾鉢・片貝鉢																
	風鈴・火鉢類				2	3	1	6	0	3.4			2	7.7			
無輪陶器（東濠・最良層）	山茶碗	1							0.6		1	1	3.8				
佐器（常滑・中津川・珠洲産）	小皿								16	8.9			2	7.7			
	片貝鉢		1						0.6								
	費・その他			1	5	8	14	7.8			1	1	3.8				
輪軸陶器（古瀬戸・大室）	大目茶碗			1	1	2	4	2.2			3	1	4	15.4			
	平碗																
	茶碗																
	縁軸徳利類				1				0.6			1	2	7.7			
	鉢・甃類																
	飯子・水注・花瓶類																
	茶入											1	1	3.8			
	合子										1	1	3.8				
祖母櫛茶壺																	
その他の壺																	
裾鉢					1				0.6								
その他					1				0.6								
質易陶器	古白磁	碗・皿類			1	5		6	3.4								
		甃					1	1	0.6			1	1	3.8			
		香炉											2	7.7			
白磁	碗・皿				1	1	2	2	1.1	1.1							
	飯子類																
	碗・皿類					1			0.6								
唐物陶器	大目茶碗						1	0.6	0.6								
茶壺																	
合計		4	5	17	77	54	22	179	100.0	6	10	7	3	26	100.0		

器種	器形	AMK														
		5面（～15c1/4）		4面（15c2/4～3/4）		3面（～15c4/4）		2面（15c4/4～16c1/4）		1面（16c2/4～3/4）						
		計	%	計	%	計	%	計	%	計	%					
土師質土器	皿	1層	3	17.9	42	22.3	53	26.5	87	19.4	125	29.8				
		2層	8	28.6	76	134	40.4	71.3	60	136	30.0	68.0				
		3層			16	8.5			23	11.5	70	223	15.6			
	大型皿															
	内耳	2	7.1					5	2.5	9	2.0					
	裾鉢・片貝鉢			7	3.7			28	14.0	133	29.6					
佐器（在地系須恵器）	茶碗			2	1.1			6	3.0	4	0.9					
瓦質土器	茶碗			3	1.6	1	0.5	0.5	1	14	0.2	3.4				
												1	0.2			
													6	1.4		
佐器（常滑・珠洲・越前等）	茶碗	4	14.3	14.3	8	4.3	4	2.0	2.0	17	3.8	3.8	8	1.9		
陶器（東海系加賀）	山茶碗	2	7.1	17.9	3	1.6	1.6	3	1.5	1	0.2	0.2	1	0.2		
		3	10.7										2	0.2		
														2	0.2	
陶器（古瀬戸・大室）	大目茶碗				5	2.7	4	2.0	8	1.8	5	1.2				
					5	2.7	1	0.5	9	2.0	6	1.4				
					9	4.8	3	1.5	3	0.7	5	1.2				
					1	0.5										
					1	0.5										
青磁	碗・皿類			3	1.6	1.6	4	2.0	2.0	12	13	2.7	2.9	5	1.2	
															1	0.2
															2	0.5
白磁	碗・皿			2	1.1	1.6	3.7		3	0.7	0.7	4	0.9			
青花	碗・皿類													3	0.7	
唐物陶器	大目茶碗			1	0.5	0.5	2	1.0	1.0	1	0.2	0.4	2	0.5		
茶壺														1	0.2	
合計		28	100.0	188	100.0	200	100.0	449	100.0	420	100.0					

第5表 焼物一覧

焼物 No.	焼土地点		遺構	種類	形状	法層 (cm)		埋付深	状態		焼物	土質	成分・調査・分析・写真		
	地区	住居・遺跡				厚さ	底厚		口縁	底縁				口縁	底縁
1	TAI	NE	5	123 部	土師瓦	内丸輪						相模	1 羅コナデ		
2	TAI	NW	5	123 部	無釉陶	山手陶	(15/9)		1/20			淡灰	ロコロナデ、1 羅コナデ、東郷 5 古		
3	TAI	NW	4	焼山岳道上	灰泥部	杯 A		(7/0)		1/4		相模	ロコロナデ、底郷焼成灰		
4	TAI	S	4	土器盛土	土師瓦	皿 3B	(7/8)		1/8			相模	ロコロナデ、1 羅コナデ、内丸輪付灰物		
5	TAI	NW	4	惣土 185 部	土師瓦	皿 2A	(5/2)		1/4			相模	ロコロナデ、底郷焼成灰		
6	TAI	S	2'	土 1804 層土	土師瓦	内丸輪	(25/2)		1/12			相模	内丸輪土、1 羅コナデ		
7	TAI	S	2'	惣土 51 部	灰泥部	器	(6/7)		2/5			相模	ロコロナデ、1 羅コナデ、灰泥部焼成灰、高台焼付		
8	TAI	NW	2'	惣土	土師瓦	皿 3C			1/8			淡灰	ロコロナデ、1 羅コナデ、龍部内丸ターム付		
9	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	皿 3C	(3/5)	(6/8)	3/4	1/8	1/8	相模	ロコロナデ、1 羅コナデ、底郷焼成灰、内丸ターム付		
10	TAI	S	2'	惣土 51 部	土師瓦	皿 3A			1/8			淡灰	手づくね、1 羅コナデ		
11	TAI	NE	2'	惣土	青磁	碗			1/8			相模	灰	ロコロナデ、1 羅コナデ、外器付龍部焼成灰、C Ⅱ 器、15c	
12	TAI	NW	2'	惣土	灰泥部	器鉢			1/8			淡灰	外器土器土、内器土、内面下半部焼、龍目焼成		
13	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	皿 3C			1/8			淡灰	乳白	ロコロナデ、1 羅コナデ	
14	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	内丸輪			1/8			相模	1 羅コナデ		
15	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	大形皿 1	(23/2)		1/13			相模	ロコロナデ、1 羅コナデ		
16	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	内丸輪	(32/5)		1/22			相模	内丸土、1 羅コナデ		
17	TAI	NW	2'	惣土	土師瓦	内丸輪		(25/0)		1/8		相模	内丸土、底郷焼付		
18	TAI	NE	2'	惣土	灰泥	器			1/8			相模	内面土、外器土		
19	TAI	S	2'	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗	(10/4)		1/8			淡灰	淡緑・茶陶	淡灰	ロコロナデ、1 羅コナデ、龍目
20	TAI	NW	2'	惣土	青磁	碗			1/8			淡灰	淡緑	淡緑	ロコロナデ、1 羅コナデ、丸部焼成、8 器、15c
21	TAI	NE	2'	惣土	青磁	碗	(12/2)		1/16			淡緑	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、内丸輪焼、E 器、15c	
22	TAI	NW	2'	惣土	青磁	碗	(16/0)		1/8			淡緑	白	ロコロナデ、1 羅コナデ、内丸輪焼、E 器、15c	
23	TAI	NE	2'	溝 1873 層土	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗			1/8			淡灰	淡緑・灰陶	淡	ロコロナデ、龍目土器土へ焼付、底郷焼成灰、底郷焼成、内面焼成、内面土、龍目土、龍目土
24	TAI	NW	2'	溝 1873 層土	占拠 <sup>1)</sup>	器鉢	(9/2)		1/8			淡灰	淡緑・相模灰	淡灰	ロコロナデ、底郷焼成灰、内丸輪焼、内器土、龍目土、龍目土
25	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	皿 3A	(7/0)		1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ	
26	TAI	S	2'	焼山岳道上	土師瓦	大形皿 1	(17/8)		1/12			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ	
27	TAI	S	2'	惣土 27 部	土師瓦	皿 3	(7/2)		1/2			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
28	TAI	NW	2'	惣土	土師瓦	皿 1	(9/0)		1/4			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
29	TAI	2	惣土	土師瓦	皿 3C	(5/4)		1/4	相模			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
30	TAI	N	2'	惣土	土師瓦	内丸輪	(00/0)		1/10			相模	1 羅コナデ		
31	TAI	NE	2'	惣土	土師瓦	内丸輪			1/8			相模	1 羅コナデ		
32	TAI	NE	2'	惣土	中津川	器			1/8			淡灰	淡	1 羅コナデ、龍目焼、龍目焼 2.2.0.、龍目焼、13c	
33	TAI	NW	2'	惣土	青磁	碗			1/8			淡灰	淡緑	淡	龍目焼
34	TAI	S	2'	焼山岳道上	白磁	碗			1/8			淡灰	淡	龍目焼	
35	TAI	S	2'	惣土 27 部	瓦質	磁器 <sup>2)</sup>			1/8			淡灰	淡	龍目焼、ナデ、1 羅コナデ、龍目焼	
36	TAI	S	1'	焼山岳道上	土師瓦	内丸輪			1/8			相模	1 羅コナデ		
37	TAI	NE	1'	惣土	土師瓦	皿 3B	(6/8)	(5/0)	2/3	1/8	1/4	淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、底郷焼成灰、龍部ターム付	
38	TAI	NE	1'	惣土	土師瓦	大形皿 1	(9/0)		1/4			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
39	TAI	1'	惣土	白磁	碗				1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、V 器、12c	
40	TAI	NE	1'	惣土	瓦質	磁器 <sup>2)</sup>			1/8			淡灰	淡	龍目焼	
41	TAI	NW	1	器 1862	土師瓦	皿 1A	(10/0)		1/10			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ	
42	TAI	NE	1	器 1862 下層	青磁	皿			1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、外器土、龍目焼、E 1 器、15c 焼付 16c 部	
43	TAI	NE	1	惣土	土師瓦	皿 2	(6/8)		1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
44	TAI	S	1	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗			1/8			淡灰	淡	龍目焼	
45	TAI	NE	1	近郊式土	灰泥部	杯 A	(6/4)		1/4			淡灰	淡	ロコロナデ、底郷焼成灰	
46	TAI	NE	2	器 1801 層土	土師瓦	皿 2C			1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、内器土	
47	TAI	NE	2	惣土	灰泥部	杯蓋 A	(18/0)		1/20			淡灰	淡	ロコロナデ、龍部コナデ、天日茶碗へ焼付	
48	TAI	NE	2	惣土	土師瓦	皿 3B	(6/4)	(5/0)	(1/8)	1/8		淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、底郷焼成	
49	TAI	NE	2	焼山岳	青磁	香炉 <sup>3)</sup>	(9/7)		1/18			淡緑	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、内丸輪焼	
50	TAI	NE	2	惣土	青磁	盤	(20/0)		1/16			淡緑	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、内丸輪焼、13c	
51	TAI	NE	2	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	鉢茶碗	(22/8)		1/4			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、龍目土器土へ焼付、龍目土器土、内器土	
52	TAI	W	1	器 1827 252 部 46 部	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗			1/8			淡灰	淡	龍目焼・龍目焼	
53	TAI	W	1	器 1827 252 部 35 部	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗		4.2				淡灰	淡	龍目焼・龍目焼	
54	TAI	NE	1	惣土	土師瓦	皿 2B			1/8			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ	
55	TAI	NE	1	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	香炉 or 香			1/8			淡灰	淡	龍目焼・龍目焼	
56	TAI	NE	1	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	夫海茶入	(6/8)		1/7			淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、外器土	
57	TAI	NE	1	惣土	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗	(12/4)	(4/0)	7.1	1/8	1/8	淡灰	淡	龍目焼・龍目焼	
58	TAI	SE	近郊式路 4 部	土師瓦	内丸輪	(31/8)		1/12				淡灰	淡	1 羅コナデ、内器土	
59	TAI	SE	近郊式路 4 部	土師瓦	皿 2B			1/8				淡灰	淡	手づくね、1 羅コナデ	
60	TAI	SE	近郊式路 4 部	土師瓦	皿 1A	(5/0)		1/4				淡灰	淡	ロコロナデ、1 羅コナデ、龍目土器土へ焼付	
61	TAI	SE	近郊式路 4 部	占拠 <sup>1)</sup>	天日茶碗	(4/2)		1/4	淡緑・龍目焼	淡灰		淡灰	ロコロナデ、1 羅コナデ、龍目土器土へ焼付、底郷焼成灰、龍目土器土		
62	TAI	NE	龍目	瓦質	火鉢			1/8				淡灰	淡	龍目焼	
63	TAI	NE	龍目	瓦質	磁器 <sup>2)</sup>			1/8				淡灰	淡	内丸輪焼	

① ( ) 内数字は測定値を表す。

7A1 トレンチ

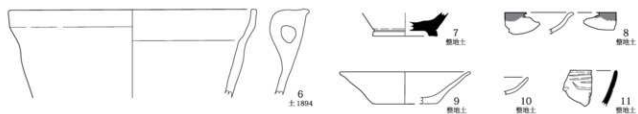
5面 (1~2)



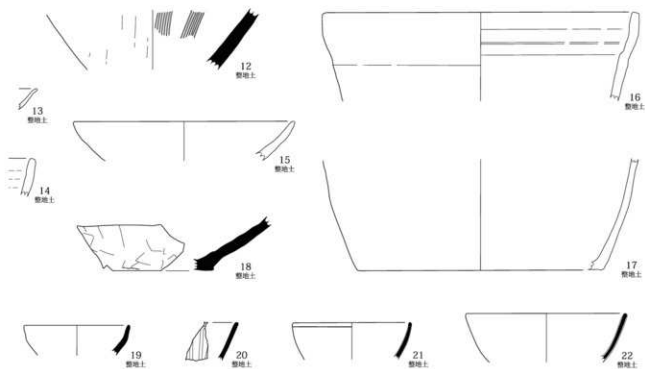
4面 (3~5)



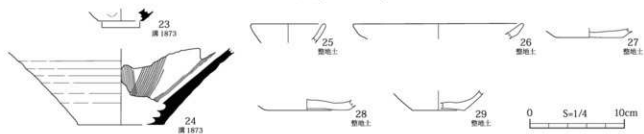
2'面 (6~11)



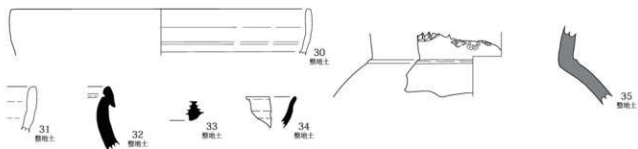
2'面 (12~22)



2面 (23~35)



第22図 焼物 (1)



1" 面 (36 ~ 40)



1 面 (41 ~ 44)

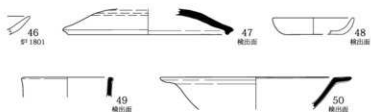


近現代 (45)



7E1 トレンチ

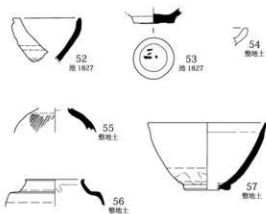
2 面 (46 ~ 50)



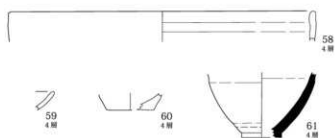
2' 面 (51)



1 面 (52 ~ 57)



近世以降 (58 ~ 61)



攪乱 (62 ~ 63)



第 23 図 焼物 (2)



## 2 石器・石製品（第27図、第6表）

今回の調査では、合計34点の石器・石製品が出土した。器種の内訳は、硯5点、砥石4点、石臼1点、石鏝1点、石錐1点、楔形石器1点、小形刃器1点、垂飾か1点、石核3点、二次加工ある剥片1点、微細剥離ある剥片1点、剥片10点、碎片3点、不明1点がある。これらのうち中世に帰属する可能性のある石製品で、比較的残存状態の良い6点を図示し、概要を記す。それ以外のもは一覧表を参照されたい。

硯（1～3） 1・2は、鳴滝産の石材が使われている。いずれも破損面を含め全体が被熱しているため、表面の観察が困難である。内・外形ともに長方形を呈している。また、1の縁部には、装飾と思われる2条の溝が観察される。3は、粘板岩製で、大きく欠損しているため、全体形は不明である。

砥石（4・5） 4は、砂岩製で、表裏面に砥面がみられる。石材の粒度から、荒砥と推定される。砥面は内湾しており、使用頻度が高かったと思われる。また、側面と小口面には整形痕が観察される。5は、頁岩製で、中～仕上げ砥が想定される。砥面は表面と側面の2面に見られ、側面には使用と思われる深い切り込みがある。裏面は、部分的に磨面範囲があるが、砥面として使用したのか、整形痕なのかは判然としない。

石臼（6） 安山岩製の石臼の縁部である。推定外径は約21cmである。

## 3 土製品（第24図）

11点が出土している。内訳は瓦1、羽口1、焼粘土塊9、うち瓦と羽口の2点を図示した。

瓦（3） 7A1トレンチ2面の礎石1851付近で出土した。平瓦の端部小片で上面側に面をとる。厚さは1.6cmを測り、0.5～4mmの砂粒を僅かに含む灰色のやや粗い胎土を呈する。表面は平滑で黒色処理を施す。本遺跡における中世の瓦の出土は、本例が初めてであり、小片とはいえ注意すべき遺物である。

羽口（4） 7A1トレンチ南区の2面で出土した輪の羽口である。外面のごく1部のみの出土であるが、復元径は5～6cmほどにならう。器面はナデ調整を行い、全体的に灰色に変色している。

粘土塊 7A1トレンチ北区の2～2'面で出土したものである。長さ2～4.5cmで、5点に藁スサの混入が認められる。壁材の可能性を残す。

## 5 金属製品（第24・25図）

金属製品は8点を図示した。内訳は鉄釘2、銅銭5、銅鏡1である。

鉄釘（5・6） いずれも中世の角釘で、7A1トレンチ北区の2'面で出土したものである。5は先端部を欠いており、現存長は5.3cmを測る。頭部を丸く折り曲げる巻頭の形状をなす。6は頭部、先端部ともに欠損しており、頭部の形状を知ることができない。現存長は2.3cmである。

銅銭（7～11） 7は7A1トレンチの排土より出土したものである。保存状態はきわめて悪く、潰れが酷いため銘が判読しづらいが、開元通寶と考えられる。8～11は7E1トレンチ出土の寛永通寶である。8・10は攪乱、9・11は近世以降の整地土から出土した。11は裏面に波紋様が描かれる四文銭である。

銅鏡（12） 7E1トレンチ西部に位置する池1827より出土した。青銅製の和鏡であり、擬漢式鏡の一種である。自然堆積層中から発見されており、池が自然に埋没していく過程で沈められたと考えられる。池の中で長く水に晒されていたためか、表面は錆びて脆弱化していた。また、堆積土中の鉄分が全体を皮膜状に覆っていることで、文様の判別が困難である。保存処理の際に錆の除去を試みたが、完全に取り去るには至らなかった。本鏡の評価については、久保智康氏に写真画像を見ていただいたところ、紋様の構成から年代まで多くの教示を得ることができた。以下の文章は、久保1999の分類に従い記述していくこととする。

本鏡の直径は11cmを測り、鏡胎は全体的に厚い。周縁の幅は4～5mmで、Ⅲ類に属する厚縁鏡である。鏡面はわずかに凸面をなすが、中央部は平らである。鏡背は外区に突出した珠紋帯をめぐらせており、擬漢式

鏡Ⅱ類に位置づけられるものである。珠紋帯の両側には僅かに縦線紋がみられるが、錆に覆われているため判読が困難である。内区と外区を区画する八花形の界圏は太い断面三角形を呈し、入り込みも明確である。内区は全面的に流水紋を施し、その上に花を散らす花筏の図像としている。花は残りの良い部分を観察すると、5弁で先端を尖らせようとする意図があり、桜花である可能性が高い。鏡背下部には雀とみられる双鳥が、頭部を上に向かい合って飛ぶ様子が描かれている。鈕は亀形を呈し、甲羅が丸く、表面に花亀甲紋を施す。鈕孔は中央部分でやや下降するが、開孔部は左右ともに同じ高さを保って貫通する。鈕孔の錆を除去できなかったため、紐の有無は未確認である。この亀鈕は頭を下向きに配置されており、下方の双鳥の嘴と接する。これらの構図を踏まえ、久保氏より本鏡に「花筏双鳥鏡」と命名していただいた。本例は珠紋帯の存在や八花形界圏の入り込み表現、亀鈕の甲羅が円形で花亀甲紋を施すことなど、擬漢式鏡としては比較的新しい表現がみられる。しかし、16世紀前半にかけて擬漢式鏡の小型化が進む中、本鏡は14世紀からの基準法量を保っている。これらを踏まえ、本鏡の年代は15世紀前半から中頃との年代観を示していただいた。なお、保存処理に際し蛍光X線による成分分析を実施したところ、本鏡は銅と錫の合金と判明した。また、鍍錫の根拠となる水銀は未検出であったが、表面の残存状況がよくないため、鍍錫の有無については判定することができなかった(第IV章第1節参照)。

## 5 木製品(第24図)

2点が出土した。内訳は下駄1と齋申木製品1で、うち下駄のみを図示した。

下駄(1・2) 7A1 トレンチ南区の深掘りサブトレンチ内、土塁盛土下の旧表土中から出土した。台は船底形を呈し、歯を柄で接合する露卯の差歯下駄である。片側縁が欠損しており、残存状態はよくない。長さ19.5cm、幅8.6cm、最大厚2.5cmを測り、表面に使用にともなう窪みがみられる。裏面は削り痕が残る。柄孔は前後1つずつで、出土時は後部すなわち踵側に差歯の柄が残存していたが、整理の過程で分離してしまったため、図では別番号を付与して掲載した。緒孔は中軸線よりもやや左に寄っており、右足用と推定される。緒孔の上部は欠損していた。1次調査では残存状態の良い下駄が3点出土しており、台は楕円形を呈している。長さは22～23cmで本例よりも僅かに大きい。緒孔は中軸線状に穿孔されていた。今回の出土下駄の樹種同定は行っていないが、1次調査出土の3点はキハダ、クリ、トネリコ属という分析結果を得ている(付録CD-ROMに分析結果を収録)。

### 参考文献

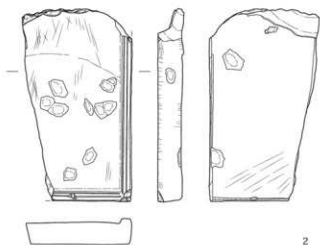
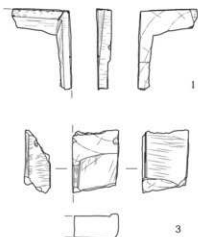
- 佐藤直子 1996 「法隆寺西門堂奉納の擬漢式鏡について」『MUSEUM』No.544 東京国立博物館
- 青木 豊 1997 「所謂擬漢式鏡に関する考察」『國學院大学考古学資料館紀要』第13輯 國學院大学考古学資料館
- 久保康康 1999 「日本の美術 394 中世・近世の鏡」至文堂
- 村木二郎 2016 「擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換」『十四世紀の考古学』高志書院

第6表 石器・石製品一覧表

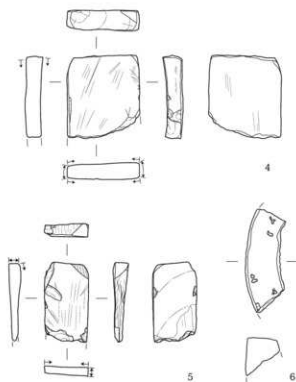
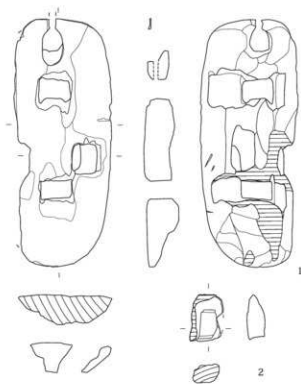
ID	図 No.	器種	地区	地点	面・ 段階	出土位置・ 層位	石材	備考
1		破片	7A1	NE	1面	土 1861	黒曜石	
2	4	砥石	7E1	NE	1面	整地土	砂岩	砥面2面(表裏面)
3		微細剥離ある剥片	7A1	S	1面	整地土	黒曜石	微細剥離 3 縁辺
4		破片	7A1	S	1'面	整地土	黒曜石	
5	6	石臼	7A1	NE	1'面	整地土	安山岩	上臼の縁部分か、推定外径 10.5cm
6		石核	7A1	NE	2面	溝 1873	黒曜石	打面3面以上
7		剥片	7A1	NE	2面	整地土	頁岩か	
8		石鏃	7A1	NE	2面	整地土	チャート	有茎凹基鏃
9		剥片	7A1	NE	2面	整地土	黒曜石	
10		剥片	7A1	NE	2面	整地土	頁岩か	
11		石核	7A1	NW	2面	整地土	黒曜石	打面3面
12		剥片	7A1	NW	2面	整地土	黒曜石	横長剥片
13		剥片	7A1	NE	2面	検出面	黒曜石	
14		砥石	7A1	NE	2面	東壁 ST	砂岩か	砥面1面確認
15		楔形石器	7A1	S	2'面	切岸検出面	チャート	
16		石錐	7A1	NE	2'面	整地土	黒曜石	錐部断面三角形
17		石核	7A1	NE	2'面	整地土	黒曜石	打面3面以上
18		二次加工ある剥片	7A1	NE	2'面	整地土	チャート	二次加工 1 縁辺
19		剥片	7A1	NE	2'面	整地土	黒曜石	
20		不明	7A1	NW	2'面	整地土	安山岩	被熱有
21		破片	7A1	NW	2'面	整地土	黒曜石	
22		剥片	7A1	NW	2'面	整地土	黒曜石	
23		砥石	7A1	S	2'面	整地土	砂岩	砥面1面確認
24		硯か	7A1	S	2'面	整地土	粘板岩	
25		剥片	7A1	S	2'面	整地土	黒曜石	
26		剥片	7A1	S	4面	整地土	不明	稜線の一部が磨耗
27		剥片	7A1	NE	近世以降	旧表土	チャート	横長剥片
28		垂飾か	7A1	NE	近世以降	旧表土	凝灰岩	穿孔有(両側から)
29		小形刃器	7A1	S	近世以降	旧表土	頁岩	削器
30	1	硯	7E1	NE	1面	整地土	鳴滝石	海部側一部のみ残、被熱有
31		硯	7E1	S	1面	整地土	鳴滝石	底部の一部のみ残、被熱有
32	2	硯	7E1	NE	2面	検出面	鳴滝石	被熱有
33	5	砥石	7E1	NE	2面	検出面	頁岩	砥面1面確認
34	3	硯	7E1	NW	2面	検出面	粘板岩	

※ ( ) 内数値は現存値を表す。

石器・石製品

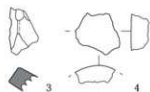


木製品



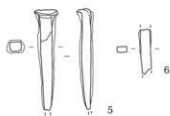
0 S=1/3 10cm  
石器・石製品・木製品：1/3

土製品

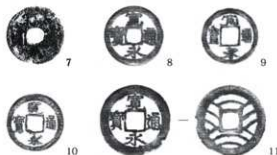


0 S=1/3 10cm  
3・4

金属製品



0 S=1/2 5cm  
5・6



0 S=2/3 10cm  
7~11

第24図 石器・石製品、土製品、木製品、金属製品（1）



0 S=1/1 5cm

第 25 図 金属製品 (2)

## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 7E1 トレンチ池 1827 出土擬漢式鏡の蛍光 X 線分析及び顕微鏡観察

(公財) 元興寺文化財研究所

#### 1 分析対象

擬漢式鏡 1点 (7E1 区池 1827 出土)

#### 2 分析内容

**蛍光 X 線分析** 背面、及び鏡面において各 1 点ずつ定性成分分析を行った (背面: A、鏡面: B)。分析箇所を図 1 に示す。

**顕微鏡観察** 鈕において残存有機物及び使用痕、縁において劣化状況の観察を行った (鈕: a、縁: b、c)。分析箇所を図 1 に示す。



図1 分析及び顕微鏡観察箇所 (A、B: 蛍光 X 線分析、a、b、c: 顕微鏡観察)

#### 3 使用機器

**蛍光 X 線分析** EA6000VX (株式会社日立ハイテクサイエンス)

蛍光 X 線分析は試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光 X 線を検出することにより試料の構成元素を同定する分析方法である。なお、金属表面の測定深さは 1nm 程度である。

測定は大気中で  $0.2 \times 0.2$  mm のコリメータを用い、管電圧 50kV、測定時間 120 秒で行った。なお、X 線ターゲットはロジウム (Rh) である。

**顕微鏡観察** コントローラ; KH-13000、レンズ; MX-2016Z (株式会社ハイロックス)

#### 4 結果

蛍光 X 線分析の結果、背面 (A)・鏡面 (B) ともに鉄 (Fe)、銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出され、それに加えて背面 (A) からは微量のヒ素 (As) が検出された (図 2、表 1)。表層の錆が剝がれた測定箇所 A に比べ、表層の錆に覆われた測定箇所 B の鉄の強度比が著しく高いことから、鉄は主に土壌成分によるものと考えられる。この結果より、擬漢式鏡は銅、スズ、鉛を主成分とする青銅製であると考えられた。また、測定箇所 A、B 以外の複数箇所でも蛍光 X 線分析を行ったが、水銀 (Hg) は検出されなかった。このため、鍍錫がなされていたかどうかは明らかにならなかった。

鉛の穴付近 (a) の顕微鏡観察を行ったが、残存有機物および使用痕は確認できなかった (図 3)。劣化が著しい緑部分 (b, c) の顕微鏡観察を行ったところ、劣化箇所では層状剥離が起きていることが確認された (図 4 左)。また、剥離の進行による亀裂が生じていることが確認された (図 4 右)。

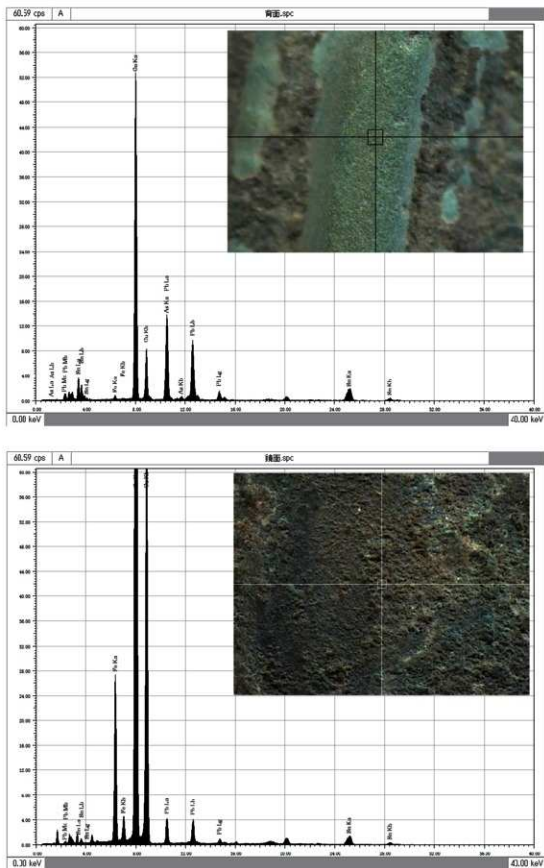


図 2 蛍光 X 線スペクトル (上: 背面 A, 下: 鏡面 B)

表1 蛍光X線測定強度

元素番号	元素記号	元素名	ライン	測定箇所A	測定箇所B
				強度(cps)	強度(cps)
26	Fe	鉄	K $\alpha$	16.673	457.139
29	Cu	銅	K $\alpha$	926.051	7315.314
33	As	ヒ素	K $\beta$	15.595	—
50	Sn	スズ	K $\alpha$	71.162	49.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	212.306	90.637



図3 顕微鏡観察結果 (a)



図4 顕微鏡観察結果 (左上:b, 右下:c)



## 第2節 7E1 トレンチ採取試料の自然科学分析

### 1 殿村遺跡における放射性炭素年代

(株) 加速器分析研究所

#### (1) 測定対象試料

測定対象試料は、7E1 トレンチで検出された整地土や土坑等から出土した炭化物6点である(表1)。試料1～3が15世紀代(14～16世紀)、試料4が14世紀代(14～16世紀)、試料5、6が14世紀代(14～15世紀)と推定されている。なお、同一試料の樹種同定が実施されている(別稿樹種同定報告参照)。

#### (2) 測定の意義

試料が出土した整地土や遺構およびそれらが属する造成面の年代を明らかにする。

#### (3) 化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### (4) 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### (5) 算出方法

- ①  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③ pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>13</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>13</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>13</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が<sup>13</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ<sup>13</sup>C補正を行い、下1桁を丸めない<sup>13</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、<sup>13</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

#### (6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の<sup>13</sup>C年代は、試料1が730±20yrBP、試料2が660±30yrBP、試料3が560±20yrBP、試料4が710±20yrBP、試料5が640±20yrBP、試料6が630±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、試料1が1265～1283cal ADの範囲、試料2が1285～1384cal ADの間に2つの範囲、試料3が1324～1415cal ADの間に2つの範囲、試料4が1271～1290cal ADの範囲、試料5が1294～1388cal ADの間に2つの範囲、試料6が1297～1390cal ADの間に2つの範囲で示される。推定される年代を含むものが多いが、若干古い年代を示すものもある。試料4は1σ暦年較正範囲では推定より若干古い、2σで見ると重なる範囲がある。試料1は2σ暦年較正範囲でも推定より若干古い。

試料の炭素含有率はすべて約60%以上の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

#### 文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果(δ<sup>13</sup>C補正值)

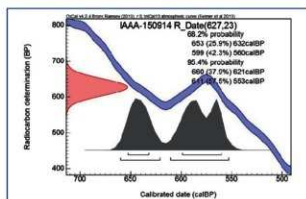
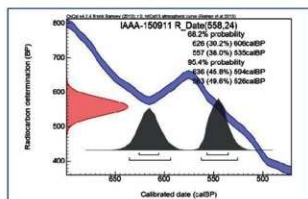
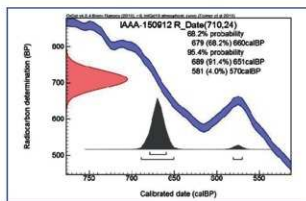
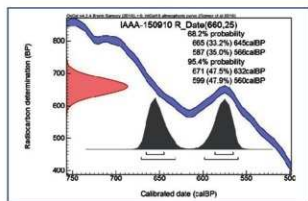
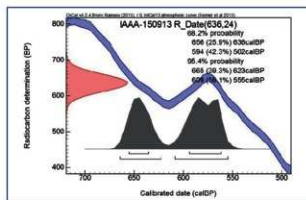
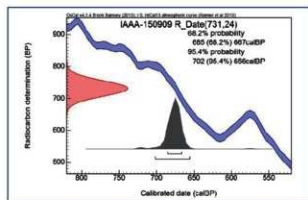
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS)	δ <sup>13</sup> C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-150909	試料1	北区東壁 1面整地土中層	炭化物	AaA	-27.8±0.3	730±20	91.3±0.3
IAAA-150910	試料2	北区東壁 1面整地土下層	炭化物	AAA	-24.9±0.6	660±30	92.1±0.3
IAAA-150911	試料3	南西拡張区 池1827 上層面37層	炭化物	AAA	-25.2±0.6	560±20	93.3±0.3
IAAA-150912	試料4	北東拡張区 2面・土坑1837覆土	炭化物	AAA	-28.5±0.7	710±20	91.5±0.3
IAAA-150913	試料5	東区 2面・P1815覆土	炭化物	AAA	-27.9±0.4	640±20	92.4±0.3
IAAA-150914	試料6	東区 2面・炉1801覆土	炭化物	AaA	-27.6±0.5	630±20	92.5±0.3

[#7417]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲		2 $\sigma$ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-150909	780 $\pm$ 20	90.78 $\pm$ 0.3	731 $\pm$ 24	1265calAD - 1283calAD (68.2%)	1248calAD - 1294calAD (95.4%)		
IAAA-150910	660 $\pm$ 20	92.14 $\pm$ 0.3	660 $\pm$ 25	1285calAD - 1305calAD (33.2%)	1279calAD - 1318calAD (47.5%)		
				1363calAD - 1384calAD (35.0%)	1351calAD - 1390calAD (47.9%)		
IAAA-150911	560 $\pm$ 20	93.24 $\pm$ 0.3	558 $\pm$ 24	1324calAD - 1344calAD (30.2%)	1314calAD - 1356calAD (45.8%)		
				1393calAD - 1415calAD (38.0%)	1387calAD - 1424calAD (49.6%)		
IAAA-150912	770 $\pm$ 20	90.88 $\pm$ 0.3	710 $\pm$ 24	1271calAD - 1290calAD (68.2%)	1261calAD - 1299calAD (91.4%)		
					1369calAD - 1380calAD (4.0%)		
IAAA-150913	680 $\pm$ 20	91.84 $\pm$ 0.3	636 $\pm$ 24	1294calAD - 1314calAD (25.9%)	1285calAD - 1327calAD (39.3%)		
				1356calAD - 1388calAD (42.3%)	1341calAD - 1395calAD (56.1%)		
IAAA-150914	670 $\pm$ 20	92.00 $\pm$ 0.3	627 $\pm$ 23	1297calAD - 1318calAD (25.9%)	1290calAD - 1329calAD (37.9%)		
				1351calAD - 1390calAD (42.3%)	1339calAD - 1397calAD (57.5%)		

[参考値]



図版 暦年較正年代グラフ (参考)

## はじめに

殿村遺跡で検出された室町時代の寺院に関わるとされる整地土や遺構内から出土した炭化材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

## (1) 試料

試料は、7E1 トレンチの整地土や遺構内から出土した炭化材 6 試料 (試料 1-6) である。このうち、試料 1 と試料 6 には 2 試料 (炭サンプル①、②) がある。試料の時期は、試料 1～3 は 15 世紀代 (14～16 世紀)、試料 4 は 14 世紀代 (14～16 世紀)、試料 5、6 は 14 世紀代 (14～15 世紀) と推定されている。

なお、これらの 6 試料について、放射性炭素年代測定が行われている。試料 1、6 については、いずれも炭サンプル①の個体を対象にして年代測定を行った。試料 5 は、土の中に炭化材の小破片が複数含まれており、そのうちの 1 片の年代を測定した。年代測定の結果、推定される年代に一致する結果が得られた試料が多いが、若干古い値を示したものもある (別稿年代測定報告参照)。

## (2) 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林 (1991) や伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) を参考にする。

## (3) 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。試料 5 には 2 種類が認められた。これらの炭化材は、針葉樹 2 分類群 (マツ属複雑管束亜属・モミ属) と広葉樹 4 分類群 (クマシデ属クマシデ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・サクラ属・エゴノキ属) に同定された。なお、試料 6 の炭サンプル②は、木材組織が認められず、種類および由来は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-20 細胞高。

・クマシデ属クマシデ節 (*Carpinus sect. Distegocarpus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は階段穿孔および単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高。実体顕微鏡下の観察では、集合放射組織と思われる組織が確認できる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

#### ・サクラ属 (Prunus) バラ科

散孔材で、道管は単独または2-6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

#### ・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

試料は割れた小片であり、年輪界が含まれていない。散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界方向に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

#### (4) 考察

炭化材には6種類が認められた。各種類の材質等をみると、針葉樹のマツ属複雑管束亜属は、二次林等に生育する常緑高木で、木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。モミ属は、山地等に生育する常緑高木で、木材は軽軟で割裂性が高く、強度と保存性は低い。広葉樹のクマシデ節、コナラ節、サクラ属、エゴノキ属は、山地や二次林などに生育する落葉高木～小高木で、木材は重硬で強度が高い。

遺構別に見ると、1面整地土は、室町時代の寺院に関わる造成盛土とされる。中層の炭化材には、モミ属とエゴノキ属が認められ、少なくとも2種類が利用されたことが推定される。一方、1面整地土下層では、クマシデ節が認められ、中層とは異なる樹種の利用が伺える。1面整地土中の炭化材については、炭化していることから、何らかの理由で火を受けたことが推定されるが、火を受けた背景等については不明であり、今後木材利用を検討する必要がある。

池1827上層面37層は、室町時代の寺院に関わる池状遺構(庭池)の上層(新段階)の底面堆積土とされる。出土した炭化材は、マツ属複雑管束亜属に同定された。

土坑1837は、室町時代の寺院に関わる造成面第2面にある土坑であり、覆土から出土した炭化材はサクラ属に同定された。

2面P1815は、室町時代の寺院に関わる造成面第2面にある浅い皿状のピットで、隣接する炉1802と一体の遺構である。出土した炭化材は炉で焚かれた燃料材の一部と考えられている。炭化材にはマツ属複雑管束亜属とサクラ属が認められ、少なくとも2種類が利用されたことが推定される。一般的に、重硬な木材ほど火持ちが良く、軽軟な木材ほど燃焼性が高く燃えやすい。この遺構では、燃焼性の高いマツ属複雑管束亜属と、比較的火持ちが良いと考えられるサクラ属が利用され、異なる材質の木材が混在していた可能性がある。

炉1801は、室町時代の寺院に関わる造成面第2面にある浅い地床炉である。覆土には焼土塊と炭化物が多く含まれている。この中の炭化材1点はコナラ節に同定され、もう1点は種類・由来不明の炭質物であった。コナラ節の木材は重硬で火持ちが良く、薪炭材としては国産材の中でも優良な部類に入るとされ、それらが地床炉で燃料材に用いられたことが推定される。また、炉1802と一体の2面P1815出土炭化材とは樹種が異なることも注目される。

#### 文献

林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) ,2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

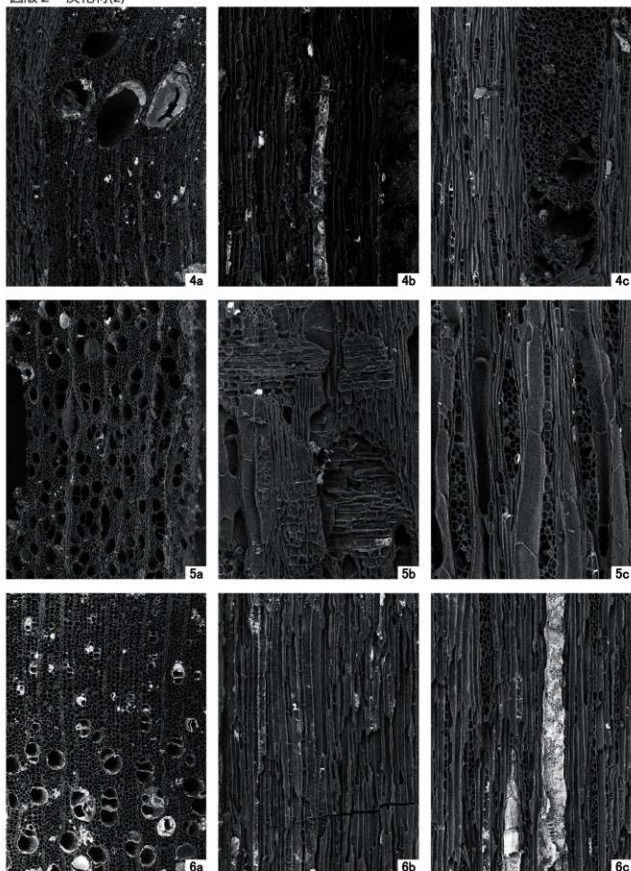
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) ,1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

※本分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

表1 樹種同定結果

試料No	地点	位置	遺構	層位	試料名	形状	種類
1	7E1トレンチ	北区東壁	1面整地土	中層	炭サンプル①	小破片	エゴノキ属
					炭サンプル②	小破片	モミ属
2	7E1トレンチ	北区東壁	1面整地土	下層	炭サンプル	小破片	クマシデ属クマシデ節
3	7E1トレンチ	南西裾張区	池1827	上層面37層	炭化材サンプル	小破片	マツ属複雑管束亜属
4	7E1トレンチ	北東裾張区	2面土坑1837	覆土	炭サンプル	小破片	サクラ属
5	7E1トレンチ	東区	2面P1815	覆土	炭サンプル	小破片	マツ属複雑管束亜属
						小破片	サクラ属
6	7E1トレンチ	東区	2面P1801	覆土	炭サンプル①	小破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
					炭サンプル②	小破片	不明

図版2 炭化材(2)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(Nb6;炭サンプル①)

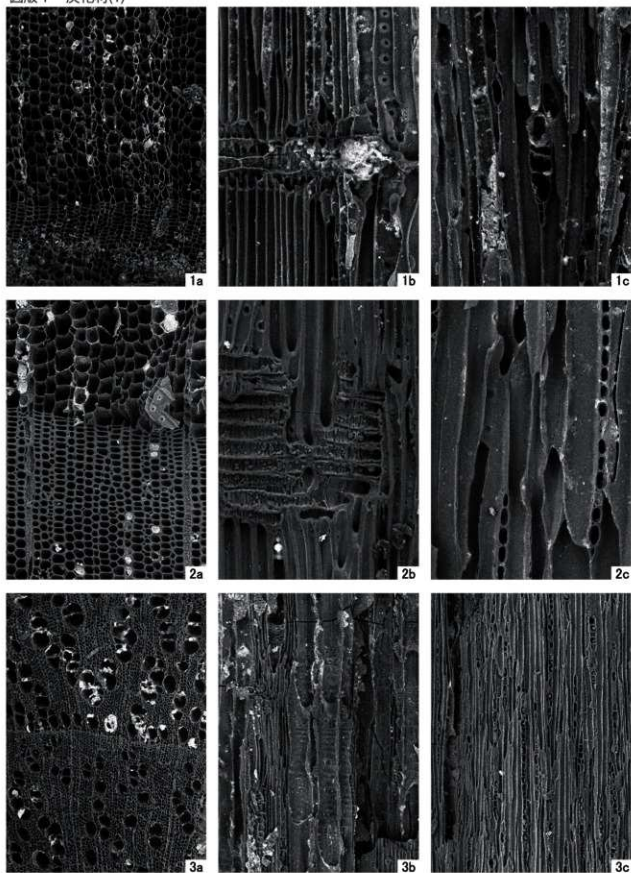
5.サクラ属(Nb4;炭サンプル)

6.エゴノキ属(Nb1;炭サンプル①)

a:木口,b:柁目,c:板目

100 μm:a  
100 μm:b,c

図版1 炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属(試料5;炭サンプル)  
 2. モミ属(試料1;炭サンプル②)  
 3. クマシデ属クマシデ節(試料2;炭サンプル)  
 a:木口,b:板目,c:板目

100 μm:3a  
 100 μm:1-2a,3b,c  
 100 μm:1-2b,c



## はじめに

殿村遺跡（長野県松本市大字会田字殿村地内）は、会田盆地と称される谷底平野に位置しており、筑摩山地を流れる会田川と保福寺川が合流する付近、虚空蔵山南麓に形成された谷内を流下する岩井堂沢の左岸に立地する。本遺跡は、平成 20 年度より発掘調査が実施されており、室町時代から戦国時代（15～16 世紀）にかけての造成跡が認められ、石垣や建物跡の礎石などをはじめ、陶磁器や木製品などが確認されている。

本分析では、殿村遺跡の 7 次調査で確認された池状遺構や中世の整地開始以前の旧表土の堆積環境（水域環境）に関わる資料の作成を目的として、珪藻分析を実施した。

## (1) 試料

試料は、殿村遺跡 7 次調査で採取された土壌 3 点（試料 001～003）である。試料の詳細（採取地点、調査所見など）は、一覧として表 1 に示したので参照されたい。

表 1 分析試料一覧

試料No.	出土情報				性状	備考
	調査次	地区	採取地点	採取遺構・層位等		
001	7次	7E1	西壁	池1827 上層面37層	土壌塊	池1827上層底面堆積物 (人為堆積または自然堆積の暗褐色シルト)
002	7次	7E1	池1827中央ベルト	池1827 下層面44層	土壌塊	池1827下層底面堆積物 (水成層と考えられる灰色シルト)
003	7次	7A1	中央ST東壁	中世以前旧表土	土壌塊	中世整地開始以前の旧表土層 (黒色土・縄文～中世の遺物包含)

## (2) 分析方法

湿重約 3g をピーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985-1991)、Desikachary (1987) などを参考とする。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。また、堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が 100 個体以上検出された試料については、珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する（図中の●印は、総数が 100 個体以上産出した試料うち 1%以下の種を、+印は総数 100 個体未満の場合の産出を示す）。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

## (3) 結果

結果を表 2、図 1 に示す。以下、試料毎に結果を述べる。

#### ア 池 1827 上層面 37 層 (試料 001)

池 1827 上層面 37 層は、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、100 個体以上が検出された。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態としては平均して極不良である。

検出された分類群は、淡水生種主体で二次化石と考えられる海水生種 1 個体を伴う種群で構成される。産出した種群の特徴は、淡水生種が最優占種群 (100 個体以上検出) であることから、淡水生の群集の生態学的特徴 (3 適応性: 塩分・pH・流水) について整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。

まず、塩分に対する適応性は、貧塩-嫌塩性種が優占し、全体の約 50 % を占める。この他、貧塩-不定性種が約 20%、不明種が約 30 % 程度認められた。次に pH に対する適応性は、酸性種が約 50%、アルカリ性種が 30% と不明種が 20% 程度の産出率を示す。流水に対する適応性は、流水不定性種が約 65 % を占めるほか、不明種が約 25 % 程度、流水性種と止水性種がそれぞれ約 5 % 程度認められた。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は陸域の乾いた環境の指標となるが、水生珪藻と陸生珪藻の比率は水生珪藻が約 90%、陸生珪藻が約 10% であり、水生珪藻が優勢である。

本試料に特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、流水不明種の *Eunotia* spp.、*Fragilaria* spp.、*Nitzschia* spp.、*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

#### イ 池 1827 下層面 44 層 (試料 002)

池 1827 下層面 44 層からは、珪藻化石が検出されたが極低率であり、認められた個体数は 19 個体と僅かである。化石の保存状態は、すべて半壊して破片状であるだけでなく、殆ど溶解してシリカの沈着が厚い部分が残っているにすぎないことから、状態としては極々不良である。

検出された分類群は、すべて淡水生種であり、海水生種あるいは汽水生種等は認められない。検出された種は、流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. 等と陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

#### ウ 中世以前旧表土 (試料 003)

中世以前旧表土は、ある程度の量の珪藻化石が含まれており、100 個体以上が検出された。化石の保存状態は、破損した殻が多いだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態としては極不良である。

検出された分類群は、淡水生種主体で極々低率に淡水-汽水生種および汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種群の特徴は、淡水生の群集の生態学的特徴について整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。

塩分に対する適応性は、貧塩-不定性種が全体の約 80 % を占める。その他、不明種が 15 % 程度、貧塩-嫌塩性種が約 5% の産出率を示す。次に pH に対する適応性は、アルカリ性種が約 75 % を占め、その他に不明種が約 15%、不定性種が約 7%、酸性種が約 3% 程度の産出率を示す。流水に対する適応性は、流水不定性種が約 85 % を占め、不明種が 15 % 程度認められる。

水生珪藻と陸生珪藻の比率は、水生珪藻が約 25%、陸生珪藻が約 75% であり、陸生珪藻が優勢である。

本試料に特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. 等と陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Hantzschia amphioxys* var. *capitata*、*Luticora mutica*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis* 等である。

#### (4) 考察

以下に、試料毎に推定される堆積環境について述べる。

表2 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	試料№.001	試料№.002	試料№.003
	塩分	pH	流水		池1827 上層面37層	池1827 下層面44層	中世以前 旧表土
<i>Kisseeleviella carina</i> Sheshukova-Poretzkaya	Euh				1	-	-
<i>Sarirella</i> aff. <i>brobisonii</i> Kramer & Lange-Bertalot	Meh			D1, E1	-	-	1
<i>Fallacia tenera</i> (Hust.) D. G. Mann	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	1
<i>Navicula cincta</i> (Ehr.) Ralfs	Ogh-Meh	al-il	ind	U, D, E	-	-	1
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	2
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind	O, U	-	-	1
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-Meh	unk	unk		-	-	1
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	3
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-
<i>Cybellina naviculliformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1
<i>Eumotis implicata</i> Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	-	-
<i>Eumotis moonodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	1-ph	O	1	-	-
<i>Eumotis pectinalis</i> (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O, T	1	-	-
<i>Eumotis pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	-	-
<i>Eumotis pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	47	-	-
<i>Eumotis praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	1-ph	RB, O, T	1	-	-
<i>Eumotis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		22	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	-	1	1
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		8	8	8
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	2
<i>Gomphonema angustum</i> C. Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	2
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	3
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	11	-	53
<i>Hantzschia amphioxys</i> var. <i>capitata</i> Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	-	-	17
<i>Laticoola mutica</i> (Kuetz.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	2	-	7
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	-	9
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	1
<i>Nitzschia palustris</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		-	-	1
<i>Nitzschia sigmoides</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	O, U	1	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	1-ph	N, O, U	2	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	4
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O	3	-	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	-	-	3
<i>Pinnularia viridiformis</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	N, O, U	1	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	6	3
<i>Placoneis oligensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	1	-	-
<i>Planolithidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	3	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	1
<i>Sarirella ovata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	1	-
<i>Sarirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1
<i>Sarirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	2
海水生種					1	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	1
淡水～汽水生種					0	0	6
淡水生種					121	19	126
珪藻化石総数					122	19	133

## 凡例

## [適応性]

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh : 海水生種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真正水性種
Euh-Meh : 海水生種-汽水生種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Meh : 汽水生種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-Meh : 淡水生種-汽水生種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-bil : 貧塩好塩性種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	unk : pH不明種	unk : 流水不明種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種		
Ogh-unk : 貧塩不明種		

## [環境指標種]

A:外洋指標種, B:内湾指標種, C1:海水藻場指標種, C2:汽水藻場指標種, D1:海水砂質干潟指標種, D2:汽水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種, F:淡水底生種群(以上、小杉,1988)  
G:淡水浮遊生種群, H:河口浮遊生種群, J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種群,  
M:湖沼浮遊性種, N:湖沼沼沢湿地指標種, O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種群, Q:陸域指標種群(以上、安藤,1990)  
S:好汚濁性種, U:広適応性種, T:好清水性種(以上、Asai and Watanabe,1995)  
R:陸生珪藻(RA-A群、RB-B群、RI:未区分、伊藤・堀内,1991)



#### ア 池 1827 上層面 37 層 (試料 001)

本試料に特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、流水不明種の *Eunotia* spp.、*Fragilaria* spp.、*Nitzschia* spp.、*Pinnularia* spp.、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* 等である。

これらの特徴的に認められた種の生態性または生育環境は、まず流水不定性種の *Eunotia pectinalis* var. *undulata* は、湿地に多産する種とされる(埼玉県教育委員会、1962)。次に、*Eunotia* spp.、*Fragilaria* spp.、*Nitzschia* spp.、*Pinnularia* spp. は、それぞれ数種類で構成されるが、これらの属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。さらに、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys* は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉、1986)であり、とくに本種は離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる群集とされる(伊藤・堀内、1989; 1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占(70~80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

以上の特徴種やその他の種群の構成を総合的に解釈すると、試料の採取された層準の堆積時は概ね湿地のような環境下にあったものと推定される。

#### イ 池 1827 下層面 44 層 (試料 002)

本試料は、珪藻化石の産出率が極端に低いため、珪藻化石群集の組成から堆積環境の推定を行うのは困難であった。ただし、認められた種群と産状等を基に若干の考察を行うと以下のように考えられる。

本分析結果のように化石の産出率が低く、化石の保存状態も極めて不良である場合の堆積時の環境は、経験的には、水域ではなく、好氣的な環境である場合が多い。陸地の低地などにおける好氣的環境、すなわち大気に曝された場所での堆積は、通常はほとんど堆積は無いに等しいが、低地などの場合、河川等の氾濫によって堆積が進行する。その場合、堆積速度が速いために、堆積物中の化石の絶対量は少ない傾向にある。また、群集は集水域に生育した種群を巻き込んでくるために、総じて混合群集を示す。

なお、本試料が採取された層準については、調査所見によれば、水成層とされている。この点を踏まえると、堆積速度が早く、珪藻化石が取り込まれにくかった可能性が考えられるほか、上記した化石の産出率や保存状態から、地下水位が低く、大気に曝されるような好氣的環境にあったため、その多くは分解・消失した可能性なども考えられる。

#### ウ 中世以前旧表土 (試料 003)

本試料に特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. 等と陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Hantzschia amphioxys* var. *capitata*、*Luticora mutica*、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis* 等である。

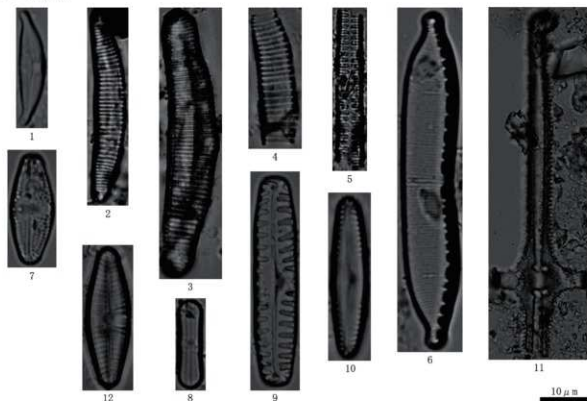
これらの種群の生態性は、流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. 等は、いずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。一方、本試料から検出された陸生珪藻のすべての種は、前述の *Hantzschia amphioxys* と同様であり、離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる種である。

本試料に認められた珪藻化石群集は、陸生珪藻が優勢となる状況から、若干の湿り気があるものの、基本的には地下水位が低く好氣的環境であったことが推定される。

#### 文献

Asai,K.& Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42(1990),73-88, aNN.Tohoku Geogr.Assoc.
- Desikachary,T.V.,1987,Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation, Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited,328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras-600044. 1-13,Plates:401-621.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫,1996,珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について —混合群集の認定と堆積環境の解釈—.日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集,62.
- Horst Lange-Bertalot,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA:Annotated diatom micrographs.Witkowski,A., Horst Lange-Bertalot,Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume1.219 plts,4504 figs,925 pgs.
- Hustedt,F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part1,920p.
- Hustedt,F.,1937-1938,Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java,Bali und Sumatra.I-III.Arch.Hydrobiol.Suppl.,15,131-809,1-155,274-349.
- Hustedt,F.,1959,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part2,845p.
- Hustedt,F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete.in Dr. abenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs und der Schweiz,7,Leipzig,Part3,816p.
- 伊藤良永・堀内誠示,1989,古環境解析からみた陸生珪藻の検討 —陸生珪藻の細分—.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,17.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 小杉正人,1986,陸生珪藻による古環境の解析とその意義 —わが国への導入とその展望—.植生史研究,1,9-44.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,(1),1-20.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae.Bibliotheca Diatomologica,vol.9,250p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa,2(1),876p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2),596p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3),576p.
- Krammer,K.and H.Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae,Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4),437p.
- 埼玉県教育委員会,1962,埼玉県植物誌.埼玉県教育科学振興会,289-313.



1. *Amphora montana* Krasske(中世以前旧表土;試料003)
2. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst(池1827上層面37層;試料001)
3. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst(池1827上層面37層;試料001)
4. *Eunotia* spp.(池1827上層面37層;試料001)
5. *Fragilaria* spp.(池1827上層面37層;試料001)
6. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow(中世以前旧表土;試料003)
7. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(中世以前旧表土;試料003)
8. *Navicula contenta* Grunow(中世以前旧表土;試料003)
9. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(中世以前旧表土;試料003)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory(中世以前旧表土;試料003)
11. *Pinnularia* spp.(池1827上層面37層;試料001)
12. *Planolithidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot(池1827上層面37層;試料001)

## 第V章 第7次調査のまとめ

第7次調査は、これまで調査を継続しているAゾーンに存在する平場遺構の構造確認に加え、新たに長安寺本堂跡地における中世遺構の確認を目的に実施した。その結果、前章に収録したように多くの成果を得ることができた。そこで、本章では成果と課題の中から2点に絞って考察し、本調査のまとめとしたい。

### 1 Aゾーン平場南縁部と石積前空間の構造について(図1~5)

1次調査で初見となった石積Aは、4面段階の平場南面に沿って設けられた土塁と相対する狭長な空間(石積前空間)に伴う石積であると解釈された。また、この空間の中部~東部には木質遺物を多含する水成堆積の灰色シルトが厚く堆積していたことから、ある段階において水を湛える施設であった可能性が高く、その点について調査を重ねる中で追求してきた。その結果、段階的に修築や追加を重ね上昇した底面や石積(A・B1・B2・B3・F)、土塁の新旧関係から、本遺構は少なくとも3面段階においては四方が石積・土塁で囲まれた長大な池状の施設と理解すべきものであったことが明らかになった。とりわけ遺構東部の状況については、5次調査において多くの知見が得られ、報告書において4面段階から3面段階に至るまで4段階の変遷を経て、2面段階に至って完全に埋め立てられることを述べた。

具体的には、石積前空間の東部は、4面段階においては少なくとも調査範囲においては閉塞されていなかった可能性が高いこと、また、3面古段階に至って石積B2により閉塞され、その後B3→Fと修築が進み、F段階では北面の石積A・B1が上部を除きほとんど埋められ、緩く南下する法面とされることを確かめた。

そこで、今回の調査では、西端部における状況確認を主眼に調査地点を選定した。その結果、相対する位置にある5A1トレンチの調査結果と概ね整合する所見が得られた。以下、図1に示す構造と変遷のモデルに従い、石積前空間の変遷を記しておきたい。

#### ① 4面段階

石積A・B1南に相対する土塁(天端に石積Cを構築)で規定された石積前空間は、西端では石積Aとともに底面がスロープ状に上昇して終焉する。東側は少なくとも1次調査区東端までは延長するであろう。一方、平場中央付近で石積及び土塁の軸線に屈折がみられ、また石積A・Bが食い違いに築造されている点気になるが、この点については1次調査時のトレンチ掘削に伴って多くの土層情報を失ってしまったこともあり、明確な理由は明らかにできなかった。現状では4面段階で一括するが、これらの在り方が時間差を示す可能性は含んでおくべきである。なお、4面段階の時期は、15世紀前半から中頃が考えられる。

#### ② 3面段階(5次3面古・中段階)

空間の東西が石積で区画される段階である。西端は前段階のスロープ南半に石積Iが設けられる一方、東端においても石積B1と土塁の間が石積B2で閉塞され、さらに時間差を置いて石積B3に改められる。これに伴って前段階で一段低い面(窪地状地形面)をなしていた平場東部は石積前空間とともに大規模な埋め立てが実施され、同一面の平場が形成される。また、この改修に際して、石積Aも崩落に伴う修築によるものか、中央付近を中心に積み直しが施される(1次調査概報においてb・dとした範囲)。

本段階における石積前空間の規模は、長さ(石積I-石積B3)28.7m×幅(石積A-土塁天端石積C)8.2mとなり、底面の深さは最大1.3mで、なおかつ全体に土塁側が深く造られる。また、最深部付近は6D2トレンチでも確認された廣田寺方面から南下してくる地下水脈(埋設流路か)の延長上にあたる。そのため、調査時において滞水が見られ、当時も同じ状況であったと考えられる。その結果として、本段階までの底面堆積土中には木質遺物が多含されることとなった。本段階は、時期的には15世紀後半とみられる。



### ③ 2" 面段階 (5次3面新段階に相当)

北側から空間の埋め立てが行われ、北側法面は石列39や石積Fを法尻とするスロープ状を呈する形状となる。その際、石積Aは中位以下が埋没した。1次Fトレンチから検出された石列13及びその背面に施された集石1は層位的に本段階に位置付くことが判明し、とりわけ石列13と石列39は一連の遺構の可能性が高い。従って、本段階においては、石積前空間の最深部は、石列39・13と土塁で区画された西寄りの領域と石積Fと土塁で区画された東寄りの領域に二分され、中央付近は土橋状の高まりになっていたことが想像される。また、石積F付近では岸近くの法面に景石を思わせるような巨礫の据え付けも見られ、石積前空間は前段階から一変した姿を見せることとなった。なお、本段階の時期は古瀬戸後Ⅳ新段階まで、すなわち15世紀後半のうちに収まるとみられる。

### ④ 2" 面段階以降

本段階に至って、石積前空間は完全に埋め立てられた。その際、土塁南空間も埋め立てが進行し、法面は次第に高低差を失っていった。法尻には古い段階の石積Dに代わって石列27や石列35が設けられ、最終的にはこれらも埋め立てられて1面段階を迎えることとなった。本段階は時期的には大窯が出現する15世紀末以降となろう。

こうした複雑な変遷をたどる石積前空間の機能については、既にこれまでの報告で触れてきたところであるが、4面段階すなわち大型の石材を石積に用いる築造当初の段階においては、石積そのものに見せる意識を強く感じさせる。その上この段階にはまだ空間を閉塞しようとする意図が希薄で、石積の前を通過して平場西部に至る通路空間の可能性も残しておくべきと考える。しかし、続く3面段階には石積と土塁で空間を囲い込む意識が顕在化することから考えて、長方形の池を想定せざるを得ない。堆積土内からは焼物、木製品、石器・石製品が出土するが、焼物や石製品はもとより、豊富な木質遺物においても漆碗や下駄、曲物といった生活用具が非常に少ない点を指摘しうる。反面、祭祀具とみられる串ないし箸状の木製品(第2次報告から斎串状木製品と呼称)や形代、端財や削り屑が多出する傾向が窺え、こうした遺物の在り方が石積前空間や周辺の平場上における諸活動を示唆することは間違いない。

平場の前面に長大な池を備えた施設とは何か、調査事例が少なく特異な遺構と言わざるを得ないが、宗教施設として、放生池のような方形基調の池が境内の入口近くに設けられる例が禅宗寺院を中心に多くみられる。また、古くは『一遍聖絵』の寺院風景にも池が描かれている。石積前空間もそうした寺域内にみられる池の一種としての可能性を考えたいが、平場の縁に接して位置する不自然な在り方をどう理解すべきか等、建物等も含めた空間利用をあらためて検証したうえで、平場の性格とともに考究する必要がある。

## 2 7E1 トレンチ検出遺構と長安寺について

第Ⅱ章で述べたように、殿付遺跡の一角に存在する長安寺は、鎌倉時代後期に会田氏主導の下で蘭溪道隆によって中興開山された臨済宗寺院と伝わる。繰り返しになるが、寺伝によれば往時の伽藍は第1次調査地点を含む旧会田中学校敷地全体に及ぶ規模であったが、天正10年(1582)の会田氏滅亡により寺勢が衰退し、その後寛文10年(1670)に現在地で再興を果たしたという。中世における長安寺の様子を伝える資料は室町時代制作と推定される伝蘭溪道隆頂相像と天正9年の『信濃国道者之御かくり日記』以外にはない。また、寺伝に従えば臨済宗寺院としての開山の後に会田氏により虚空蔵菩薩が安置され、奥院である虚空蔵山頂上直下の岩屋社が開かれたといい、その前後関係をめぐって寺伝の信憑性に疑問が生じるため、往時の伽藍についての伝承も慎重に見極めなければならない。

これまで、6次にわたる発掘調査では、旧会田中学校敷地である1次調査地点をはじめ、旧長安寺本堂の南下に広がる中学校第一校舎周辺でも室町時代の平場を検出している(2次調査)。盛土下層からは13世

紀代の青磁碗も数点出土しており、一帯における活動が鎌倉時代まで遡ることが明らかである。これらの遺構が時代の重なる長安寺に深く関わるものであろうことは容易に想像がつくが、考古学的な見地からは両者を直接的に結び付ける材料は得られていない。そうした点を踏まえて、今回、長安寺本堂跡地における造成の開始時期が近世の再興以前に遡るのかどうかを確認する目的で調査を行うことになったものである。なお、調査は現地が更地化されたことで実現できたが、本堂については解体前に建立年の確認や建築学的調査が行えなかったうえ、整地作業によって基壇と中世1面までの情報が失われるという結果を招いてしまった。

調査の結果、7E1 トレンチは虚空藏山から延びる尾根末端に開口した小谷を利用して平場を設けていることが判明した。これまで調査を実施してきた岩井堂沢の崖線性地形面に連続する平場群とは異なり、小規模とはいえ三方を尾根で囲まれ、周囲から独立した空間を構える点に中世の山の寺に特有の立地観が見える。そして、年代的には2面において古瀬戸中Ⅳ期～後Ⅰ期、すなわち14世紀中葉～末に遡る陶器類が伴っており、放射性炭素年代もそれを支持している。従って現段階で確認された平場跡の中では最も造成開始時期が古いものとなった。

2面段階における遺構の検出状況はまだ全容の把握には遠いものの、1面段階よりひと回り狭い平場の中央奥寄りに礎石建物があり、手前には炉跡が複数取り巻いていた。また、建物跡南側一帯は法面に至るまで遺構の希薄な空間が広がっている。こうした景観から想像を逞しくすれば、1棟程度の小堂からなる寺院空間を見出すことが可能と思われる。続く1面段階は、遺構面の大半を失い建物の把握は困難であるが、平場西部に池1827が設けられる。岸を巡る石列・石積に出入りがみられ複雑な形となる。さらに穿った見方をすれば、底面の泥岩が見せる縞状の層理を巧みに景色に取り入れているようにも受け取れる。また、新段階においては、北辺には黒色の玉石敷きが施される。

こうした遺構各部の在り方から、本遺構は鑑賞を目的とした庭園に付随する池と考えるのが妥当であろう。珪藻分析の結果はあまり顕著な傾向は示さないものの、古段階の堆積土は穏やかな水中で堆積が進行した状況を示すシルト層であり、導排水施設は未検出ながら遺構各所の在り方から見ても滞水した池であろう。また、興味深い点として、この層中から鏡面を下に向けた擬漢式鏡1面が出土した。鏡を覆う容器等は観察されず掘り方も伴わないことから、池底に堆積しつつあったシルト層上に意図的に置かれたものと捉えられる。池から出土する鏡の顕著な例は羽黒山出羽神社の鏡池における池中納鏡が知られるが、本例も同様な儀礼に基づく納鏡行為と考えたい。ちなみに、久保智康氏の鑑定により本鏡には15世紀前半の年代が与えられた。池1827にともなって出土した陶器の下限は古瀬戸後Ⅲ期の天目茶碗であり、土壌中から採取した炭化物の放射性炭素年代も14世紀末～15世紀初頭を示した。これらのことから、1面の年代は2面に継続する15世紀初頭以降と判断される。このように、1面段階の平場の景観についても、多くの情報を失ってはいるものの、15世紀を中心とする小規模な池庭をともなった小堂からなる空間が想像されよう。

7E1 トレンチの発掘調査によって、近世以降の長安寺が一帯に広がる坊跡等の平場の一つに堂を構えていたことが明らかになった。この平場が選地された理由に至っては想像の域を出ないが、第一には本地点が会田宿から真っすぐに参道を登り詰めた、尾根を背景とした眺望のよい高台にあり、小堂宇を構える寺院としては都合のよい立地だったことが考えられる(第8図参照)。こうした立地上の特徴は中世においても同じことが言えるのであり、1次調査地をはじめ広大な緩斜面上に連続する他の平場とは一線を画し、狭い領域ながらも山に抱かれた独立性の強い空間であったことが、この平場の性格を物語っているものと理解しておきたい。

最後に、本調査の実施を快諾いただいた長安寺関係者の皆様、調査に惜しみないご理解とご協力をいただいた会田新町町会をはじめとする地域の皆様、そのほか多くのご指導・ご助言をいただいた皆様に感謝を申しあげ、本書の締めくくりとする。





石積 A・B1・B2・B3 全景 (1次調査)



石積 A 西半部全景 (1次調査)



石積 A 西半部① (1次調査)



石積 A 西半部② (1次調査)



石積 A 西半部③ (1次調査)

図2 石積前空間の検出状況 (1)



石積 A 東端部及び石積 B1・B2・B3 (1次調査)



石積 A 東部① (1次調査)



石積 A 東部②・石積 B1 西半部 (1次調査)



石積 B1 東半部 (1次調査)

図3 石積前空間の検出状況 (2)



石積 B2・B3 南部及び土壘・石積 C (5 次調査)



土壘・石積 C 中央部 (左・右下：2 次調査、右上：1 次調査)



土壘西端部 (7 次調査)

図 4 石積前空間の検出状況 (3)



石積 F (5次調査)



石列 39 (7次調査)



石列 13 (1次調査)



石積前空間東部の土層堆積 (1次調査・E-W)



石積前空間西部の土層堆積 (1次調査・E-W)

図5 石積前空間の検出状況 (4)